
空の欠片

嘘の欠片

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の欠片

【Nコード】

N5897Q

【作者名】

嘘の欠片

【あらすじ】

1年前学校で倒れ、それ以来ずっと入院している少女、琉嘉と小さい頃から心臓が弱い少年、玲斗の恋愛ストーリー。

但し、恋愛要素は結構低いです。でも、一応恋愛モノの予定です。

日常（前書き）

処女作です。

感想いただけると喜んで続きの執筆を行います。

誤字脱字を見つけたときはお知らせ願います。

日常

空を見上げた。

屋上で見る空は、毎日違っていて飽きることはない。

だから、私は晴れた日は毎日此処へ来た。

反対されても、こっそりと此処へ来た。

今日も、空は青くて、綺麗だ。

* * * *

『ガチャッ』という音を立て、屋上の扉が開く。ドアのほうに目を向けると、一人の女性が立っていた。

「やっぱり此処にいたね、琉嘉ちゃん。探したよー？さ、点滴の間だよ。一緒に部屋に戻る？」

「…ゴメンナサイ。時間忘れてずっと空見てた」

「うん、次からは気を付けてね？」

「はい」

私の名前は片桐琉嘉^{カタギリルカ}。13歳の中学2年生。中学に入学してすぐに学校で倒れてから、この病院に入院している。

病名は、知らない。誰も教えてくれなかったし、聞くとも思わないから。それに、聞いても理解が出来ないのならば、意味もない。とりあえず、倒れたときに心臓が痛かったから、悪いのは心臓なんだということだけは分かっている。

「琉嘉ちゃん、手出して」

病室に戻ると、看護婦さんが私にベッドに横になるよう促し手を
出すよう言う。

そして、私が大人しく手を出すと、消毒液のにおいが鼻を衝く。
入院して何度もこのにおいを嗅いでいるが、未だに慣れない。

そのにおいに辟易し顔をしかめていると、看護婦さんが話しかけ
てきた。

「このにおい、そんなにイヤなの？」

「うん。堤さんはよく平気だね」

ちなみに堤さんとは看護婦さんの名前である。

「それは、ねえ。人を助けるのに必要なものなんだし。それを医療
従事者が嫌がってたらダメでしょう」

「そんなものなの？」

「そんなものよ。…さ、点滴入れるよ。力抜いて」

そう言われてすぐ、腕に痛みが走った。我慢できる痛みではある
が、ないほうがいいことに変わりはない。

そうして顔をしかめていると、堤さんが私の頭を軽く撫でた。

「さ、終わったらまた来るからね。それまで病室で大人しくしてる
よーに。いいね？さつきみたいに歩いちゃ、ダメだよ」

「はい。分かってます」

そう言って、堤さんは病室から出て行く。それを確認した私は、
近くに置いてある本を取り、ページを開いた。

本は、好きだ。本は、色々なことを教えてくれるから。私は小学
生の頃から本を読むのが好きだったが、中学生になって読む量が増

えた。

理由は、入院したから。病院は暇だから、今まで以上に読むようになった。

持っている本も増えた。おじいちゃんやおばあちゃんがこっちに遊びに来るたびに買って来てくれるからだ。毎回買ってこなくてもいいよ、と言っても、おじいちゃんたちは買って来る。

まあ、正直ありがたいからいいのだけれど。

そして私は点滴の落ちる音をBGMに、開いていた本に目を向け読書に励んだ。

ポタツ　ポタツ　ポタツ　……………。

定期的に聞こえていた音が、不意に音を止める。定期的な音、それは点滴の落ちる音。それが止まったということは、点滴が終わったということだ。

それに気が付いた私はナースコールを押し、点滴の終了を知らせた。知らせるとすぐに、堤さんが来て、点滴を抜いてくれる。

「ゴメンね、待たせて」

点滴をゆつくりと抜きながら、堤さんは言う。

「…そんなに待ってないよ？」

堤さんを見ながら言うと、堤さんは優しく微笑んだ。堤さんの笑顔は、いつ見ても落ち着く。

そして、点滴が抜かれて、またもあの嫌なおいが漂ってきた。

それは、消毒液のにおい。点滴の針が刺さっていたところをきちん

と消毒しておかないといけないのは分かるけれど、やっぱりこれにおいは嫌いだ。

私がそう思っているのに気が付いたのか、堤さんは申し訳なさそうな顔をして、針の刺さっていた場所を丁寧に消毒液の染み込んだガーゼで拭いた。

その後、私は堤さんに本日の屋上禁止令を喰らい、仕方なく病室で本を読んで過ごした。

ちなみに、屋上禁止令の理由は、『気温が下がってきて寒いから今日はもうダメ』とのこと。確かに外を見ると、外はさつきと比べて暗くなってきた。

空が、少しずつ、オレンジ色に染まる。太陽が沈む。

私はこの時間が一番嫌いだ。綺麗ではあるが、見ていると切なくなり、たまに涙が流れる。目頭が熱い。今日も泣いてしまいそうだ。

コンコンツ

そう考えていると、病室の扉が叩かれた。私は急いで涙を拭う。

間一髪。間に合った。

開かれたドアの向こう側にいたのは、お父さんとお母さんだった。二人とも仕事帰りにそのまま寄ったのだろう。スーツ姿だ。

「いい子にしてたか、琉嘉？」

「あら？目が少し赤いわよ。どうかしたの？」

「えっ！？な、何にもないよー」

言えない。夕焼けを見ていて泣いたのだとは、絶対に。

そんな私の状態を知ってか知らずかお母さんは意地悪な笑顔を私に向ける。

「本当に何も無いの？怪しいぞー？」

「本当だよ！何も無い」
「そっかー。それは残念」

：何が残念なのかは敢えて考えないことにしよう。

そしてその様子をニコニコ微笑みながら見ていたお父さんは、持つてきていた荷物をベッドの上に置いた。中身は何なのだろうか。そうしてその荷物をジッと見ているとお父さんが口を開いた。

「琉嘉。おじいちゃんたちが本を送ってきてくれたよ。手紙も入ってた。後で読みなさい。それと、お礼の手紙を認め^{したため}なさい。明日の夕方、お父さんが取りに来るからそれまでにな」
「うん！」

言われて見てみると、確かに本が5冊ほど入っているようだ。それにしても、送ってきてくれたのは初めてだ。一体、どうしたのだろう。

私はそう思いながら手紙を受け取り、開ける。中には便箋が2枚入っていた。1枚はおじいちゃんから。もう1枚はおばあちゃんからだった。

琉嘉へ。

突然本を送ってきて、びっくりしただろう？実は、近所に高校生の孫のいる友達がいるな、その子が読まないからと言って、その友達に貰い手を捜してくれるよう頼んだらしい。で、それで年頃的にも琉嘉にちょうどいいかと思って、譲り受けた。

今回はとりあえず5冊送ったが、まだある。読みたいなら、お父さんに言いなさい。それをおじいちゃんが聞いたらすぐに送るから。少しずつ気温が下がっているが、くれぐれも、風邪などひかぬよう体調管理をしっかりするように。おじいちゃんより。

琉嘉ちゃんへ。

ほとんど気温が下がり、日々の生活が辛くなってきていますね。琉嘉ちゃんは体調を崩さずに過ごせていますか？おばあちゃんは無事、風邪などひかずに過ごしています。もちろん、おじいちゃんもね。

今回は、突然本が送られてきてびっくりしたでしょう？おばあちゃんは今度会いに行くときに持って行こうと思っていたのですが、おじいちゃんが早く読ませてやりたいと言ったので、郵送しました。琉嘉ちゃんが楽しんでくれると嬉しいです。

話は変えますが、おじいちゃんからの手紙は読みましたか？読んでいるのなら、この本をくれたのが誰だか分かっていますね。読んでいないのなら先に読んでからこの先を読んでください。

読みましたね。では、話を進めます。今回本をくれた子ですが、私は以前から面識がありました。なので本を持ってきてくれたときにお話をしたのですが、そのときに彼女がこう言っていました。

『琉嘉ちゃんに会いたい』と。

恐らく、その本についての話などをしたいのでしょう。ですから、近いうちに彼女を連れて会いに行きます。楽しみに待っていてくださいね。おばあちゃんより。

追伸。

本ばかり読んで、勉強を怠ってはいけませんよ。

「お父さんたちは知ってたの？」

「何をだ？」

「おじいちゃんたちが本を送ってくれた理由」

お父さんは突然の私の問いに少し戸惑っていたが、すぐに普通に戻り、答えた。

「ああ。お父さん宛で手紙が入っていたから、それで知った。もらい物だから気にするな、と書いてあったよ」

それにしても、一体何冊買ったのだろう。気になるところだ。

と、そんなことを考えていると、いきなり頬に冷たいものが当てられた。

「ひあっ」

思わず変な声を上げて冷たいものが当てられたほうを見てみると、お母さんが冷たいジューズを持って微笑んでいた。いつの間にか買っていたんだらう。

「ナイスリアクションよ、琉嘉。いい反応してくれてお母さん嬉しいわ」

「ナイスリアクションじゃないよう。すっごいびっくりしたんだからねっ！！」

「あはは、ゴメンゴメン。……で、飲む？」

そう言って差し出すのは、私の大好きな桃ジュース。飲む以外選択肢がないじゃないか。

そして、受け取ったジューズを開け、中身を口に含む。桃の味が口の中に広がって、美味しい。

ふと二人を見ると、二人も何かを飲んでいた。

「お母さんたちは何飲んでるの？」

「お父さんはお茶だな。緑茶。飲むか？」

「いや、桃の甘いのの後にお茶はきつそうだからいい。で、お母さんは？」

「お母さんはコーヒー。……飲まないでしょ？」

その通りです。私はコーヒーは砂糖とミルクが《いっぱい》入ったのは飲めるけど、今お母さんが飲んでるような微糖のコーヒーは飲めません。

私は、コクコクと頷いた。

そんな私を見て嗜虐心が収まったのか、お母さんは微笑みながら話しかけてきた。

「ところで、今日も屋上で空を眺めてたの？」

「うん。どうして？」

「さつき病室に来る前に堤さんに会って話をしたんだけど。琉嘉。あなた今日、空を眺めるのに熱中しすぎて点滴の時間忘れてたんだって？」

堤さんの裏切り者。っていうか、コレはヤバイのでは？いや、明らかにヤバイよ。

お母さんが黒いオーラを背後に纏わせ、私のほうを見る。私の回答を待っているようだ。ちなみにお父さんは関わらないことにしたらしく、飲み終えたジュースの空き缶を捨てに、病室を出て行った。お父さんズルイ（泣）。

「琉嘉」

お母さんが我慢できなくなってきたらしい。私の名を、静かに呼んだ。

「ゴ、ゴメンナサイ」

「謝るということは、本当なのね。琉嘉、お母さんはあなたに、空を見に行くのはいいいけれど、時間だけは守りなさいと言ったわよね

「？」

「うん」

「あなたのその行動で、今日堤さんがどれだけ苦労したと思ってるの。きちんと謝った？」

「うん。すぐ謝ったよ。私が一方的に悪かったんだもん」

「そう。ならいいわ。今度からは絶対にこんなことがないようにするのよ。いいわね？」

「うん」

私が謝ると、お母さんは大きな溜め息を吐いて言った。ゴメンナサイ、きちんと反省してます。

そんな気持ちが伝わったのか、今日は比較的早めにお許しが貰えた。よかった。

と、お許しがもらえたところで、ちょうど良くお父さんが帰ってきました。

「おや、お母さんのお叱りはもう終わったのかい？」

「ええ。琉嘉も反省してるみたいだから、早めに終わらせたの」

「そうか。反省してるならいいな。さて、外も大分暗くなってきたし、そろそろ帰ろっか？」

お父さんが言うと、お母さんが外を見た。

「あら、いつの間にか随分暗くなったわね。ご飯の仕度もあるし、帰りましょうか」

「ああ。じゃあな、琉嘉。また明日来る。本ばかり読んでないで、勉強もきちんとしろよ？」

「はい」

「返事は『はい』でしょう？琉嘉。伸ばして言わないの」

「はい」

この母は、普段はあまりそういうことは言わないが、言葉遣いに関しては五月蠅い。そんなお母さんから視線をはずしていると、お母さんは口を開いた。

「ああ、言い忘れてたけどね、今度の休みに伯母さんたちが遊びに来るそうよ。その日に琉嘉が外出許可取れたら遊びに連れて行ってくれるって言うってたわよ？」

「ホント！？やったあ！！」

「本当。でも、琉嘉がいい子にしてないと外出許可取れないよ？」

「大丈夫！私いい子だもん！今日はちょっと時間忘れてたけど、今後は絶対そんなことしないもん！」

「そうね。琉嘉はいい子だもんね。じゃあお母さんは先生にお話しておくから、琉嘉は行きたいところを考えてなさい」

「うん」

伯母さん。お母さんのお姉ちゃん。おっとりした感じの優しい伯母さん。隣の県に住んでいて、時々遊びに来る。

そして、時々遊びに来ては、いろんなところに連れて行ってくれる。大好きな伯母さんだ。

お父さんやお母さんが帰るとすぐに夕食の時間が来た。今日のおかずは……すばらしく苦手なもののオンパレードだ。

「きちんと残さないように、全部食べようね。琉嘉ちゃん」

残そうと考えていたのを、先に堤さんに釘を刺される。さすがに1年以上付き合っているだけある。私の苦手なものは堤さんに筒抜けだ。

「…はい」

内心舌打ちをする。だが、ここまで言われて残すと後が怖いので、私は諦めて苦手なものにも手をつけた。うう、不味い（泣）。

そしてご飯の後はもちろん薬を飲む。私は手馴れた操作で薬を取り出し、飲む。錠剤が喉を通る。錠剤は、どんどん落ちて行く。

食器を下げた後は、読書タイムだ。まず、おじいちゃんが送ってきてくれた本の前に、先に読んでいた本を読む。しおりを挟んだページを開き、また読書に励んだ。

しばらく読んでいると、どこからかビープ音が鳴る。私が設定していたアラームだ。アラームを止めて時計を見ると、8時だった。

私は今のページにしおりを挟み、テレビをつける。耳にかけたイヤホンから音が響く。私は好きな番組をのんびりと見る。

そして、その番組が終わると、もうすぐ消灯時間だ。まあ、寝るつもりはないが。そう思いつつ、読みかけの本を取り出し、しおりのページを開く。その瞬間、電気が消えた。もう時間らしい。

私は枕元に置いてあるスタンドの電気をつけた。本を読めるくらいに光が辺りを照らす。それを確認して、さあ読もうかと思った時、いきなり声がかげられた。

「消灯時間を過ぎたこの時間に、何をしようとしてるのかなー？」

ビクツと体が揺れる。声をかけてきたのは堤さんだった。手には懐中電灯を持っている。

「び……………つくりしたあ」

「ゴメンゴメン。でも、もう9時過ぎてるからね。本はまた明日にして寝なさい」

堤さんは謝りながらも私に寝るよう促す。

ていうか、懐中電灯をつけずに忍び寄るのは反則でしょう。そう思いつつも、私は布団を肩まで掛ける。

「電気消しても大丈夫かな？」

私は黙って頷く。すると、枕もとのスタンドが消され、懐中電灯の仄かな明かりだけが、辺りを照らした。

「おやすみ、琉嘉ちゃん」

「おやすみなさい」

そして私は、夢を見た。中学に入ったばかりの頃の、夢。懐かしいような、悲しいような。なんとも言えない夢。

先生到来

* * * *

「琉嘉。着替えは済んだ？」

「うん。これでいいの？おかしくない？」

「大丈夫。おかしくないわよ」

私が着ているのは、真新しい中学校の制服。

そうか。今日は入学式なんだ。私も、今日から中学生になるんだ。

「さ、そろそろ行きましようか。入学式に遅れたりしたら大変だものね」

学校へ着くと、人だかりが出来ている。そこで、クラスの発表をしているらしい。そこへ行こうとすると、突然後ろから声がかげられた。

「るうちちゃん？」

「よっちゃん！」

いきなり名前を呼ばれて振り返ってみると、後ろに居たのは小学校の頃からの親友の加々見由佳カガミ ヨシカだった。

由佳だから、よっちゃん。ついでに、私はるうちちゃん。

「るうちちゃん、クラス分け見た？見てないなら一緒に見に行こ」

「うん。お母さん、よっちゃんとクラス分け見に行ってくる」

「いってらっしゃい。気を付けてね」

「由佳も気を付けて見に行くのよ」
『はい』

互いの親に注意をされて、二人同時に返事を返した。それに気が付いた私たちは、互いに顔を見合わせ、笑う。

クラス分けを見るのは一苦勞だった。新入生百五十人ほどが一斉にクラス分けの張ってある掲示板に集っているため、掲示板にたどり着くまでにかなりの労力を要するのだ。

そして、何とかクラス分けを確認できる位置に来て私が何組かを確認する。2組のようだ。

ちなみに、1年生は4組までであるらしい。

「よっちゃん何組だった？」

人ごみから抜け出て、お母さんたちの元へ戻った私は彼女に問う。すると、彼女はニコニコと微笑みながら答えた。

「2組。るうちちゃんも2組だよ。また1年間よろしくっ！」
「ホント！？やったあ！！」

そして私たちは入学式が行われる体育館へ移動した。中には所狭しと椅子が並べられている。

体育館の入り口で受付を済ませると、先輩が2組はこっちだと、案内をしてくれる。私たち二人は大人しく着いて行った。

「並び順は出席番号順だけど、自分の出席番号は分かる？」
『分からないです』

またも二人で声が揃う。

「だよ。あの人だからの中そこまで確認できないよね。さて、二人とも、名前を覚えてくれる？」

「片桐琉嘉です」

「加々見由佳です」

「片桐さんと加々見さんね」

案内をしてくれた先輩は、そう言いながら手に持っている紙を見ている。それに今年の新入生の一覧が載っているようだ。

「ああ、あつたあつた。加々見さんが6番。で、片桐さんが7番だから、此处と此处の席だね。式の開始までまだ少し時間があるけど、座って待っててね」

「はい。ありがとうございました」

私たちはそう言って、指示された席へと着く。その近くには、小学校が同じだった子たちがたくさん居た。

そしてしばらくして入学式が始まった。校長先生の話や、これからの学校生活についての諸注意など、退屈極まりない話が長々と続く。

話が終わると、今度は担任の先生の紹介だった。2組の担任は、まだ若い、20代前半であろう女の先生。受け持ちは数学とのこと。副担任は、おそらく30代後半〜40代前半くらいの男の先生だった。受け持ち教科は理科。

全てを終え、教室へ移動する。教室の黒板には、虹が描かれていて、その下に大きく『入学おめでとう』と書いてあった。

「初めまして。これから1年間、皆さんの担任をする本谷ヘトヤといいます。よろしく願います」

「副担任の永江ナガエです。皆さんの入学を心待ちにしていました。これ

からよろしく願います」

先生が来て、挨拶をする。

そしてその後は、これからのことをすこしずつ説明された。明日の予定。授業の開始の日。学校の校則の簡単な説明など。

「何か質問がある人は居ますか？」

それに手を上げる人間は居ない。結果、今日はこれで解散ということになった。

* * * *

画面が、飛ぶ。

入学式の日から、何日か経っているようだ。

* * * *

「…るうちゃん。るうちゃん？次体育だつて。着替えに行こ」

「え！？ゴメン、ポーっとしてたや」

「いいよいいよ。早く着替えに行こっ」

「うん」

私は体操着の入ったバッグを持ち更衣室へ向かう。そして急いで着替えて、体育館に整列した。

「2組は今日が初めての体育の授業ですね。初めまして皆さん。私は相賀と言います。1年間皆さんの体育を担当します。よろしく願います」

『よろしく願います』

「おや、いい子ですね。皆さん。では、今日の体育は、体力テストの持久走を行います。さ、皆さん広がってください。準備体操をしますよ」

相賀先生が持久走と言った途端、皆が軽くブーイングをした。だが、先生は気にせず準備体操を始める。

皆ブーブー言いながらも大人しく準備体操を始める。体操を終えると、男子から走り始めた。

男子が走っている間、私はよっちゃんとお話しをしていた。

「うー、持久走イヤだよー。死ぬ」

「だーいじょうぶだって。自分のペースでゆっくり行けばいいよ」

「よっちゃんは体力あるからいいけど、私体力ないもん」

そうやって話していると、あつという間に女子の番が来た。ああ、イヤだ。

ピーツと、スタートの笛が鳴る。皆が一斉に走り出す。はあ、疲れ。

そして、どのくらい走っただろうか。不意に、心臓の痛みに襲われる。だが、まだ我慢が出来る痛みなので、あまり気にせず走り続けた。

そして、それは突然やってきた。

ズキツと言う音が聞こえると同時に、激痛が走る。その痛みに耐え切れず、私はその場で倒れこんだ。

「るうちゃん!?!」

「片桐さん!?!」

倒れると同時に、すでに走り終えて休んでいたよっちゃん先生が急いで駆け寄ってくる。

「男子の足速い人！保健の先生呼んで来て！早く！」

私の様子を確認した相賀先生が男子に指示を飛ばす。

「片桐さん、どこが痛いのか言えますか？言えるなら、どういう痛みかも教えてください」

「…しん…ぞおっ…、痛い…。ズキズキ…す、る…」

そこまで言って、またも激しい痛みに襲われる。痛みに体がビクツとなる。うまく、息が出来ない。苦しい。

「片桐さん、救急車を呼びました。それまで我慢してください」

そう言いながら、何かを私の口に当てる。それは、酸素だった。それを当てるのは、初めて見る先生。保健の先生らしい。その横でよっちゃんが心配そうに私を見ている。

「琉嘉！！」

校舎から誰か駆けて来る。駆けてきたのは、お兄ちゃん。誰かが呼びにいったんだろう。お兄ちゃんが来たなら、もう大丈夫だよ。目が重い。

眠って、いいよね。

そこで、意識は途切れた。

* * * *

「琉嘉ちゃん？琉嘉ちゃん、大丈夫？」

「堤……さん？」

「魔されてたから起こしたけど……。怖い夢でも見てたの？」

「倒れたときの…夢。怖い夢よりはいいけど……辛い」

目を開けると、堤さんがいた。心配そうに私を見ている。

「今…何時？」

「4時ぐらいかな。まだ早いからもう一度寝なさい」

堤さんはそう言って毛布を私の肩まで掛ける。瞼がどんどん重たくなる。

また、眠りに落ちた。

窓から光が差す。もう朝のようだ。あ後は、夢を見ることもなくぐっすり眠れた。おかげで頭はすっきりしている。

なので、早速本を手に取り読み始める。

「あれ？もう起きてるの？いつもはまだ寝てるのに」

「堤さん。今日は早く目が覚めたから」

「ま、いいか。おはよう、琉嘉ちゃん」

「おはよー堤さん」

堤さんが朝食を持ってやってくる。これは朝の恒例行事。毎朝、いつも堤さんが朝食を持ってきてくれるのだ。

「はい」

堤さんがそう言っただけで私に体温計を渡す。コレも毎朝の恒例行事。私はそれを受け取り、脇に挟んだ。しばらく待つと測定が終わり、ピピピッと、それを知らせる電子音が鳴る。

「何度だった？」

「37度2分」

「うーん、微熱だねえ」

私はそう言っただけで体温計を堤さんに戻す。それを確認した堤さんはこっちを見て、ニッコリ笑って言った。

「琉嘉ちゃん。今日、屋上禁止ね」

「えー！？微熱じゃん！大丈夫だよ！」

「ダメ。特に今日は気温が低いからね。それに、今日は金曜日だよ？学校の先生が来るんじゃないかな？」

「来るの3時頃だもん。それまで暇じゃなかー」

そう、今日は金曜日。毎週、金曜日に担任の先生が1週間分のプリントとノートのコピーを持ってくる。そして、分からないところを質問するのが金曜日の恒例。

まあ、確かに先生が来れば話し相手にもなってくれるから楽しくていい。でも、屋上禁止はやっぱり納得できない。

「堤さーん。絶対に、ダメ？」

上目遣いで訴えてみる。以前、お父さんとお母さんにコレをやったときには効いた。堤さんにはどうだろうか。

「あのね琉嘉ちゃん。そんな可愛い目で見つめてきてもダメだからね。看護師としては許可できません」

「堤さんのケチ」

「ケチで結構。それで琉嘉ちゃんが熱を出さないのなら構いません」

効かなかった。堤さんが私のことを思ってくれているのは分かるのだけれど、それでもやっぱり面白くない。

「はいはい、いいからご飯食べようね。ちゃんと嫌いなものも食べるんだよ」

「はい」

そう言っつて、私は漸く朝食に手をつけた。適度に冷めていて食べやすい。そのせいか、私はあつという間に食べ終わった。

そして薬を飲んだ後は、また読書に励む。途中で昼食をとり、そして、また続きを読む。

どのくらい時間が経っていたのだろう。ふと顔を上げると、担任の先生が此方を見ていた。

「1週間ぶりだね、片桐さん。元気にしてましたか？」

「お久しぶりです、本谷先生。今週はどのくらい進みましたか？」

1年生から2年生になっても担任の先生は本谷先生のまま変わらなかった。ちなみに、よつちゃんも同じクラスのまもらしい。

「はい、今週分のノートのコピー」。例によって加々見のノートのコピーですね」

そう言って渡されるのは、分厚い紙の束だった。何だかいつもよりも多いような気が……。

それも気のせいではないらしい。もうすぐ受験生だからと言うことで、授業スピードが早まったそうだ。まあ、私の場合は受験がどうなるかは分からないが。

「ああ、そういうえば、今日は授業が終わり次第加々見も来るそうです。わざわざ部活を休ませてくれと言いに来ましたから」

「ホントですかっ!？」

「本当です。先生が片桐さんに嘘を言うつても？」

そう言って先生は笑った。そして、時計を見る。

「そろそろ授業も終わりますから、もう少ししたら来るでしょう。」

片桐さんはそれまでノートを写しておきましようか。質問があったら聞きますから」

「はい」

私はノートを写しにかかる。こうやって写していると、いつも思うことがある。

「コピーがあるんだからわざわざ書かなくてもいいじゃないかと。」

だが、これは本谷先生曰く、書いたほうが覚えるのだから書いたほうがいい、とのこと。ぶっちゃけ、面倒くさい。

そう考えていると、ノックもなしに、いきなり病室の扉が開いた。びっくりしてそちらに顔を向けると、よっちゃんが少し息を切らして立っていた。

「やほー。るうちちゃん久しぶりー」

「久しぶり、よっちゃん。いつものことながら元気そうだねー」

「もちろん。私は元気が取り柄だからねー」

よっちゃんはそう言いながらベッドへ寄ってくる。そして側に来ると、「座っていい？」とベッドの隅を指差した。もちろん許可する。

「ちゃんと授業は最後までまじめに聞いてきたんですか？加々見。随分と早かったようですが」

「ちゃんと聞いてきましたよー。急いで走ってきたからこんなに早く着いたんです」

よっちゃんと本谷先生はそうやって言い合いを続ける。果ては病室に入ってくるときはノックをするように、とかなんとか、授業とは関係ない話になっていた。

そして、ノックでふと思う。

「先生、ノックして入ってきたんですか？」

その言葉に、よっちゃんが目を輝かせる。今にも「先生も仲間ですな」とか言い出しそうだ。

「ちゃんとしたよ。ただ、片桐さんが読書に集中しすぎて聞こえていなかっただけです」

「ああ、だから聞こえなかったんですね」

「そうです。周りの音が聞こえなくなるくらい何かに集中できる片桐さんは素晴らしいですよ」

「わーい。ありがとうございます、先生」

それを横で見ているよっちゃんは面白くなさそうだ。まあ、いろんな意味で自業自得と言うか、なんと言うか。

まあ、このまま拗ねさせておくと後が面倒なので、機嫌取りにかかるところにした。

「それにしても、よっちゃんがお見舞いに来てくれるの久しぶりだよな。久しぶりにこうやって話せて嬉しい」

私がよっちゃんのほうを見て言うと、よっちゃんは途端に目を輝かせた。

「うん。最近ずっと部活と勉強が忙しかったから来れなかったんだ。本谷先生がスパルタやるから」

「加々見、言葉は選びなさい。先生はスパルタ教育なんてしていませんよ。加々見が居残りで勉強をする羽目になったのはあなたが授業中に居眠りをするからでしょう」

居眠りって…。いろんな意味でよっちゃんらしい。だけど、居眠りで居残りをさせるようにしたんですか、本谷先生。

余談だが、本谷先生が居眠りをした者は居残り、というシステムを導入させてからは、授業中の居眠りが減ったらしい。

だが、よっちゃんは変わらないため、居残りをする羽目になったとのこと。

「大体さ、居眠りしたから居残りって言う考えがおかしくない？寝てなくても聞いてない人はたくさん居るのに」

「うーん、授業の様子が分からないから私は何とも言えない…」

私たちが2人でこそこそと話していると、突如、今まで傍観を決

め込んでいた先生が口を挟んだ。

小声で話していたのだが、しっかりと聞こえていたらしい。

「おや、加々見は先生に喧嘩を売っているのですね。来週の授業は覚悟しておいてください。たくさん当ててあげますから。きちんと予習をしているんですよ」

それを聞いたよっちゃんは泣きそうな顔で先生に懇願した。

「それだけは勘弁してください」

と。それに関しては私にも少しは責任があるので、よっちゃんのフォローに回ることにした。

「そ、そうですね先生。授業の様子が分からない私が言うのもなんですけど、寝ていなくても聞いていない生徒もいるんじゃないですか？ どうせならその人たちも居残りにすれば、よっちゃんは何も言わなくなると思います」

「片桐さん。確かに、加々見の言うことも分かります。ですが、寝ていなくて聞いていない人は分かりにくいんですよ。巧妙に隠していますから」

「後ろから見るとすぐわかりますよ」

「加々見は黙っていてください。まあ、あなたは眠っていてもテストできちんと成績を出せるからいいですが、他の人間は授業を聞いていないから点が取れないでしょう。それを避けるために、居残り、と言う手段を取らざるを得ないんです」

先生はそう言ってよっちゃんの頭を撫でた。繰り返し、繰り返し撫でる。

「まあ、今度から居残りをしたくなければきちんと授業を聞きなさい、加々見。そうすればあなたはもつと点が伸びますよ」

「なら部活減らしてください」

「それも無理です」

「なら授業中居眠りしないと体力持ちません」

「家できちんと寝なさい」

「寝てるけど寝たりないんです」

2人の言い合いが延々と続く。最初のほうは真面目に聞いていた私だが、途中から聞き飽きて、大人しくノートを写しにかかる。

その間も、2人の言い合いは続いていました。

そしてしばらくして2人の言い合いが止んだ頃、私はすでに1教科分のノートを写し終えて、次の教科のノートを写しにかかっていた。

1教科分ずつと書いていると、手が痛くなる。そう思って休憩を入れると、目の前にはジュースが1本置かれていた。

「お疲れ様、片桐さん。コレ、差し入れです。先生の奢りですから、遠慮なくどうぞ」

そう言われてよっちゃんを見れば、よっちゃんもジュースを飲んでいる。よっちゃんも奢ってもらったようだ。

「ありがとうございます」

私は素直にお礼を言って、缶を開け、飲む。冷たい飲み物が喉を通って行って、気持ちがいい。

そして、ふと時計を見ると、もう5時になるうとしていた。そしてよっちゃんもそんな私に気が付いて、一緒に時計を見る。

「あや？もうこんな時間かあ。るうちゃん、私そろそろ帰るね。また暇が出来たら来るよー」

「うん。待ってる」

「おや？加々見が帰るのなら先生も帰りますよ。片桐さん、質問があつたらメールをください。暇なときに返事をしますから」

「はい。ありがとうございます、先生。また来週待ってますね」

そう言って、2人とも帰っていく。騒がしかった病室が、沈黙に包まれた。その寂しさを紛らわせるために空を見るが、逆効果だった。空は夕焼けに包まれていた。

そして、昨日のことを思い出す。

「ヤバイ！おじいちゃんへの手紙書くの忘れてた！！！！」

声に出して、そういつた途端、病室の扉がノックされた。まさか、もうお父さんが来たのだろうか。驚きに体がビクツとなる。

病室の扉が開く。そこにいたのは、やはりお父さんだった。

「何をしてるんだ琉嘉。疚しいことがあるのか？」

「あ、いや……そのお……」

疚しいことはとつと白状するに限る。そう思って、私は口を開いた。

「おじいちゃんへの手紙、まだ書いてないです。忘れてました。ゴメンナサイ」

それを聞いたお父さんは目を丸くした。

「まだ書いてなかったのか。どうせ今日も1日中本を読んでいたんだらう？それなのに思い出さなかったのか？」

「うん……うん。それに、今日は先生も来て、色々話してたら楽しくて、それで忘れてた」

「ん？ああ、そういえば今日は金曜日だったな。まあ、それなら仕方がないな。明日……いや、明後日までに書き上げなさい。いいね？」

「うん。でも、どうして明後日なの？」

「だって、明日も明後日も郵便局休みだらう。明後日お父さんが手紙を受け取って、明々後日の朝に投函するから」

そういえば、明日明後日は郵便局休みだけ。助かった。

「それと、伯母さんが来るって言ってただらう？外出許可が取れたよ。行きたい場所は決まったのか？」

「うん！！遊園地！！」

「またか。琉嘉は遊園地が好きだな」

「うん。たまにしか行けないから行けるときに行くの！」

「じゃあ、伝えておきな。詳しい時間とかは明日来た時に教えるよ」

そして、私は期待に胸を膨らませ、今日と言う1日を終えた。

出会い（前書き）

ここで漸くもう一人の主人公、玲斗が出て来ます。

出会い

次の日の朝、私は朝食を食べた後、引き出しから便箋を取り出す。おじいちゃんへの返事だ。

「んーと……おじいちゃんへ……っと」

おじいちゃん、おばあちゃんへ

まずは、本を送ってきてくれてありがとう。まだ手をつけてないけど、ゆっくりと、楽しませてもらいます。

そして、確かに最近寒くなってきていますね。屋上で受ける風がどんどん冷たくなってきているのが良く分かります。とりあえず私は風邪を引いたりはしていません。安心してください。ていうか、風邪ひいたら怖い人が居るので、そのために日々、努力しています《笑》。

とりあえず、何を書けばいいのか分からないのでこれで終わります。次に会えるのはいつになるかな？会えるのを楽しみに待っています。

あ、その本をくれた人に会うのも楽しみです。 琉嘉より。

「よっし、出来たー！」

そう言いながら時計を見る。すると、書き始めてからすでに1時間経過していた。

あれだけの文章に1時間。自分の文才のなさに涙が出てきそうだ。

「ちょっと休憩しよーっと」

そう言って、ベッドに横になる。辺りが静か過ぎて気分が悪い。そう思った私は、iPodを取り出し、イヤホンを耳にかけた。再生ボタンを押すと、音楽が流れ始める。

そして、気が付くと………またも夢の世界に居ました。

* * * *

空が、近くにある。地面が、遙か下にある。これは、一体どういうことだろうか。

いや、コレがどういう状況下は分かる。でも、信じたくない。というか、現実的にありえない。

私は今、空を飛んでいる。

鳥のように、羽を広げて飛んでいるわけではない。かといって、飛行機や気球などに乗っているわけでもない。

この体一つで、大空を舞っているのだ。

「すごい」

そう呟きたくなるくらいに、景色は素晴らしかった。ある方向を向けば海。向きを変えれば山。また向きを変えれば街。

現実ではありえない、風景。

ああ、これは、夢か。

思い出した。あの時音楽をかけてそのまま寝ちゃったんだ。

「よく、分かったね」

自覚した途端、どこからか声が聞こえる。誰だろう。そう思いつ

つ顔をきよるきよるさせる。

「あり？此処だよ此処！僕は君自身だよ」

「私自身？てゆうことは、視認できないの？」

「ちゃんと自分の目で見て確認したい？それなら体を作るけど」

体を作る？そんな疑問を抱きながらも、ちゃんと目を見て話をしたかったので、頼んだ。

すると、私の体から煙がたくさん出てくる。気持ちわるっ。と、そんなことを考えていると、目の前には一人の少女が立っていた。

「これでいい？琉嘉」

「うん。ところであなたの名前はなんていうの？」

「何だと思う？ヒントは、僕は、君自身だ」

「んー。まさか、『琉嘉』？」

「その通り」

紛らわしいな。彼女を呼ぶのに自分の名前を言わなければならぬいなんて、とても面倒くさい。

「別の名前つけてもいい？」

私が問うと、『琉嘉』は目を丸くした。でも、すぐに笑って快諾してくれた。

「おかしいのはイヤだよ？」

「うーん。どんなのがいい？」

「どんなのだっていいさ。琉嘉がつけてくれるのなら」

困る。そんなことを言われたら変な名前は付けられないじゃない

か。

そして、考えること数分。漸く名前が思い浮かんだ。

「琉衣はどう？とりあえず、私とあなたは一緒だから、漢字を1文字一緒にしてみたんだけど」

「ああ。いい名前だね。ありがとう、琉嘉」

『琉嘉』改め、琉衣が微笑む。その笑みに少し翳りが見えるような気がするのには気のせいだろうか。

そんな私の視線に気が付いたのか、琉衣は此方を見て優しく微笑んだ。

「綺麗だろう？この景色は」

「え？あ……うん。すごい綺麗だね」

突然話しかけられて、少し焦った。でも、確かにこの景色は素晴らしく綺麗だ。

「これは、僕が築いたんだ。綺麗な空を望み、この青い空を得、緑豊かな山を望んで、山を得た。街も、海も同様だ」

「琉衣、すごいね。こんな綺麗な世界を作れるだなんて」

私が素直に褒めると、琉衣は恥ずかしそうな顔をした。何か可愛いぞ。

「ところで、夢を見ているときにこれは夢だ、て自覚すること、なんていうか知ってる？明晰夢、て言うんだよ」

「めいせきむ？」

「うん、そう。全部平仮名で言うと馬鹿っぽく見えるから止めなさいね」

「なにおうつ!？」

「うん、続けるね。明晰夢っていうのはね、夢の状況を自由に変えることが出来るんだよ。だから、願ってごらん。どんな景色が見たい?見たい景色を強く、思い浮かべて」

そう言われて、見たい景色を思い浮かべる。それは、小さい頃におばあちゃんの家に行ったときに見た景色。

「すごい、ちゃんと変わったね。見てごらん、琉嘉」

そう言われて瞑っていた目を開くと、辺りは私がさっき頭に浮かべた風景に変わっていた。

公孫樹の葉が風で擦れる音が響く。風で葉が落ちる。それは、至って自然な風景で、とても幻想的な風景だった。

「これが、琉嘉の望む世界か。綺麗だね」

「そう……かな？」

「うん。とても綺麗だよ」

そう言った途端、琉衣が上を向く。何だろうか?そう思っていると、突如、琉衣が私の手を掴んだ。

「な……何？」

「ん?そろそろ琉嘉を起こさないのかな、と思って」

「えー?まだ此处に居たいよう」

「ダメ。そろそろ帰らなきゃ、帰れなくなっちゃうよ?明日、伯母さんと遊園地に行くんでしょ?」

どうして知っているんだろう?って、当たり前か。琉衣は私であり、私は琉衣なのだから。

まあ、伯母さんとお出かけできなくなるのはイヤなので、私は琉衣に従うことにした。

「あつたあつた。ほら、この扉を潜れば目が覚める。早く行きな？」

「うん。……ねえ、また会える？」

「琉嘉が強く望むならね」

琉衣はそう言って、私の目をジッと見る。そして、口を開いた。

「何かあつたら僕を呼びなさい。助けに行くから」

「でも、琉衣は私の夢の世界の人間だよね？そんなこと出来るの？」

「夢の中だからこそ出来ることっていうものもあるんだよ。だから、何かあつたら呼びなさい。強く願えば僕にも聞こえるから。ね？」

「うん。ありがとう、琉衣。じゃあ、またね」

「ああ。また、会おう」

* * * *

目を開くと、目の前にはお父さんとお母さんがいた。いつの間に来たんだろう？

ボーっとした頭でお父さんたちを眺めていると、それに気が付いたお母さんが此方を見て言った。

「あら、目が覚めた？よく寝てたわねー」

「んー。おかーさんたちいつ来たのー？」

「10分くらい前。ついでに言うなら、今は、11時半くらい」

今が11時半ということは、1時間ほど眠っていたようだ。ついでに、寝る前に聞いていたはずのiPodは外されていた。

どこに置いてあるのだろう。そう思いながら顔をきよるきよるさ

せる。

見つけた。横のテレビの横に置いてある。それを取ろうとするとき、横から手が伸びてきた。

「はい、それに手を伸ばす前にちょっとこっち見ようか」

そう言って伸ばした私の腕をきっちり掴む。

あれ？お母さん怒ってる？顔は笑ってるけど、実は怒ってる？怒られるようなことをした記憶はないよ……今日は。

「な、何かな……？」

「って、何をそんなに怯えてるの？怒られるようなことをしたの？」
「してない！絶対にしてない！」

危なかった。これで肯定しようものならまた、お説教が始まるどころだった。もう、お説教はこりこりです。

「ならいいけど」

お母さんはそう言うてにっこり笑う。うん、何故だろう。後ろに黒いオーラが見えるような気がします。

ああ、何だか幻覚まで見えてきたよ。お母さんの後ろに阿修羅が見えます。とても怖いです。

てゆーか、何でアシユラあああああああああああ！?!?
?!?!?!?!?

取り乱しました。ごめんなさい。突然の阿修羅の登場に、ちょっとパニックりました。

「で、そろそろ大丈夫かしら？ 琉嘉」

「あ、うん。ゴメン」

「とりあえず、明日のことをまず話そうかしら。明日は何があるか覚えてるわね？」

「伯母さんが来る日」

「うん、まあ、来るのは今夜なんだけど。大体は正解。で、明日遊園地に行きたいんだったわよね？ 伯母さんにはそう伝えただけど」

「うん！」

私がニツコリ笑って返事を見ると、お母さんも微笑んだ。それを見て、やっとお母さんが怒っていないと安心できる。

「じゃあ、明日9時くらいに迎えに来るから、それまでに準備をしておいてね。先生にはお話してあるから」

「うん、分かった。楽しみに待つとく」

そう言つと、お母さんはiPodを取ってくれた。そして同時に口を開く。

「今度からは音楽かけたまま眠らないようにね。寝るのなら、スリープを設定しておきなさい」

あ、やっぱりはずしたのお母さんだったのね。うん、また後ろに阿修羅が見えるよ。黒いオーラの下で、阿修羅が顔を見せてるよ。

謝ったら消えてくれるかな。そう思い、私は即座に謝罪の言葉を述べた。

「ゴメンナサイ」

「スリープを使わないと電池が勿体無いでしょう。聞いてないのに」

「うん、次からは気をつけます。ゴメンナサイ」

良かった。黒いオーラも阿修羅も消えてくれた。ていうか、どうしてお母さんの後ろには阿修羅が見えるんだろう。

直接聞いたら分かるかもしれないけれど、知らないほうが良いと本能が告げているから聞かないことにする。何かヤバイ感じがするし。

そして、お昼を過ぎるとお母さんたちは明日の準備があるから、と帰って行った。うん、話し相手がいなくなつて暇だ。

なので、私は屋上へと足を向けた。今日は屋上禁止令を喰らっていないので、堂々と屋上へ向かうことが出来る。

それに、今日は夕飯までは自由だ。ゆっくりと空を眺めることが出来る。そう思いながら屋上の扉を開けると、そこには先客がいた。高校生くらいの、少年だった。

少年は、私が扉を開けると、その音に反応して、此方を向いて微笑んだ。

「こんにちは」

「こ……コンニチハ」

「君も空を見に来たの？」

「は、ハイ」

うん、こうやって異性の男性と話すのは久しぶりだから緊張するよ。心臓がドクドク言ってる。

「ああ、ひよつとして君が堤さんが言っていた子かな？」

「えと、ちなみに何て聞いてます？」

「んーとね、晴れたら禁止しようがこっそり屋上に行って空を見る子、だったかな」

やっぱりバレてたか。うん、でも何も言わないならいいか。そう考えていると、少年から声がかけられた。

「ねえ、どうなの？君がそうなの？それとも違う人？」

「あ、そうです」

私が答えると、少年はにっこりと笑って、自己紹介を始めた。

「俺は512号室の朝霧玲斗。アサギリ レイト16歳、高校1年生。君は？」

「あ、片桐琉嘉デス。13歳の、中学2年生」

「琉嘉ちゃんか。可愛い名前だね」

ちよっ!?!?!?!?!?そんな真顔で褒めないで欲しい。顔が熱い。心臓がすごい勢いで活動してる。っていうか、発作起こしそう。

「琉嘉ちゃん、顔赤いよ。大丈夫？」

大丈夫じゃありません。あなたのせいです。そう答えたのだが、緊張のし過ぎで声が出せない。

「あー、大丈夫じゃなさそうだね。堤さん、呼んでくるから待っててくれる？」

なんですと？

先刻、堤さんと呼ぶと聞こえたような気がします。それは困ります。堤さんが来たら即刻、屋上禁止令を喰らうではありませんか。そう思った私はすごい勢いで首を横に振った。それを見た玲斗君が驚いた顔をする。

「あ、えと、大丈夫なんだね。なら、いいんだけど」
「だ、ダイジョウブです!!」

あ、声が出せた。

「そか。安心した。ところで、琉嘉ちゃん、病室はどこ？今度遊びに行ってもいい？」

「あ、510号室です。結構近いですよ」

「うん。俺が512号室だからね。とりあえず、横に来ない？そんな遠くだと話にくいからさ」

そういえば、私は入り口のところに突っ立ったままだった。それを思い出して、テクテクと玲斗君の横に移動する。

そして横に着くと、玲斗君はにっこり笑って言った。

「ようこそ、俺の空間へ。仲間が出来て嬉しいよ」

「……俺の空間？」

「ん、ああ。この寒い時期に、屋上なんて殆ど来ないだろう？大半の人は。だから勝手に俺の空間で読んでるんだ」

「なら、ここは私の空間でもありますよね？」

私が言うと、玲斗君は少し目を丸くした。だがすぐに戻り、言った。

「ああ、そうだね。俺たちの空間だね」

彼は、笑う。そんな彼の笑みが太陽の光の影響を受けて、神々しく見える。とても、きれいだ。

「ところで、琉嘉ちゃんは どうして入院してるの？何の病気？」

「あ、分かんない……デス。誰も教えてくれないから。えと、玲斗…さんはどうして入院してるんですか？」

「敬語使わなくて良いよ。呼び方も自由にしていから。玲斗君でも玲ちゃんでも玲君でも。個人的には玲君がいいかな」

「じゃあ、玲君、で」

私がそう言うと、彼はニッコリと笑った。

「じゃあ、俺は琉嘉って呼んでいい？『ちゃん』付けるのは面倒なんだ」

「いいよ。ところで、質問に答えて欲しいな。どうして玲君は入院してるの？」

「ん、俺？俺はね、心臓が生まれつき弱かったんだ。それで、この病院に良い先生がいるって聞いたから転院してきたの。琉嘉はどこが悪いのかは分かる？」

「私も心臓が悪いみたい。中学1年生の時に、体育の授業中に倒れたの。それからずっと此処に入院してる」

「そか。仲間だな」

「うん」

私はそう言って、倒れた時のことを話した。つまらない話だったろうに、玲君は静かに聴いてくれた。それが、嬉しかった。

そして話し終わると、玲君は私の頭をよしよしと撫でてくれた。

玲君の手は暖かくて、気持ちが良い。

「よし、そろそろ帰ろっか。大分寒くなってきたしね。また今度、会った時に色々話そうか」

「うん。また今度」

そう言って、私たちは一緒に病室に戻った。その途中で、堤さん

と顔を合わせる。

「あれ？二人とも、もう知り合ったの？」

「ええ。俺が屋上にいる時に琉嘉が来ました。それで色々話をしましたよ」

「うん。とりあえず、変な紹介の仕方をありがとう。あとで話したいな」

私が言うと、堤さんは目を背けた。怪しい。怪しすぎる。他にも何か言っていたのではないだろうか。

そんな目を向けていると、堤さんは思い出したかのように明日の注意を言った。話を変えたね。

「細かいことは後からね」

ええ、そのときに詳しく聞かせていただきましたよ。そう思っていると、横で黙って立っていた玲君が口を開いた。

「琉嘉、明日外出するの？」

「あ、うん。伯母さんが久しぶりに遊びに来るから、みんなで遊園地に行くの」

「ふーん。そか。楽しんでおいでよ。土産話、期待してるから」

玲君はそう言って病室に戻った。そして、私も堤さんに連れられて病室へ戻る。さて、詳しい話を聞くお時間ですね。

「堤さん、玲君に私のこと何て話したの？」

「空を見るのが好きな子だって話したよ。玲斗君も空見るのが好きだって言ってたから仲良く出来れば良いな、と違って」

「それだけ？」

「それだけです。だから、明日の注意の続きを言っても良いかな？」
ジーンと睨んでもそれだけ、と言われたのでそれで追求は止める
事にした。まだありそうな気はするけど。

ちなみに、明日の注意の内容は、

- 『1、お父さんお母さんの言うことを聞くこと』
- 『2、少しでも辛くなったら誰かに言うこと』
- 『3、お父さんお母さんから離れないこと』
- 『4、薬は忘れずに飲むこと』

の4つだった。ご丁寧に紙に書いてある。明日はこの紙を持って
行けとのこと。

「ご両親にもきちんとは注意は伝えてあるから、ちゃんとしなきゃダメだよー？」

「はい、分かってます」

「それならいいよ。あと、今日は消灯時間になったらすぐに寝なさいね？そうしないと明日が辛いよ」

「うん、それも分かってる」

そして私は夕飯を食べ、消灯時間までの間を読書に費やした。本
を読んでいると時間が経つのが早い。あっという間に消灯時間にな
っていた。

それを時計で確認した私は、のんびりと布団に潜り込み、熟睡し
た。今回、夢は見なかった。

お出かけ

「琉嘉ちゃん、朝だよ。起きて」

翌朝、堤さんの声で目を覚ます。もう朝か。

起きるとすぐに体温計を渡される。これで熱あつたら泣くよ。まあ、大丈夫だったからよかつたけど。

安心したところでようやく朝ごはん。しっかり食べておかなかちや、体力が持たない。堤さんにもそう言われて、残さないように食べる。

食べ終えてから時計を見ると、もう8時半を過ぎていた。ヤバイ。早く準備しなきゃ。

そう思つて急いで歯を磨きに行く。歯を磨いて寝癖を直し、顔を洗う。それをいつもは10分近くかかるのを、今日は5分で済ませた。新記録だ。

そして、着替える。服は昨日の晩のうちに準備しておいたため、選ぶ必要はない。楽だ。

「琉嘉。準備は出来てるか？」

「うん」

ちょうど着替え終えた頃、お父さんが迎えに来た。私は返事をし
て、お父さんに着いて行く。

「お父さん、みんなは車？」

「ああ。寒いからつて出てこなかった。車に着いたら文句でも言つてやるといい」

「そつする」

車だと話しくいのに。寒いって言ったって車から病院の入り口までのちょっとした間じゃないか。

文句言ってやる。盛大に言ってやる。

そして病室を出ると、そこに玲君が立っていた。

「いつてらっしゃい、琉嘉。土産話を期待してるから、しっかりと楽しんでおいで。土産話がなかったらおにーさん悲しみて病室に引きこもっちゃうからね」

「うん。ちゃんと土産話は準備しておく。写真もたくさん撮ってくるから戻ってきたら一緒に見よう」

「ああ。楽しみに待ってるよ」

そう言って私はお父さんの後を追う。離れるな、とのお達しもありましたし。

そして車に着くと、みんなが中で喋っていた。それだけ元気なら車から降りて病院内まで来ても大丈夫だっただろうに。

「あ、琉嘉ちゃん久しぶり。体調は大丈夫？」

「久しぶりー、伯母さん。今のところ大丈夫ー」

「おー、琉嘉久しぶりー。元気そうでなによりだー」

「うん、会うのどれだけ振りだっけ？彩ねえがずっと部活で忙しかつたからかなり会ってないよね？」

車に入ると、まず、母の姉である伯母が話しかけてきた。そして次に話しかけてきたのは従姉の彩夏姉ちゃん。通称彩ねえ。ちなみに、高校2年生。

二人とも会うのはかなり久しぶりだ。

「琉嘉。挨拶は車に乗ってからでも出来るだろう。早く乗ってシ-

トベルトを付ける」

「はい」

そして私たちは出発した。

ちなみに今日のメンバーは、お父さん、お母さん、伯母さん、彩ねえ、そして私の5人。いざ出発！

「ところで、今日は伯父さん来なかったの？」

「ああ、おとーさん今日休日出勤入っちゃってさー。琉嘉に会つのも楽しみにしてたんだけどねー。李旺リョウは部活だっけ？」

「そっかー。伯父さんもずっと会ってなかったから楽しみにしてたんだけどなー」

「ていうか、あんたたちテンポ似てるわね」

いきなり口を挟んできたのは助手席に座っているお母さんだった。ついでに、さりげなくスルーされた李旺とは、私の2つ上のお兄ちゃんである。

「んー、彩ねえと一緒にいると何故かこうなっちゃうんだよねー」

「えー？私のせいー？てか、李旺に関する質問、さりげなくスルーしたね？」

ついでに、私と彩ねえ、そして伯母さんが後部座席に座っている。

「だーって、彩ねえがいないときの喋り方普通だもん。伯母さんもそう思わないー？」

「んー。そうさねえ。確かに琉嘉ちゃんリョウカは彩夏と一緒にだとのんびりした口調になるんだよね」

「えー！？お母さんまでそう思うのー？私のせいじゃないよー」

私はまたもスルーする。ずっと会いに来てくれない李旺にいなんで知りません。

そうやって車の中ではしゃぐ。そして、疲れた。しばらく喋りたくない。

「琉嘉、疲れたの？ジュース飲む？」

助手席からお母さんが私の状況を見てジュースを差し出す。私はそれをありがたく受け取り、飲んだ。美味しい。

「琉嘉。どうせ着くまでに時間かかるからしばらく寝てなさい。眠って、体力を温存しておきなさい」

「んー。着くまでに後どのくらいかかりそう？」

「あと1、2時間くらいかかるだろう」

私が質問をすると、運転中のお父さんが前を見たままで答えてくれた。うん、それだけかかるなら寝てようかな。

そう思っただ彩ねえの肩に頭を置く。そうしたら、伯母さんが恐らくひざ掛けであるう物を掛けてくれる。気持ち良いな。

彩ねえの肩からも熱が伝わる。うとうとする……。

堕ちる。堕ちていく。夢の世界へ、堕ちゆく。

「寝ちゃった？」

「うん。寝ちゃったっポイねえー」

まだ、何とか起きてる。でも、起きてるのは頭だけみたいだ。口を開こうとしても動かせない。

「ホント、寝顔は昔から全然変わってないね」

彩ねえがそう言っつて私の頭を撫でる。彩ねえの暖かい手が、睡魔を呼び込む。

……………堕ちた。

揺れる。体が、揺れる。声が聞こえる。

「るーかあー。着いたよー。起きてー。ていうか琉嘉が起きないと動けないから早く起きてー」

「琉嘉ちゃん、着いたよ。起きて」

彩ねえと伯母さんの声で目を開ける。すでに車のエンジンは切られていた。

「んあ？もう着いたの？」

「ああ。予想以上に早く着いたんだ」

そう言われて、腕時計の時間を見る。病院を出てからまだ1時間しか経っていない。

「ふえー、お父さんかなり飛ばしたんだねー」

「車が少なかつただけだ。ま、いい。お母さんは先にチケットを買いに行ってる。俺たちも行くぞ」

「はーい」

そう言っつてチケット売り場へ急ぐと、すでにお母さんはチケットを買い終え、のんびりと待っていた。

「遅かつたわねー。琉嘉が中々起きなかつたの？」

「うんー。呼んでも揺らしても中々起きないから苦労したよー」

「そ、そんなに何回も起こしたの？」

「うん。まず私が起こしてー、起きないからお母さんにも呼んでもらってー、それでも起きないから叔父さんに起こしてもらってー、でも起きなかった」

「……………そ、それはお手数をおかけしまして……………」

まさかそこまでひどいとは思っていなかった。予想以上だ。

このままだとその話が延々と続きそうな予感がした私は、お母さんの手を取り、入場ゲートのほうへ足を向けた。

「ほ、ほら。そんな入り口で話してないで早く入ろう。いっぱい遊びたいし」

「そうね。琉嘉のためにも、この辺でこの話は止めてあげましょうか。さ、みんな、行きましょう」

そして、みんなでゲートを潜る。さあ、まずはどこへ行きましょうか。

「ね、最初どこ行く!？」

「琉嘉はどこに行きたいー？」

「ジェットコースター!ー!」

私が言うと、彩ねえが嫌そうな顔をした。あれ？彩ねえはジェットコースター苦手だったっけ？

そう思いつつ首をかしげていると、横から突如おばさんが口を挟んだ。

「いいわねえ。じゃあ、まずはジェットコースターのエリアに行きましょう。彩夏、あなたももちろん乗るのよね？」

彩ねえがすつごく嫌そうな顔をする。やっぱり嫌いなのか。
だが、伯母さんは彩ねえに有無を言わせず、引っ張ってゆく。
… 伯母さん強いな。

「そんな引っ張ってつても私、ジェットコースター乗る気ないよー
？」

引っ張られ続けている彩ねえが口を開く。

「嫌がる人間を無理やり乗せて怖がらせるのが楽しいんじゃない」

そんな彩ねえに対して手加減なしの伯母さん。ていうか、無理やりて、アンタ鬼か。

「乗せられる前に逃げるからいいよー」

「お母さんが易々と逃がすと思う？」

「思わないけど逃げる。大体さー、ジェットコースターに乗りたが
つてるのは琉嘉なんだからさー、琉嘉が乗ればいいんじゃない？」

「え？琉嘉ちゃんも、彩夏と一緒に乗りたいでしょう？」

本気の親子バトル勃発。さすがはお母さんと同じ血が流れてるだけある。後ろから阿修羅が登場しそうな恐ろしさだ。

そんな中々終わる気配のないバトルの中、いきなりこっちに話が振られる。えと、どう答えれば良いのかな？

「彩夏と一緒に乗りたいでしょう？」

うん、怖いな。軽く脅されてる感じがしなくもない。

「お母さん、琉嘉が困ってるからやめなってー」

彩ねえから救いの手が伸びた。でも、ゴメン。やっぱり一緒に楽しみたいな。

「んー、確かに、一緒に乗りたい。久しぶりに会ったんだから、一緒に楽しみたい」

そんな私の言葉に、片や嬉しそうな表情をし、片や裏切り者ーと言う目で私を見つめる。

勿論、前者は伯母さんで後者は彩ねえだ。

うん、ゴメンね彩ねえ。でも、この1回だけは一緒に乗って欲しいな。

そして、私と彩ねえ、伯母さんとお母さんの組み合わせで席に着く。お父さんは下で荷物番をしている。

ゆっくりと、コースターが動く。少しずつ、上に上がっていく。

ちなみに、横の彩ねえを見ていると面白い。上に上がっていくごとに、表情がコロコロ変わる。

「彩ねえ、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。ていうか、コレつきりだからね。もう乗らないからね」

「うん。ありがとね、彩ねえ」

私がそう言うと同時に、コースターは最頂点に到達する。さあ、今からジェットコースターの一番楽しいところですね。

そして、彩ねえには一番嫌なポイントですね。

「きゃあああああああああああああああああああああ」

案の定、急降下している間、彩ねえは悲鳴を上げ続けた。コレ、そんなに悲鳴を上げるものかな？楽しかったけど。

そしてスタート地点に戻り、降りると、彩ねえはフラフラしていた。

「彩ねえ、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。フラフラするし、気持ち悪い」

すでに、のんびりした口調で話す余裕もないようだ。それを見かねた伯母さんが彩ねえに声をかける。

「彩夏。何か飲み物買って来るけど何がいい？」

「冷たいのならなんでもいい」

「そう。琉嘉ちゃんは何が良い？」

「あ、えと、その……」

「決めきれないのなら伯母さんと一緒に買いに行ってください。お母さんは彩ちゃんに付いてるから」

悩んでいると、横からお母さんが口を挟む。声のするほうを見ると、お母さんはいつの間にかお父さんの横に座っていた。その横に手招きをして彩ねえを座らせる。

「うん。じゃあ、行ってくるね」

そして私は伯母さんと一緒に自販機を探した。幸い、然程探さずに見つけることが出来た。

自販機を見つけると、おばさんは先ずコーヒを3本買う。伯母さんの分と、お父さん、お母さんの分だ。

そして、缶を取ると、次は彩ねえのを買う。無難にスポーツドリ

ンクを選択した模様。

「琉嘉ちゃんは何が良い？ゆっくり考えて良いよ」

そう言われて、自販機にある商品を上から順番にじっくり見る。そして、一通り見て、すぐに決めた。

すでに伯母さんがお金を入れていたので、決めた瞬間に押す。ちなみに、選んだのはカルピスだった。

「ただいまー。彩ねえ調子どう？」

「おかえりー。大分良いよー。ゆっくり休んだしねー」

そのようだ。彩ねえにのんびりとした口調が戻れば大体大丈夫だろう。そう思いながら、買ってきた飲み物を渡していく。

「お、アクエリアスじゃん。お母さん、ナイスチョイス」

彩ねえはそう言って買ってきたアクエリをゴクゴクと飲んでいく。

「琉嘉は何にしたの？」

「カルピス。少し飲む？」

カルピスを差し出しながら言うと、彩ねえは「少し貰うね」といってカルピスを受け取る。そしてその代わりにアクエリを差し出した。

「飲んで良いよー」

私はその言葉に甘えてアクエリを貰う。

そして、その後はお化け屋敷や観覧車など、遊園地の定番とも言えるアトラクションでたくさん遊んだ。写真もたくさん撮った。そして、その楽しみももうそろそろ終わりを告げようとしている。それは、お母さんの一言。

「そろそろ帰りましょうか」

「そうだな。暗くなってきたし」

帰らなきゃ。分かっているけど、辛い。この楽しみが、いつまでも終わって欲しくない。でも、終わらせなきゃ。

「琉嘉。どうする？帰る？まだ遊びたい？」

「うん、帰ろう。早く帰らないとみんな明日が辛いもんねっ」

泣きそうだ。でも、泣いたらダメだ。コレが最後まで言うわけじゃない。また、来ようと思えば来れる。

だから、今日は帰ろう。

「そうか。じゃあ、帰ろうか」

「あー、ちょっと待って、叔父さん」

「どうした？」

「お土産屋さん行くごうよー。友達にお土産買いたいしさー」

そう言って、私たちはお土産屋さんへ移動する。

お土産屋に着くと、お父さんが私の顔を覗いて、言った。

「琉嘉。欲しいのないか？あつたら買ってやるぞ？」

「いいの!？」

「ああ。ただ、高すぎるのは止めてくれよ？」

そう言われて、店内の商品を見渡す。一つのぬいぐるみに、目が止まる。

「それがいいのか？」

ジッと見ていると、それに気が付いたお父さんが声をかけてきた。

「…うん」

「よし。じゃあ会計済ませてくるから待ってなさい」

「ありがとうございます、お父さん」

そして会計を済ませたぬいぐるみを受け取る。……病室に飾ろう。そう思っていると、いつの間にか彩ねえも会計を済ませたらしく、私の手を引いて店から出た。

「よっし、ご飯食べて帰ろー」

「そうね。晩御飯にちょうど良い時間ね。誰か、何か食べたいものある？」

「琉嘉ちゃん。食べたいもの、ない？」

「琉嘉が食べたいヤツなら何でもいいよー」

「琉嘉、リクエストがあるなら言いなさい」

あの、私に考えるの全部押し付けないでもらえますか？ていうか、何で私なの？

「だって、琉嘉ちゃん、普段は好きなものを好きな時に食べられないでしょ。だからよー」

至極あっさりとした答えが返ってきた。うん、たしかにそうだけどき。そうなんだけど、いきなり言われても決められません。

「何食べるかはどうでもいいから、とりあえず車に戻らないか？寒くてしょうがないんだが」

今まで沈黙を保っていたお父さんが口を開く。みんながそれに同意して、車に移動した。

私は移動の間も食べたいものを考える。

というか、食べたいものは沢山ある。カレーとか、ハヤシライスとか、刺身とか。うう、悩む。

そうこう思っているうちに、車に到着する。来る時と同じ配置で乗り込むと、助手席のお母さんが此方を向いて言った。

「琉嘉。食べたいもの、決まった？候補があるなら全部言っちゃいなさい」

それでは遠慮なく。

「カレーにハヤシライス。お刺身。ハンバーグ。シチュー。この中のならどれでも良いや」

「なら、ハンバーグにするか？近くにハンバーグのうまい店があったはずだろう」

お父さんが決定し、車を発進させる。ハンバーグが美味しい店かあ。楽しみだな。

そして、然程長い時間を掛けず、その店に到着した。

……………結論。すっごい美味しかった。上に乗ったチーズはトロトロで美味しいし、ハンバーグを切ると肉汁が溢れ出すし、肉はすっごい柔らかいし。

「美味しかったか？琉嘉」

「うん！すっごい美味しかったっ！」
「そうかそうか。それは良かった」

お父さんはそういいながら私の頭を撫でる。あつたかくて気持ち良いな。

そしてご飯を食べてからは、寄り道をすることなく病院へと戻った。

「じゃあね、琉嘉ちゃん。また遊びに来るから、そのときも何処か行こうね」

「じゃねー、琉嘉あ。また部活休めたら一緒に遊ばーねー」

「うん。また今度ね」

そう言っつて私は車から降りる。……とここで、ふと思い出す。おじいちゃんへの手紙のことを。

「あー!!」

「何っ!？」

「どうしたの?」

「琉嘉どしたー?」

「どうしたんだ?琉嘉」

私が突然大きな声を出すのでみんなが反応する。

「お父さん、ちょっと待ってて!手紙取って来る!せっかく書いたんだから、明日出して!」

私はそう言っつて病院へ、無理をしないよう急ぐ。エレベーターに乗り込んで、そのときにやっと後ろにお母さんが来ていることに気が付いた。

「あら？やつと気が付いた？」

さすが意地悪ままん。わざと何も言わずに着いてきたようだ。

「何でお母さんが着いてきてるの？」

「あなたが病室に戻った後にまた車に戻ってこなくても良いようにそれに、先生にも一言戻りました、って言うておくべきかと思って」

さいですか。

そして、5階に着くと、私は病室へ、お母さんはナースステーションへ向かう。先生に何を言うつもりなんだろう。

まあ、いいか。そう思いながら手紙を取る。戻ると、お母さんはまだお話中だった。

「お母さん、コレ、自分でお父さんのところに持っていくね。ついでに、お母さんは先生とお話中だって伝えとく」

「ん？ああ、お願いね」

話し続ける二人を無視して私は車へ向かう。外へ出ると、冷たい空気が頬に触れる。寒いな。

コンコンツ。運転席の窓を叩いて、開けるよう促す。すると、お父さんはすぐに開けてくれた。

「はい、コレ手紙。あと、お母さんは今先生とお話中。後どれくらいかかるかは不明」

「分かった。じゃあ、コレは明日ちゃんと投函しておくよ」

「うん。よろしくー」

「さ、琉嘉は早く病院に戻りな？こんなところで話してたら風邪を引くから」

「うん。分かつ……」

分かった、と言いたかったのだが、言い切れなかった。「クシュンツ」というくしゃみの音に妨害されたからだ。

「ほら、くしゃみが出てる。これ以上ひどくなる前に戻るんだ。いいね?」

「はあい。んじゃ、伯母さん、彩ねえ。また今度ねー」

「んじゃあねー、琉嘉。また今度ー」

「じゃあね、琉嘉ちゃん」

私はそう言っただけで病院へ戻る。エレベータに乗り、5階に着くと、そこには終わる気配のない話をしているお母さんがいた。

「お母さん、まだお話してたの?」

「あら?もう戻ってきたの?…って、体がかなり冷えてるわね。早く着替えなさい。では、先生。失礼します」

「じゃあ、琉嘉ちゃん。今日はあったかくして眠るんだよ」

「はい」

私は病室に戻って着替え、そのまま布団に潜り込んだ。そして、そのまま眠りについていった。

発熱

「琉一嘉一。琉嘉あ。朝だよ、起きて」

太陽の光が優しく照らし出す朝、目が覚めたら玲君が目の前にいました。

「なつ、何で玲君がここにいるの？」

「ん？早く目が覚めたから琉嘉の寝顔見に来た。昨日は琉嘉帰ってきたら速攻で寝ちゃったらしいし」

とここで、ちょうど良く堤さんが病室に入ってくる。

「あれ？琉嘉ちゃんが起きてる」

「玲君に起こされました」

「玲斗君、やるねえ。モーニングコールとは。明日からもやる？」

「そうですねー。堤さんの要望とあらば喜んで」

おふざけ開始？うん、本気なら困るけど。

「さ、玲斗君も病室戻ろうか。もうすぐ朝ごはんだから」

「はい。じゃ、琉嘉。また後で」

そう言っつて玲君は自分の病室へ戻る。そして私は体温計を渡される。

結果は……。うん、沈黙を保とう。

「琉嘉ちゃん。何度だったの？」

「……………」
「琉嘉ちゃん」

「……………」
「今すぐ言わなかったら1週間屋上禁止にするよ」
「ゴメンナサイ」

屋上禁止令を出すのはずるいって。堤さん、大人気ないよ。

「で、何度だったのかな？」

「さ、37度6分……………デス」

「琉嘉ちゃん、分かってるね？」

堤さんがニツコリ笑って言う。うん、目が笑ってないよ。

堤さんの視線が痛い。うう、怖いよう。

「熱下がるまで屋上禁止」

「了解しました」

逆らうと怖いので了承する。

「後で先生が診に来るだろうから、ちゃんと病室にいるようにね？」

「はい」

「あ、食欲はある？無くても少しくらいは胃に何か入れておいてね」

「はい」

ここで漸く堤さんの表情がいつもどおりに戻る。ああ、怖かった。そして朝食を食べ終えると、ちょうど良く良く先生がやってきた。

「おはよう、琉嘉ちゃん。熱出したんだって？」

「おはよー由里センセー」。熱出したっていつても、大したこと無い

って。大丈夫だよ」

「大丈夫かどうかは先生が決めるからね。さ、診察するからお腹出して」

そう言つて由里先生はいろんな場所に聴診器を当ててる。冷たい。

「頭痛いとか、気持ちが悪いか、喉痛いとかって無い？」

「何も無いー」

「そっか。なら、多分昨日の疲れが出たんだろっね。一応薬は出しておくから、ご飯の後にちゃんと飲んでね。あと、今日は安静にしておくこと。破ったら屋上禁止令発令させるからね」

それは困る。ていうか、何で堤さんのみならず由里先生までその脅しを……。

「はい、返事は？」

「はい」

先生が出て行った後、引き出しからノートとノートのコピーを取り出す。今のうちに先週の分を写してしまおう。

カリカリカリ。

カリカリカリカリ。

カリカリカリカリカリ。

病室に何かを書く音のみが響く。静かで、落ち着く。

コンコンツ。

静かな空間に扉をノックする音が響く。誰だろっ？

「琉嘉。入ってもいいか？」

「玲君。いいよう」

扉をノックしてきたのは玲君だった。手には缶ジュースが握られている。

「どっちがいい？」

そう言って差し出されるのはポカリとアクエリ。…うん、悩むな。

「ゆっくり考えていいよ。…って、何で熱出してる時に勉強してるの。ダメだよ。ほら、片付けて」

「え？でも、コレ早くやらないと追いつけなくなっちゃうし…」

「問答無用。早く片付けなさい」

「はあい」

逆らえそうに無いので、大人しく片付ける。すると、玲君はニッコリ笑った。

「よし、いい子いい子。いい子な琉嘉にはジュースを2本ともあげよう。しっかり水分とって、早く治そうな」

「あ、ありがとう」

玲君はジュースを2本とも私の目の前に置いて、私の頭を撫でる。…嬉しいけど、何か、すごく子ども扱いされてる気がする。

「よし。じゃ、俺病室戻るね。熱下がったら昨日の話聞かせて」「あ、うん。またね」

玲君はそう言って自分の病室に戻っていく。戻っていく玲君を見送った後、貰ったジュースを開け、飲む。

「美味しい」

そして、私はベッドに横になり、眠った。早く善くなるように。早く玲君に土産話を聞かせてあげられるように。

「かちや……」

……何か、聞こえる。何だろ？

「琉嘉ちゃん」

呼ばれてる。誰だっけ、この声。知ってるはずなのに、分からない。何でだろ？

ん？ああ、そうだ。堤さんだよ。堤さんが呼んでる。返事、しなきゃ。

「ん……」

「おはよう、琉嘉ちゃん。よく眠ってたね。でも、もうお昼ご飯の時間だから、ちゃんと食べてね」

お昼……？あんまり、食べたくないな。

「どうかした？」

「んー。あんまり食べたくない……」

私が言うと、堤さんが「ちょっとコメント」と言っつて私の額に手を当てる。冷たくて気持ちいいな。

「ちょっと待っててね」

堤さんはそう言って病室から出て行く。何だろう？

そして戻ってくると、私に体温計を渡す。また測るの？

「もう一回、熱測ってみて」

堤さんに言われて、体温計を脇に挟む。

しばらく待って、計測が終わる。その結果を見て驚いた。

「何度？」

「39度3分」

「やっぱり上がってたね。先生呼んでくるから横になって待ってて」

39度かあ。通りで頭がボーっとするわけだ。それに、何だかダ
ルい。

そう考えていると、堤さんと由里先生がやってきた。

「琉嘉ちゃん。今どんな感じがする？頭痛いとか、気持ち悪いとか」

「頭痛くないし、気持ち悪くも無いけど、何か頭がボーっとするう。
すっごいダルいー」

「食欲は無いんだっただね。なら、点滴を入れておこうか。あと、熱
冷ましも出しておくから飲んでね」

由里先生が言うと、いつの間にとりに行ったのか、堤さんが点滴
を持って立っている。

そして、私の手を取り、点滴を入れる。あー、痛い。でも反応す
る気力も無い。

「それじゃ、先生は仕事に戻るけど……。何かあったらすぐにナー

スコールで呼んでね。すぐに来るから。もし先生が来れなくても、堤さんが来るから」

「うん。分かったー」

「そう。じゃあ、寝ようか。早く善くなるように」

そう言っつて、由里先生は病室を出て行った。あー、ダルい。

そして私はベッドに横になる。横になると、すぐに睡魔に襲われる。

ああ、堕ちる。

しばらくして、目が覚める。よく寝た感じがするが、どのくらい眠っていたのだろう。考えようとしても、頭がボーっとして考えられない。

「あら、目が覚めたの。調子はどう？」

「おかーさん。今何時？つてか、いつ来たの？」

「今は大体3時くらい。お母さんが来たのは1時半くらい。で、調子はどうなの？」

「頭ボーっとしてるう。てか、会社はどうしたのー？」

「琉嘉が高熱出したつて言う連絡受けてから、早退して来た。お母さんがこんな早くにいるの、イヤだった？」

「んーん。嬉しい」

目を覚ますと、すぐ傍の椅子にお母さんが座っていた。私が起きたのを確認すると、軽く頭を撫でる。冷たくて気持ちがいい。

「お母さんの手、冷たくて気持ちいいね」

私が言っつと、お母さんは優しく微笑んだ。

「これで冷たいって言うのなら、琉嘉、あなたまだ重症だわ」

「ふえ？そなの？」

「ええ。だって、お母さん大分手、暖まってきたるもの。それで冷たいって言うのなら、あなたの熱がまだまだ高い証拠ね」

そう言って、お母さんは立ち上がる。何をしにいくのだろう。

そんなお母さんをじっと見ていると、お母さんが口を開き、何をしに行くのか教えてくれた。

「氷を貰いに行くだけよ。すぐ戻ってくるから」

氷？何に使うんだろう。

まあ、普通に考えれば分かることなんだろうけど、熱で頭が働かない私には不可能なことだった。

氷を貰って戻ってきたお母さんは、洗面器に水を入れ、その中に氷を落とす。そして、その洗面器にタオルを浸け、絞る。

そして、それを私の額に置いた。冷たくて気持ちがいい。

「気持ちいいでしょ？」

「うん」

「さ、夕飯までまた寝なさい。お母さん、琉嘉が起きるまで傍にいるから」

「うん。おやすみー」

そう言って瞼を閉じると、すぐに睡魔に襲われる。そして、堕ちた。

* * * * *

空が、近くにある。地面が、遙か下にある。どこかで見たような世界だ。

「おや。また来たの？琉嘉」

「琉衣」

そう。この世界は以前出会った琉衣が築き上げた世界だ。

「久しぶりだね、琉嘉。現実世界で何かあった？」

「……………」

「琉嘉。ちゃんと質問には答えようね。何かあった？」

「……………熱出してダウンした」

あれ？どうしてだろう。琉衣からお母さんたちと同じような恐ろしいオーラを感じるんだけど。実は阿修羅とか呼び出しちゃってる？あははははは。怖いな。

ていうか、琉衣は私なんだから分かってるはずだよ。嫌がらせですか。

「遊園地の疲れが出たのかな？…そんなに無茶してたっけ？」

「んー。無茶をした自覚は無いんだけどなあ」

漸く恐ろしいオーラが消え、琉衣が私に話しかけた。

ああ、ホッとす。

「ああ、そういえば、手紙を取りに行った時にくしゃみをしてたっけ。多分そのときにもう熱出しかけてたんじゃないかな」

相も変わらずよくご存知で。さすが私自身。

「ついでに言っとくけど、琉嘉。もう戻ったほうがいいよ。この世界と現実世界は時間の流れがかなり違うから。現実世界はそろそろ夕飯時だ」

「うえっ！？そんなに違うの！？」

「戻る？戻るなら案内するよ」

「戻る！」

「そか。なら着いておいで」

そして私は琉衣に着いて行き、前回も通った扉を潜った。

* * * * *

「あら？ちょうどいいタイミングで起きたわね、琉嘉。ご飯は食べれそう？」

「んあ？もうそんな時間かあ。んー。あんまり食べたくないー」

私がポーっとする頭で答えると、お母さんは軽く微笑んだ。そして、言った。

「何なら食べられそう？お粥は食べれそう？」

「んー。無理やり入れ込む」

「……無理やりは止めなさい。とりあえず、一口でもいいから食べなさいね」

「うん」

お母さんはそう言って、お粥をスプーンで取り、ふうふうと冷やしてくれる。

コレを見てふと思う。みんな、私のことえらく子ども扱いしてない？

まあ、今回は体動かすのダルいから嬉しいけどさ。

「はい、琉嘉。口開けて」

うん。でもやっぱり恥ずかしいな。

そして食べ終えると、薬を飲む。薬の数は予想以上に増えていた。これだから熱を出すのは嫌いなんだ。

「さ、薬飲んだならとっとと寝なさい。睡眠に勝る熱の治療法は無いのよ」

「うん」

「お母さん、今日はこれで帰るけど、また明日来るからね」

「休み取ったの?」

「ええ。じゃあ、また明日ね。おやすみ琉嘉」

そして私は横にされ、毛布を肩まで掛けられる。今日あれだけ眠ったはずなのに、またすぐに眠たくなる。

そして、堕ちた。

夜中。ふと目が覚める。今は何時だろう?そう思って時計をしてみる。

辺りは真っ暗だ。

「トイレ行きたいな……」

ポツリと呟く声が、予想以上に響く。その声に少し驚きながらもベッドから降りる。

「うわっ!?!」

今日1日中寝ていたせいか、体がフラフラする。壁に寄りかかり

ながら、ゆつくりとトイレに向かった。

そして、用を済ませて病室へ戻ろうとすると、明かりが此方へ近づいてくる。堤さんかな。

「ああ、いたいた。大丈夫？ 琉嘉ちゃん。歩ける？」

「壁に寄りかかれれば何とかー」

近づいて来たのは予想通り、堤さんだった。病室に私がいなかったから探しに来たんだらう。

「よし。じゃあ病室に戻ろうか」

「あーい」

そして病室に戻った私はぐっすりと眠り、朝を迎えた。

* * * *

私の知らないところで、運命の歯車は回る。
ゆつくりと、されども確実に。
その本人は知らぬまま、少しずつ、回っていく。

「片桐さん。今、お話して大丈夫ですか？」

「先生。はい、大丈夫です」

「では、此方へ。ちょっと此処では話し辛いので」

火曜日。私が寝た後に帰途に着くお母さんを由里先生が捕まえる。そして、部屋に移動して二人が椅子に座るとすぐに、先生は口を開いた。

「わざわざここまでご足労願ったのは、今回の熱の、琉嘉ちゃんへ

の影響についてです」

それを聞いたお母さんは絶句する。それを気にしながらも、先生は話を続けた。

「詳しい検査をしなければ分かりませんが、私の予想では、琉嘉ちゃんの体はもう限界にかなり近づいていると思います。今回の高熱がその証拠です。今までは熱を出してもここまで高くはなりませんでしたが、今回は高すぎます。恐らく、抵抗力がかなり低下しているでしょう。このまま行けば、琉嘉ちゃんに残された命は、あと1年あるかどうか、というところでしょう」

それを聞いたお母さんの顔が蒼白になる。まあ、それもそうだろう。大事な一人娘の寿命を聞かされたのだから。

「回避する方法はないんですか!? あの子はまだ13歳なんですよ?」

「あるにはありますが、これは相当リスクが高いです」

「どんな方法ですか?!?」

「手術を受けさせることです。ですが、今の琉嘉ちゃんの体力では、手術に耐えられるかどうか分かりません。正直、手術中に亡くなる可能性も高いです」

* * * *

「はい」

朝、いつものように堤さんから体温計を渡される。……熱下がっている感じがしない。

ピピピッという電子音が測定の終了を知らせる。

結果は……。うん、下がってないね。

「何度？」

「38度8分」

「今日も、寝てなさいね」

「言われずともつろちよろする体力無いってえ」

「それもそうね。で、食欲はどう？」

「無いー」

「まあ、お粥だから、一口くらい食べてね。で、薬飲んでとっとと眠っちゃいなさい」

「うん」

そう言われて、お粥に手を伸ばす。あんまり食べたくは無だけれど、薬を飲むために無理やり一口放り込んだ。そして薬を飲み、ベッドに横になる。

「よっし。んじゃ、おやすみー」

「おやすみ、琉嘉ちゃん」

そして私は眠りに落ちる。

ご飯を食べ、薬を飲み、眠る。それが昨日から数えて、3日続いた。

先生と玲君

熱を出して4日目の朝。木曜日。

やっと、朝起きてすぐの体温が平熱に戻る。これなら屋上へ行けるだろうか。

「ダメ」

体温計を堤さんに戻しながら考えていると、先に釘を差された。まだ何も言っていなかったのに。

「まだ何も言っていないよ？」

「どうせ、今日から屋上へ行っていていいか、とかそんなんでしょう？それはまだダメです」

凶星だ。どうして言わなくても分かったんだろう。

そう思いながら頬を膨らませていると、堤さんがその膨らんだ頬をつつきながら言った。

「今日熱が上がらなければ明日からOK出ると思うから、それまで我慢しててね」

「はい」

「あ、あと一つ。今日は点滴の日だからね。ちゃんと病室にいるようにしてね」

忘れてた。そういえば、今日は木曜日だっけ。

これは余談だが、今日はお母さんは仕事だ。ていうか、火曜日は有給を取って私に付いていてくれたのだが、それから続けて休むこ

とは出来なかつたらしく、仕事が終わってから様子を見に来ていたようだった。

だから、今日も仕事が終わったら来るのだろう。

そして、今日はもう眠らず、今まで熱のせいで出来なかつたノートを写しにかかる。明日先生が来るから早く済ませなければ。

集中するために、iPodを使い、音楽をかける。しばらくやっている、かけている音楽が気にならないほどに集中できた。

そうなつたらもう音楽は必要ないので、イヤホンを外す。

そしてずっと書き続けていると、病室の扉がノックされる音が聞こえてきた。

ゆっくりと扉を開けて此方を覗いてきたのは玲君だった。

「あれ？琉嘉が起きてる。もう大丈夫なの？」

「まだ万全つてわけじゃないけど、昨日一昨日と比べたらかなりいいよー」

「ふーん。まだ万全じゃないんだあ」

そう言つて此方を見てくる玲君の視線が冷たい。どうしてだろう。

「琉嘉。万全じゃないのに勉強してたの？知恵熱出しちゃうよ？」

玲君の地雷はそこか。大丈夫なのに。

「大丈夫だよ、そんな心配しなくても。それに、明日先生が来るから今日のうちに終わらせなくちゃなんだ」

「ダメ。此処まで言つて続ける気なら、ノートとコピー没収する」

それは困る。取られたら明日も何も出来なくなる。

「そ……………それは勘弁してください」

「じゃ、片付けて」
「はい」

仕方なく、頷いてノートとコピーを引き出しにしまう。明日どうしようかな。

先生への言い訳を考えておかなくては。一方的に叱られるのは割に合わない。

ああ、丁度いい。玲君にも考えてもらおう。

「ね、玲君。ちょっといい？」

「ん？どしたの？琉嘉」

「学校の先生への言い訳を一緒に考えて欲しい」

私が言うと、玲君は目を真ん丸にする。そして、笑った。

「はははっ。先生への言い訳かぁ。良いよ良いよ。手伝う」

「ありがとう玲君。感謝するよう」

「で、何に対する言い訳？」

そういえば、言っていなかったっけ。

「ノート写しきれなかったことに対する言い訳」

私が言うと、玲君はまたも目を真ん丸にする。

そんな驚くことかな？

「……………どういふ風に言えばいいと思うっ？」

「ん？じゃあ俺が先生に説明してあげるよ。琉嘉はずっと熱出して寝込んでた、って」

「でも、今日は元気だし……………」

「まだ万全じゃないだろう？」

「あうううう」

「いざとなったら俺が止めた、って言うてあげるから。な？」

そこまで言われると諦めざるを得ない。というわけで、明日先生が来た時は玲君にも同席してもらおう。

「ところで、その先生は何時ごろ来るの？」

「本谷先生？いつも大体3時くらいに来てるよー」

「本谷？」

「うん。それがどうかした？」

「いや、何でも無い。気にしないで」

そしてそれからもしばらく話して、昼食の時間がやってきた。昼食を食べるために、玲君は病室へ戻る。

今日の昼食は、お粥だった。

「堤さーん。何でまだお粥？」

「琉嘉ちゃんがまだ万全じゃないからです。はい、熱測ってね」

堤さんはニツコリと微笑みながら体温計を渡す。もう大丈夫だと思っただけだな。

そう思いながらも体温を測る。はい、平熱でした。これで明日から屋上へ行けますね。

「何度だった？」

「36度6分。完治！」

「うん。この時間にその体温ならもう大丈夫かな」

「じゃあ、明日から屋上行ってもいい！？」

「うん、いいよ。先生もいって言うてたから」

「やったーい！」

「でも、お昼までは一応薬は飲んでね」

「……………あーい」

一気に萎えた。せつかく屋上OK出たのに。まあ、いいよ。お昼までだもん。夜出されても飲まないもん。……………ちゃんと言質は取ったし。

そして、味気の無いお粥をゆっくりと飲み込む。夜からは普通のご飯になるといいな。

出されたお粥を全て平らげ、薬を飲んだ後は読書タイム。先週読みかけていた本を取り、開く。

私は静かな環境の中、本の世界に入り込んだ。

「琉嘉ちゃん。琉嘉ちゃん？」

読んでいるページに、手が見える。誰だ妨害してるのは。

そう思いながら顔を上げると、堤さんが点滴を持って立っていた。

「あ、やっと気が付いてくれたね。いやー、長かったわー」

「もうそんな時間？ていうか、そんな気づくの遅かった？」

「ええ。最初来た時に声をかけてから準備をしてただけでそれでも気が付いていなかったみたいだったから、本のページに手を出して妨害した。そこまでやって、やっと気付いてくれたのよね」

ああ、妨害の自覚はあったんですね。……………まあ、私が悪いのだから文句は言えないが。

「点滴入れたらまた本読んでもいいから。ね？だから手、出して」

その通りなので、大人しく手を出す。ああ、またあの嫌なおいが漂う。早く消え去れこのにおいめ！

点滴を入れ終えて、堤さんは病室から出て行く。さ、続き読もうと。

結局、今日はお昼からずーっと本を読んで過ごした。久しぶりに沢山読んだからスッキリした。

そして夜が明け、金曜日。勝負の日。

今日は昼食を食べ終えると、すぐに玲君が私の病室へ来てくれる。昨日言ったことは忘れていなかったようだ。

「琉嘉。先生が来るの何時ごろって言ってたっけ？」

「え？大体3時くらいかなあ」

「……まだ時間あるな。屋上行かないか？」

玲君は時計を見てから、此方を向き微笑みながら言った。

……その意見に私が反対するでも思っているのですか玲斗君。

「よし。じゃ、行こっか」

「うん」

そして私たちは一緒に屋上へと向かう。屋上は久しぶりだ。最後に屋上に来たのが玲君とあった日だから、大体1週間振りくらいかな。

「うわー。久しぶりの屋上。幸せだーあ」

「今日は天気もいいから気持ちいいな」

私たちはそう言いながら空を見上げる。雲が流れていくのがよくわかる。

それがもつと見やすくなるように、私たちは屋上に寝転がる。空

が目の前に現れる。

「綺麗だな」

「うん。空が真っ青だあ」

「いや。空じゃないよ。琉嘉がだ。太陽の光を浴びてキラキラ輝いてて、綺麗だ」

それを聞いた私の顔が一気に真っ赤になる。ていうか、何で玲君はそんな簡単に齒の浮くような科白を言えるのだろうか。

「ははっ。琉嘉の顔真っ赤だ。かわいい」

今度はかわいいですかい。くそっ、言われ慣れてないから照れる。

「……気障」

「ん？何か言ったかい？琉嘉。いや、言ってないよね？俺の気のせいだよね？」

ポツリと呟いた言葉に玲君が過激に反応する。言うてはいけない言葉のようだ。今後のために覚えておこう。

そして、私たちは静かに空を見上げる。何かの形に似ている雲を眺めて笑ったり、流れていく雲を目で追いかけたりした。

そして、瞬く間にそんな楽しい時間は過ぎて、先生の来る時間が近づいてきた。

「お……っと。そろそろ琉嘉の学校の先生が来る時間だな。戻ろうか」

「もうそんな時間かあ。玲君、先生の説得お願いします！」

「アイアイサー。お任せあれ」

そして私たちは私の病室へ戻る。先生はまだ来ていないので、のんびりと二人で遊園地のことを話した。

しばらく話していると、病室の扉がノックされる。返事をするとき扉を開け、本谷先生が入ってきた。

何故か目を真ん丸にしている。何事？

「こんにちは、片桐さん。ところで、どうして玲がこんなところにいるんですか？」

「本谷と聞いてまさかとは思ったけど、ホントに姉ちゃんだったのか」

……姉ちゃん？

「いいから質問に答えなさい、玲。何故あなたが片桐さんの病室にというか、この病院にいるんですか」

「この病院に転院してきたから。伯母ちゃんに伝えただけで、聞いてない？んで、琉嘉と友達になったから琉嘉の病室にいる。はい、おっけ？」

「聞いていればこんな反応はしませんよ。まったく、母さんもどうして言ってくれなかったんだか」

話が途切れたようだ。それを見計らって、漸く口を挟む。

「先生と玲君、どういう関係ですか？」

「ん？従姉だよ」

「玲の言うとおりです」

従姉。だから姉ちゃん、か。だから私が先生の名前を出した時にあんな反応をしたのか。

「あ、そだ。早く琉嘉に頼まれたことやらなきゃな」

「何です？」

「姉ちゃん。琉嘉を叱るなよ？」

「私が叱るようなことをしたんですか？片桐さん」

「…先週分のノート、まだ写しきれてないカラ……」

「まあ、それには俺も少し責任があるからさ」

私と玲君が立て続けに言うと、先生は目をまん丸にする。そして、口を開く。

「そのくらいで叱るつもりは一切ありませんが、一応聞きまじょうか。玲、あなたの責任とは何です？」

「琉嘉、月曜日から昨日まで、ずっと体調崩してたんだ。熱もかなり高かったし。それなのに、ノート写さなきゃ、って言うから、俺が無理やり止めさせたんだ。それでもやるなら没収するって脅しかけて」

それを聞いた本谷先生は、玲君の頭を撫でながら言った。

「それに関しては、玲。あなたが正解です。ただ、脅しをかけた事だけはいただけませんね。片桐さんに謝りなさい」

「ゴメン琉嘉」

玲君にいきなり謝られて、焦った。何か言わなきゃなのに、頭が働かなくて、言うことがまとまらない。

私が一人そうしてあたふたしていると、本谷先生は私のほうを向く。そして、口を開いた。

「片桐さん。調子が悪い時に無理に勉強しなくてもいいんですよ。寧ろ、頭に入らないでしょう？今度からは、体調を崩した時はしっ

かり休んで、早く善くなるように努力してくださいね」

「……ごめんなさい。玲君もゴメンね。心配掛けちゃって」

「い、いいよ。そんなの。俺が好きでやったことなんだから」

玲君も私も、顔を真っ赤にして話をする。そんな様子を本谷先生は優しいまなざしで見つめていた。

そして、不意に口を開く。

「さて、では今週分のコピーの説明に入りましょうか。玲。丁度いいからあなたも聞いていきなさい」

説明、といった時点で逃げようとする玲君を先生が言葉で制する。動きを止められた玲君は嫌そうな顔をしていた。

「ご愁傷様です。」

そして説明を終えて、私は先週分のノートを写す。その間、先生と玲君は話をしていた。

「玲。あなたも勉強を見てあげましょうか？」

「いい」

「レポートの課題を出されているんでしょう？あなたが素直になれば手伝ってあげますよ。もちろん、貸しですが」

「姉ちゃんに借りを作ると後が怖いから嫌だ」

「おや？失礼ですね。私のどこが怖いんですか」

「前借り作った時は徹底的にパシられた」

「それは年下の運命ですよ」

聞いておくと結構ひどいこと言ってるなあ。本谷先生の本性見たり。

「じゃあ、先に払わせましょうか。玲。奢ってあげますから、3人

分の飲み物を買ってきなさい。私はコーヒーで。それだけで立派なレポートが出来るんですから安いものでしょう」

「ん……。まあ、そのくらいなら……」

そう言っつて玲君は立ち上がる。そして、本谷先生からお金を受けとり、自販機へと向かっていった。

「邪魔者はいなくなりましたね。さて、片桐さん。何か質問はありますか？」

唐突に話が振られて焦る。そのせいか、書き間違えた。

そんな私に微笑みながら、先生は、言う。

「片桐さん。玲と仲良くしてあげてくださいね。あの子は小さい頃からずっと病院暮らしであまり友達がいませんから」

「先生。私を馬鹿にしていますか？」

私はそう言っつて、笑う。

「そういうのは、言われてするものじゃないでしょう？ 私は、玲君が好きだから一緒にいるんです」

私が言っつと、先生は優しく笑った。

「ありがとう、片桐さん」

「だから、お礼を言われることじゃありませんっつてばあ」

と、話していると丁度よく玲君が戻ってきた。

「姉ちゃん、コーヒーマグでよかったんだっけ？ 琉嘉はネクタ

「でよかった？」

「よく覚えてましたね、玲。褒めてあげましょう」

「馬鹿にするな！あ、琉嘉はそれでいい？」

「うん。寧ろそれ大好き。ありがとう玲君、先生」

私が言うと、玲君はニツコリ笑う。何だかかわいいぞ。

そしてジュースを貰った私は缶を開け、飲む。美味しいなあ。

「琉嘉、お疲れ。とりあえずしばらく休憩しようか」

「そうですね。ずっと書いていましたから疲れたでしょう。しばらく休憩しましょうか」

「はいっ」

休憩を終えた後、またノートを写す。今日、先生が帰ったのはもうすぐ夕飯、という時間だった。

「おっと。予想以上に長居してしまいましたね。今日はこれで失礼します」

「あ、はい。今日はありがとうございました」

「玲。片桐さんに変な事をしないように」

「変なことって何だよ！？何もしないって！！！！」

先生は面白そうに、玲君は面白くなさそうにしている。先生は、見ている限りではとても楽しそうだ。

「先生。楽しそうですね」

「ええ。楽しいですよ。玲はいいオモチャでしょう？」

「オモチャって言うな！」

「オモチャはオモチャでしょう」

玲君の反応を先生は一蹴する。うん、先生って意外と性格悪かったんだな。今初めて知った。

「オモチャって言う考えは一切無いですが、玲君といると楽しいですな」

「琉嘉……」

「オモチャと考えたほうが楽しいんですがねえ」

私の言葉に感動する玲君と、それをまだ馬鹿にする先生。ていうか、どこまで性格悪いんですか先生。

「もう喋るな！早く帰れよ、姉ちゃん！」

「おやおや。弄りすぎましたね。では、今日は帰りますね。では片桐さん。また来週」

そして先生は帰っていく。玲君は清々とした顔をしていた。

「じゃ、俺も病室戻るな。そろそろ夕飯の時間だし。また明日話そうな」

「うん。今日はゴメンね。嫌な思いさせて」

「琉嘉が謝る必要は無い。悪いのは全部姉ちゃんだ」
「ありがとう。じゃあ、また明日ね」

そして夕飯を食べて、私はまたノートを写す。そのおかげで、先週の分は何とか終わらせることが出来た。明日からは今週の分を写さなくては。

写し終えてからテレビをつける。ああ、何かテレビ見るのも久しぶりな感じ。まあ、事実久しぶりだしなあ。

しばらくして、電気が消える。もう消灯時間か。それを確認して、布団に潜り込む。ぬくぬく。

.....
墮ちた。

家族

「琉嘉あー。琉嘉。朝だよ、起きて」

朝、目を覚ます。そうしたら、またも玲君が目の前にいました。

「おはよう、琉嘉。よく眠れた？」

「おはよー玲君。また早く目が覚めたの？」

そう言って話していると、堤さんがやってくる。

「あら？玲斗君、また琉嘉ちゃんを起こしに来たの？やるねえ」

「ええ。琉嘉を起こすのって疲れますね」

「でしょう？私もいつも苦労してるのよー」

「って、何を、話してるのさ！ー！」

この二人が揃つと最悪だということがよくわかった。性質が悪い。

「さ、玲斗君も病室に戻ってね」

「はい。じゃ、琉嘉。また後で遊びに来るよ」

「うん。待ってるよ」

そう言って玲君は自分の病室へ戻っていく。そして私は検温の間。今日も熱は無い、と。

よかったよかった。

ご飯を食べていると、早速玲君が遊びに来る。もう食べ終わったのか。私はまだ食べてるのに。

「あれ？まだ食べてたか」

「玲君食べるの早すぎ」

「普通普通」

「普通じゃない。明らかに早いです」

意味も無い舌戦が繰り広げられる。でも、それも楽しい。結果、しばらくして二人揃って笑い声を上げることになった。

そうやって、玲君と一緒に笑うようになってから、半年が過ぎた。私は中学3年生に。玲君は高校2年生へと進級していた。

「あー、もう。勉強なんて嫌いだよ」

「大変だなあ、受験生。精々頑張れよー」

「玲君、他人事だからってひど過ぎない？鬼！悪魔！冷血漢！」

「ちよっ！そこまで言うか!？」

受験生となった私は、進学する高校こそはまだ考えてはいないが、病院にいる間にちよこちよこと勉強をするようになった。

そしてその勉強を妨害するかのよう玲君が現れる。まあ、たまに教えてくれるから気にはしていないが、邪魔しかしないのならば即、追い出す。先に宣告しておいたので、やっても文句は言われな
いだろう。

ついでだが、3年生になっても担任は本谷先生のままだった。よ
っちゃんももちろん一緒である。そして、本谷先生で思い出す。

「玲君。今日本谷先生来るけどどうする？」

「げ！姉ちゃん来るの今日だったっけ？」

「いや。ホントは明日だけど、質問があるんですけど、ってメールしたら今日も来てくれるって」

「どうして俺に聞かないのさ？俺が分かる問題なら教えてあげるのに」

あはははは。だって、以前玲君に聞いて分からなかった問題だし。だからしょうがないよね。

あー、李旺にいたら分かるかな。ま、来ないだろうからいいや。

コンコンッ

「琉嘉。俺だ。入るぞ？」

おや？噂をすれば。ちょうどよく李旺にいがやってきた。

「久しぶりだな、琉嘉。元気にしてたか？」

「久しぶり、李旺にい。丁度いいところに来てくれたねー」

「どうした？俺に聞けることなら聞いてやるぞ？」

「わーい。さすがお兄ちゃん。……ここの解き方教えて」

そう言っって私は分からなかった問題を李旺にいに見せる。李旺にいたら丁寧の説明してくれるだろう。

「ああ、これか。これは因数分解してから考えていけばいいんだ。

因数分解はさすがに分かるな？」

「それはさすがに……」

「ほら、そこまで分かったんだから、いったん自分で考えてみな。

分からなくなったら説明してやるから。………ところで琉嘉。コレ、誰だ？」

そう言っって李旺にいは玲君を見る。そういえば、会った事なかったんだっけ。

「玲君、こっちは私のお兄ちゃん、李旺。お兄ちゃん、彼はお友達
の玲君」

「初めまして、琉嘉のお兄さん。朝霧玲斗です」

「朝霧……………」

「…知り合い？」

玲君にお兄ちゃんを。お兄ちゃんに玲君を紹介すると、お兄ちゃん
が何か考えているような顔をする。ひよっとして、知り合いです
か？

ちなみに、玲君はお兄ちゃんのことには知らない模様。つまり、お
兄ちゃんが一方的に知っていると言っことになる。…何なんだろう。

「李旺にい？りーおーにいー？お兄ちゃん？だいじょぶ？」

そこまで言っつて、お兄ちゃんは漸く元に戻る。とりあえず、話を
聞いてみようかな。

「ね、李旺にい。李旺にいには玲君知ってるの？」

「知ってるとは言いがたい。もしかしたら、っつて言っただけだ」

「なら、聞いてみれば？玲君に直接」

私が玲君のほうを見ながら言っつと、玲君は自分を指差して、目を
丸くする。逆に、お兄ちゃんは淡く微笑む。

「そうだな。なら、聞く。高校はどこだ？」

「ん？俺のガッコ？私立片桐学園だけど、それがどうかした？」

「やっぱり」

「やっぱりっつてことは、お兄ちゃんは玲君を知ってるの？」

私が問うと、お兄ちゃんは優しく微笑みながら私の頭を撫で、言った。

「2組の幽霊、朝霧玲斗。入学式以来誰も見たことがないと言う不思議な存在。たまに保健室登校をしているって言う噂もあるな」

「へー。俺ってば幽霊扱いされてるのか。単純に入院してるから学校行けてないだけなのに」

幽霊って。お兄ちゃんの同級生、色々考えるな。

ていうか、それって微笑みながら言うことじゃないよね？何考えてるの、お兄ちゃん。

「ところで、琉嘉のお兄さん、何年生？上？同じ？」

「同じ。隣のクラスだ。学校来たら頼っていいぞ」

「それはそれは。頼りにさせていただきます」

「ま、条件つけるけどな」

悪魔だ。悪魔がここにいる。普段優しいお兄ちゃんが悪魔になつておられる。

お母さんの後ろにいるのは阿修羅だけど、お兄ちゃんの後ろには悪魔が、サタンが見えるよ。

「一応聞く。条件って何？」

あ、一応聞くんだ。聞かずに無視してもいいのに。そう言おうと口を開くと、丁度よく妨害するかのようにお兄ちゃんが声を発した。

「なーあに、簡単なもんだよ。条件1、琉嘉を泣かせるな。泣かせたらそれが分かった時点でシメる。条件2、学校来た以上は、ちゃんと1時間くらい授業に出ること。でなかったら理事長報告で何が

起こるか分からないから」

うわぁ。理事長まで使う気ですか、お兄ちゃん。

玲君は絶句している。まあ、当たり前だろう。何とコメントすればいいのかわからないことを言われたのだし。

「ちょっと、待て。琉嘉のお兄さん。理事長に報告って、出来るのか？」

「李旺でいい。で、質問の答えだが、出来るぞ？まず、学校の名前を考えてみる。それで思い当たることは無いか？」

「私立、片桐学園……。まさか、李旺の家が経営してる学校か！？」

それを聞いたお兄ちゃんは楽しそうに笑う。…さすが悪魔。

そして私は静かに頷く。

「はっはっはー。やっと分かりましたか、2組の幽霊朝霧君。あの学校はうちのジジイの経営する学校だ。だから、いざとなったら俺が理事長に進言することも出来るのさ。悪事だろうが、善事だろうがな」

「俺も玲斗でいい。変な呼び方止めてくれ。ていうか、家の権力使うのって卑怯じゃないか？」

「お前が条件を飲めば問題ないだろう。それなら俺は理事長室には極力近寄らないからな」

性悪。その言葉が今のお兄ちゃんにはピッタリだろう。

口を挟める隙の無い会話をずっと聞いていた私はそんなことを考える。そうやって考えていると、いきなりお兄ちゃんが此方を向いて言った。

「ああ、そういえば、琉嘉。お前、高校どうするんだ？ジジイの学校に行くか？」

「ふえ？」

いきなりすぎて、答えることが出来なかった。ていうか、いきなりこつちに話を振らないで欲しい。

「まだ進学先に関しては考えてないのか？」

「あー、うん」

「そうか。でもそろそろ真剣に考えておけよ。お前の体のことも踏まえてな」

そう。私の場合は、この病気が枷となる。普通の高校に行っても出席日数などを考えれば進級できず、退学になる可能性だってある。おじいちゃんの学校ならば、入院中はレポートを出すことで単位を取得できるようになっているので、そこは問題は無い。実際、玲君はそうして進級してきたらしい。

おじいちゃんの学校に行くべきかな。行くべきなんだろうな。お兄ちゃんもいるし。

ちよつとしんみりしてきた。そして、そんな私に気が付いたお兄ちゃんはわざと明るい声で話しかけてきた。

「さて、他に分からないところはるか？あるなら今のうちに言っちゃまえ。教えてやるから」

「うん。じゃ、コレ」

そう言っつて私が指差すのは因数分解の応用問題。教えてくれるっつて言っつたよね、お兄ちゃん。分からないなんてことは無いよね、お兄ちゃん。

問題を見たお兄ちゃんが止まる。まさか、本当に分からないフラ

グですか？

「ちょっと待ってな。あと、紙とシャーペン借りるぞ。一回解いてみる」

「うん。分かったら教えてね。私先のほう解いておくから」
「おー」

お兄ちゃんはそう言って問題を解きにかかる。うん、真剣だね。

「そいや、姉ちゃん来るの遅くないか？」

しばらく沈黙を保っていた玲君が口を開く。確かに遅い。

「メール、してみるか？」

「うーん。お兄ちゃんが解き終わっても来なかったらメールしよう」

そして数分後、病室の扉がノックされた。

「こんにちは、片桐さん。遅くなって申し訳ありません」

「こんにちは、先生」

「おや。今日も玲は片桐さんの病室に入り浸っているのですか。玲、片桐さんに迷惑を掛けていないでしょうね？」

「掛けてない掛けてない。姉ちゃん気にしすぎ」

と、こうやって話していると、ずっと解いていたお兄ちゃんがいきなり顔を上げる。解き終わったのかな？

「李旺にいい、出来た？」

「おう。………って、何でモトヤンがここにいるんだ？ていうか、いつの間に来た？」

「お久しぶりですね、片桐兄。高校生活は如何です？」

モトヤンとは本谷先生のことだろうか。ていうか、私とお兄ちゃん呼び方の区別のつけ方ひどいな。それはお兄ちゃんも思った模様。

「片桐兄、て表現ひどくない？モトヤン」

「ならあなたもちゃんと本谷先生と呼びなさい。そうしたらきちんと片桐君と呼んであげます」

「モトヤンはモトヤンだろう。2年生まで俺らの担任だったくせに「ええ、そうですね。それであなたがその名前をつけたんでしたね」

バトル勃発。うん、この分からない問題どうすればいいんだろう。ついでに、玲君はいつの間にか消えていた。いつの間にいなくなっただろう。

ま、いいか。とりあえず、先のほうを解いておこうっと。

「大体あなたは教師に対する態度がなっていないんです」
「仕方ないだろう。コレが俺だ」

カリカリ。

「少しくらい改善する努力をなさい」

「失礼な。高校では適度に猫を被ってるぞ。俺がこういう態度を見せるのはモトヤンだけだ」

「だから、モトヤンと呼ぶのを止めなさい、片桐兄」

「モトヤンこそ片桐兄って言うの止める」

カリカリカリ。

「だから、ちゃんと呼んで欲しいのならモトヤンではなく本谷先生と言いなさい」

「卒業した以上何も関係ないだろう」

「ならば、目上の人に対する態度をとりなさい」

「あーはいはい。申し訳ありませんでした。これでいいか？」

カリカリカリカリ。

………まだ続いてたのか。さすがに、止めるべきだよな。

「李旺にい、ちよつといい？」

私が言うと、言いあいをしていたお兄ちゃんと先生が此方を向く。

「どうした？ 琉嘉」

「お兄ちゃん、そろそろ止めなよ。ていうか、さっきの問題の説明欲しいな」

「ん？ ああ、悪い悪い」

「本谷先生もお兄ちゃんの説明手伝ってもらえますか？ お兄ちゃんだけだとたまに判らないこと言うので」

私が言うと、本谷先生は優しく微笑んだ。

「妹さんは礼儀正しいのに、どうしてお兄さんは性格捻くれてるんでしょうね」

「俺は性格捻くれてはないぞ」

本谷先生が呟くと、お兄ちゃんが即座に反応する。よし、止めないとさっきの二の舞ですね。

「いいから説明！ してくれなきゃお母さんに言っちゃうわ？ 李旺に

いが本谷先生に喧嘩売った、って」

そう言った途端、お兄ちゃんの動きが止まる。効果アリ。

「……琉嘉？母さんに言うのは勘弁してくれる？な？謝るからさ。俺が悪かった。だから、母さんに言うのはヤメテ」

「……お父さんならいいの？」

ちよつと意地悪な感じで言ってみた。さて、どういう反応を見せてくれるかな？

「父さんに言ったら自動的に母さんにも伝わるだろうが、馬鹿。だから、父さんにも母さんにも言わないでくれ。今度ジュース奢るか
ら」

「んー。分かった。でも、次先生に喧嘩売ったら何があっても言う
からね」

「……らじゃ」

お兄ちゃんにはお母さんが効くようだ。それは昔から変わらない。分かりやすくいいよ、お兄ちゃん。

そして、お兄ちゃんが立ち上がる。何をするんだろう。

「琉嘉。ジュース買って来るから、それまではこのセンセイに聞いてる。ネクターでいいな？で、センセイは何がいい？」

「おや？奢ってくれるのですか？片桐君。では、コーヒーのブラックをお願いできますか？」

「了解。琉嘉もいいんだな」

私が頷くと、お兄ちゃんは病室を出て行った。

そして、本谷先生はノートを指差し、言う。

「さて、分からない問題はどれです？」

「あ、コレとコレです」

私は分からない問題を指差しながら言う。すると本谷先生は「少し考えさせてください」と言って、考え出す。

そしてしばらく考えてから、紙を取り出して何かを書き始めた。

「よし。さて、片桐さん。コレを見てください」

そう言って、さつき先生が書いた紙を見せられる。そこには、因数分解の基本が色々と書いてあった。

それを見ながら説明が始まる。

そしてその説明を終えて、漸く理解できた頃にお兄ちゃんが戻ってきた。

「お帰り李旺にい。遅かったね」

「ああ。自販機が混んでてな。ホレ、ネクター桃。センセイはジョージアのコーヒーでよかったか？」

「ええ。ありがとございます片桐君」

「どう致しまして。で、琉嘉。さっきの問題は理解できたか？」
「うん」

私が答えると、お兄ちゃんは微笑んで、缶を開けてくれる。そこまですなくてもいいのにといつも思うが、まあ、気にしない。

「いただきます」

私はそう言って缶に口をつける。ああ、甘くて美味しい。

「うまいか？」

「うんっ！」

「そーかそーか」

お兄ちゃんはそう言って微笑みながら私の頭を撫でる。ていうか、私の周りって頭撫でる人多いな。

お父さんにお母さん、それからお兄ちゃんに彩ねえ。それと玲君や堤さんに、由里先生。あとは本谷先生もか。

……………多すぎだね。

そんな私を見たお兄ちゃんが私に声をかける。すこし心配そうな声音だ。

「どうした？ 琉嘉。調子でも悪いのか？」

「んーん。ちよつと考え事してただけだよ。大丈夫大丈夫」

「そうか。ならいいよ」

お兄ちゃんたら心配性。まあ、コレも昔からか。小さい頃からずっとこうで、小さい時は純粹に嬉しかったけれど、大きくなつてくると若干ウザい。

どうしてこんなにも心配性なのか。一生治らないのかな、コレは優しくしてくれるのは確かに嬉しい。だけど、正直ウザい。でも、直接言えないから、変わらず……………いや、寧ろウザさが増している。どうしてこんなに心配性なんだろうか。偶にしか会えないから？ それにしても心配性すぎる。なら、どうしてだろうか。

「片桐さん、片桐君。先生、そろそろお暇しますね。分からない問題が出てきたらメールをください。明日来たときにその問題にちょうどいい参考書を持ってきますから」

「え？ あ、はい。ありがとうございます、先生」

「モトヤン明日も来るのか？」

「ええ。本来は毎週金曜日に1週間分のノートのコピーを持ってきているんです。今日は片桐さんから質問のメールがあったから来たんですよ。文句ありますか？片桐兄」

……二人とも呼び方戻ってるし。

うーん、コレはお母さんに報告すべきかな。どうしようかな。ジューズも奢ってもらったし。

また舌戦始まってると、報告決定。とりあえず、お兄ちゃんにはお知らせしておきましょう。

「李旺にい。お母さんに報告するね」

それを言うと、お兄ちゃんは瞬時に此方を向いた。動きが早すぎて怖い。体がビクツってなったよ。

「ちょっと待て琉嘉。ジューズ奢ってやったじゃないかあ」

「えー？ちゃんとやっておいたじゃん。次喧嘩売ったら何があっても言うって。ちゃんと警告したもん」

「コレは喧嘩を売ってるんじゃない。事実に対して突っ込みを入れているだけだ」

「問答無用。ていうか、そろそろお母さん来るはずだよ」

そう言うと、お兄ちゃんは今度は病室の扉を見る。まだ来っていない模様。このタイミングで来れば面白かったのに。

「さて、片桐兄も止まったことですし、今度こそ失礼しますね」

「あ、はい。また明日よろしく願います」

「はい。明日は玲もしっかりと捕まえて置いてください。面白いから」

「明日は玲君で遊ぶんですか」

「ええ。では、また明日」

そう言っただけで先生は帰っていった。そしてそれを確認したお兄ちゃんが口を開く。

「琉嘉。母さんには黙っておいてくれ。今度外出許可取れたら俺も無理に部活休みとって帰ってくるから、どこか遊びに行こう。な？」

「はいはい。分かりました。……………そういえば、今更コレ聞くのもなんだけど……………今日木曜日なのに、どうして戻ってきてるの？」

「ん？明日創立記念日。休みだから顧問に頼み込んで日曜まで部活休んで帰ってきた。はいオーケー？」

「おっけ。なるほどね。……………じゃあ、明日も病院長来る？」

私が言うと、お兄ちゃんは優しく微笑み、手を私の頭に載せた。

大きい手のひらが温かい。

「琉嘉が望むなら帰るまで来てやるよ。どうしてほしい？」

「来て！いっぱい話そう！」

「了解。で、今度はこっちから質問いいか？」

「いいよおう」

「モトヤンと玲斗はどういう関係だ？モトヤンの言っていることを聞いている限り、随分と親しそうだったが」

お兄ちゃんは私の目をジッと見て、問う。だから私もジッと見返しながら答えた。

「イトコだって。先生曰く、玲君はオモチャ。玲君曰く、先生は悪魔だそーですが」

「……………悪魔って、あまりにも似合いですぎてるな。っていうか、玲斗とは気が合いそうだな。今度話をする機会を作りたいな」

お兄ちゃんはそう言って笑う。そんなにツボる所かなあ。まあ、人によってツボってかなり違うし、まあ、いいか。

そしてそれからお母さんが来るまで、ずっと話をした。まあ、話をしたと言っても、私は一方的に聞く側だったが。

でも、おかげで高校生活の楽しさがよく分かった。高校生になったら学校に行けるといいな。

そうやって話していると、病室の扉がノックされる。そこにいたのはお父さんとお母さんだった。

「おや？いつ帰ってきたんだ？李旺」

「今日の昼過ぎ」

「夜に帰ってくると思ってたんだが、予想外だったな」

「まあ、いいじゃないの。琉嘉、久しぶりに李旺と話して楽しかった？」

「うん」

そして、そこからはお父さんやお母さんも混じって、お兄ちゃんの高校の話になった。

ちなみに、お父さんもおじいちゃんの学校の卒業生である。なので、お父さんの頃と今で変わっているところなどの話をした。

「まだあそこあるか？呪われた倉庫」

「何だよソレ？知らないぞ、俺」

「北館の屋上からボロツちい小屋が見えないか？それが呪われた倉庫だ」

ていうか、呪われてるなら早く壊せばいいのに。

「んなもんもう無いぞ。北館の屋上なら俺の指定席だからよく見て

る」

「なら、壊されたのか。壊した人たち大丈夫だったのかな？」

あれ？もう壊されてたや。ていうか、私とお母さんは着いていない。そう思いながらお母さんを見ると、口に指を当てている。

どうしてか疑問に思い、小さな声でお母さんに聞いてみた。

「どうしてシートなの？」

「お父さんがすっごく楽しそうにしてるから」

なんじゃそりゃ。でも、確かにお父さんがこんなに楽しそうにしてるのを見るのは珍しい。

結果、しばらく聞くだけにしておいたのだが、聞いていて疲れてくる。

……喉渴いたな。そう思い、お母さんの服の袖を引っ張り、話しかける。

「お母さん、喉渴いた。何か飲むもの無い？」

「飲むもの？お茶ならあるけど」

「頂戴」

私はお茶のペットボトルを受け取り、飲む。渴いた喉に水分が浸み込む。

そして飲み終えたペットボトルをお母さんに戻していると、扉がノックされた。誰だろう。

「琉嘉。入っていいか？」

玲君だった。玲君は返事を待つ前に扉を開ける。そして、お父さんと目が合う。

「……家族団欒中に失礼しました。琉嘉。また明日来るよ」

そう言っ出て行くこうとする玲君を、お兄ちゃんが止める。お兄ちゃんの手は玲君の腕をしっかりとつかんでいて、逃げられそうに無い。

「な、なんなんだ。李旺」

「まあ落ち着け玲斗。今話してるのは高校の話だ。お前が聞いていても損は無い」

「いや、でもせっかくの家族団欒中だろう」

「問題ない」

お兄ちゃんはそう言っ玲君を無理やり連れ込む。その間、玲君はずっと助けて欲しそうな目を向けていたが、無視した。

どうせ、お兄ちゃんには口でも手でも勝てないから。

「君は李旺のお友達かい？」

連れて来られた玲君に対し、お父さんが質問をする。

「いえ、寧ろ琉嘉の友達です。李旺とは今日始めて会ったばかりです」

「ほう。琉嘉の。ああ、そういえば先日出かけるときに病室の前に立っていたね」

「あ、はい」

「これからも、仲良くしてやってくれるかな？」

「もちろんです！」

玲君とお父さんが言葉を交わす。男同士の友情ってヤツなのかな、

これは。

そして、しばらく黙って聞いていたお兄ちゃんが口を開いた。

「コレはついでだけど、父さん。玲斗もうちの学校の生徒」

「入学式に行つて以来、ずっと休学してますけど」

ソレを聞いたお父さんの目が輝きます。ヤバイ、これは語りが始まりそうだ。

結果としては、予想通りお父さんの語りが始まり、あまりにも長くなったのでお母さんが止めるといふ風になった。

そして、そろそろ病院が夕食の時間なので、お父さんたちは帰っていった。

「玲君。ゴメンね。お父さんたちが」

「琉嘉のせいじゃないだろ。ていうか、琉嘉のお父さん面白いな」

「そうかな？」

「うん。俺の親、近くに住んでなくて中々来れないから、琉嘉の両親見てると楽しい」

そう言う玲君の表情は寂しげだった。

そして、かける言葉が見つからないまま夕食の時間になり、玲君は自分の病室へ戻っていった。

お兄ちゃんと先生

翌日の朝。いつもの笑顔で遊びに来る玲君を見てホッとした。昨日の表情が嘘のように、晴れやかな感じだった。

「琉嘉。今日も姉ちゃん来るんだっけ？」

「うん。来るよ。今日は玲君を捕まえておいて、って言われた」

「捕まえて、って、俺はペットか。あの鬼姉め。………琉嘉。頼むから見逃して？」

「イヤ。今日はまた李旺に出来るから、舌戦が起きた時の避難口が欲しい」

「俺をそんなものにしないでくれる？」

「だって、怖いもん」

そして昼食を食べてしばらくすると、お兄ちゃんがやってきた。やってきて、お茶を目の前に置く。貰っていいのかな。

「やるよ。飲んでいいぞ」

「ありがとう。お兄ちゃん」

「玲斗もお茶でいいか？」

「え？あ、ありがとう李旺」

お茶を受け取った玲君の顔が少し赤い。照れてるのかな。

そして、先生が来るまでの間、私たちはお茶を飲みながら雑談に時間を費やした。

コンコンッ。

「こんにちは、片桐さん」

「こんにちは、先生」

「よう、モトヤン」

「おや。いたのですか？片桐兄。学校はどうしました？」

「創立記念日で休み」

「おやおや。今日は玲もいますね。片桐さん、ありがとうございます
す」

ソレを聞いた玲君が嫌そうな顔をする。でも、逃げないでね。頼むから。

ていうか、お兄ちゃんも先生もまた、呼び方戻ってるね。お母さんに報告すべきかなあ。

うーん、どうしよう。そう考えていると、お兄ちゃんに先に釘を刺された。

「琉嘉。お茶奢ったんだから今回は母さんに言うなよ」

「おやおや。賄賂を使うんですか、片桐兄」

「賄賂じゃない。そんな変な言葉を使うな」

「それは俗に賄賂と言っんです。きちんと勉強をしなすべきですよ、片桐兄。いくら偏差値の高い高校に入学しても、結果がコレでは救われませんね」

「俺は成績上位だ。そこまで言われる筋合いは無い」

ああ、これは賄賂云々を考えようが考えまいが、お母さんに通報決定ですね。お兄ちゃん、お母さんに存分に叱られてください。

お兄ちゃんにソレを告げると、お兄ちゃんが懇願姿勢に入る。土下座されてもこの決定は覆しませんって。

「琉嘉。お願いだから母さんに言うのは止めて」

「無理。もう絶対に言う」

「お願いだから止めて」

「無理」

「お願いします琉嘉様」

「無理。っていうか、琉嘉様って何さ」

「いい加減諦めたらどうだ？李旺」

兄妹で言いあいをしていると、横から口が挟まれる。それを言うのは玲君。さつきからずっと黙ってるからいるの忘れてた。

「お前は母さんの恐ろしさを知らないから言えるんだ！母さんが本気で怒ると背後に黒いオーラが漂う上に、よく分からない恐ろしい生物が見えるんだぞ！」

そんな玲君に、お兄ちゃんは掴みかかりながら言う。

てか、やつぱりお兄ちゃんにも見えるんだ。見えるのは私だけではなかった模様。

「そんなに怖いんですか？片桐さん」

「はい。ものすごく怖いです」

いきなり先生に問われたが、即答する。この状況で即答が出来るほどに、お母さんが怒ったときは怖い。

「分かってるならいいだろう、琉嘉。母さんには言わないでくれ！」

うーん。確かに、お母さんが怒ると半端無く怖い。でもさ……

「無理」

そう答えた時のお兄ちゃんの顔は見ものだった。それこそ、ムン

クの叫びに近い表情になっていたからだ。

そんなお兄ちゃんに、先生と玲君が手を合わせる。

「片桐兄。自業自得ですね。いい機会ですから反省なさい」

「ご愁傷様です」

ソレを聞いたお兄ちゃんはさらに頂垂れる。ていうか、捨てられた子犬に見えてきた。

……何故だろう。何だか罪悪感にかられるよ。お兄ちゃんが悪いはずなのに、私が悪者のように感じてきた。

ていうか、そんな目で見るの止めようよお兄ちゃん。ますます捨てられた子犬に見える。

「李……旺……にい？」

私が呼ぶと、すぐに顔を此方に向ける。

……あれ？どうしてだろうね。目が潤んでるよお兄ちゃん。

そんな目で見ても決定は覆さないよ。

だって、お兄ちゃんが悪いんだし。

私悪くないよね。

「片桐兄。そこまですなさい。片桐さんが困っているでしょう」

葛藤を繰り返していると、先生が助け舟を出してくれる。助かった。

お兄ちゃんは先生に言われると、残念そうな顔をして窓の外を眺めた。

「さて、片桐兄も黙りましたし、今週分の説明を始めましょうか」

「あ、はい」

「玲。逃げたら後から徹底的にパシりますよ。パシられたくないのなら逃げないように」

「それが病人に対する言葉か？」

「あなただからいいのですよ。玲」

「差別だ」

「小さい頃から見えますからね。つつい弄りたくなってしまっんです」

「鬼」

うわあ。今日も先生のサディストっぷりがよく分かる。いぢめっ子だいちめっ子。

ちなみに、逃げるのを防止された玲君は渋々、近くの椅子に腰掛けた。お兄ちゃんはベッドの開いている場所に腰掛けてくる。

……少しくらいは教えてくれるつもりなのかな。

そして、先生の説明が始まる。玲君はつまらなさそうな顔をし、お兄ちゃんは私が不思議そうにしていたら横からアドバイスをくれた。

ああ、先生に喧嘩売らなければいいお兄ちゃんなのね。

先生に喧嘩売るからお母さんに怒られる運命にある哀れな兄。でも、これで少しは学習してくれるかな。

そうして説明は終わり、私はノートを写しにかかる。その間、玲君は先生に捕まっていた。

「はーなーせーっ！姉ちゃん、どうして俺を捕まえる！？」

「それはもちろん面白いからです」

「面白いの一言で済ませるな！俺はオモチャじゃない！」

「オモチャですよ。間違えてはいけませんよ、玲」

お兄ちゃんはそんな二人を傍観している。

……暇なんだねお兄ちゃん。遊ぶ人《先生》がいないから暇なん

だね。

「琉嘉。此处間違ってる」

そうやって色々と考えながら書いていると、いきなりお兄ちゃんが口を挟んだ。言われた場所を見てみると、確かに間違えている。

「あ、ホントだ。ありがとう李旺にい」

「どーいたしまして。ほら、早く先に進みな。早くやらないと終わらないぞ」

「うん」

そうやってしている間も、先生は玲君で遊び続ける。……玲君ゴメンね。巻き込んで。

「おやおや。玲はもう17歳だというのに、まだ因数分解が完全に理解できていなかったのですか」

「理解してるわっ!」

「ところで、レポートは大丈夫ですか?玲」

「姉ちゃんに貸しを作られないくらいには問題ないな」

「それはそれは。……面白くないですね」

あの?なんだろう。気のせいかな?舌打ちする音が聞こえたような気が……。そう思いながら玲君たちを見ると、横からお兄ちゃんが口を開いた。

「気にするな、琉嘉。俺にも聞こえた。気のせいじゃない」

「あれ?何を考えてるのか分かったの?」

「伊達に何年も兄妹してないだろう。どうせ、モトヤンの舌打ちの音が聞こえたような……とかってんだろ?」

さすが兄妹。15年もお兄ちゃんしてないんだね、お兄ちゃん。考えてることが綺麗に筒抜けだ。

「おや。聞かれてしまいましたか。他言しないでくださいね、片桐さん。片桐兄」

「はい。分かりました」

「片桐さんはいい子ですねー。片桐兄と違って」

先生はそう言って私の頭を撫でる。

ついでに、その間に玲君はさり気無く逃げようとしている。

「玲。どこへ行くつもりです？」

バレた。

玲君は機械仕掛けの人形のように、ギギギギギと、言う音を立てそんな秀囲気で、此方を向く。

「どこへ行くのです？玲」

「あ、いや……。ちょっとトイレに行こうかな、と……」

「ああ、成程。では、ちゃんと此処に戻ってくるのですね。まあ、戻ってこないのなら後から何が起こるか保障はしませんが」

「……はい」

玲君は負けた。ていうか、戻ってこないのならどうするつもりだったのだろう。怖いな。

「さて、片桐兄。あなたも黙っていてくださいね。これは玲専用ですから」

「玲斗専用ならまあいいか。黙っといてやるよ」

「ちょっと待てえっ！何で俺専用ならいいんだ！？」

お兄ちゃんの言い分に、玲君は食って掛かる。まあ、確かにお兄ちゃんの回答は喧嘩売ってるようにしか聞こえないな。

「いや、だつて。これは親類専用だろう？他の人間に害が無いのならいいんじゃないのか？」

「……腑に落ちない。俺は納得しない！」

「納得しろ」

「無理だ」

「納得しろって言ってんだろ」

「無理だつて言ってんじゃねえか」

ああ。永遠に続きそうだな。まあ、いいか。私はのんびりとノートを写しにかかるでしょう。

この言い合いに口を挟むのも面倒だし。

のんびりとノートを写していると、横から先生が顔を出し、口を挟む。

「楽しそうですね」

「はい？」

「玲と片桐兄ですよ。玲のこんな楽しそうな姿、久しぶりに見ましたよ」

「楽しそう、ですか？」

「ええ。片桐さんといるときも楽しそうにしていました。片桐兄といるときも楽しそうですね」

そんなものなのか。ていうか、コレって喧嘩しているようにしか見えないんだけど。先生には仲良くしているように見えるのか。

「喧嘩するほど仲が良い、というでしょっ?」

ああ、成程。だから先生にはコレが仲良く見えるのか。実際は本気で喧嘩してるっぽいケド。

ま、いいや。続き続き。

「大体お前は細かいんだ!」

「悪かったなA型で」

「血液型に関しては言ってるねえ!そのくらい察知しろ、馬鹿玲斗」

「馬鹿はお前だろうが」

「俺は成績上位者だ!」

「そんなもん一切関係ねえ!」

イライラ。

「なら何が関係あるんだよ!?!」

「成績関係なくても馬鹿とは言えるだろうが、この馬鹿李旺」

「ふざけんなこのガキ!」

「同年だろうが」

イライライライラ。

「お前のほうが精神的にガキだろうが」

「そんなものどこで決めた!?!」

「考えてみれば分かるだろう」

「分かるわけねーだろう!」

「ああ、そうか。玲斗馬鹿だからね」

プツン。

「李旺にい、玲君。五月蠅い。喧嘩なら玲君の病室でやって。迷惑」
私がそう言った途端、二人の喧嘩が止まる。何か、二人とも恐れ
慄いてる感じがする。

ちなみに、コレは後からお兄ちゃんから聞いたことだが、この時、
私の後ろにはお母さんと同じ阿修羅が見えたらしい。
さすが親子、と思ったと言っていた。

「ご、ごめんなさい」

「ごめん、琉嘉」

ちなみに、先生はこの様子を、少し離れたところで微笑みながら
見ていた。微笑む要素はどこにあったのだろうか。

「李旺にい。これもお母さんに伝えるからね」

「ちよっ!?!それだけは勘弁」

「イヤ」

私が言つと、お兄ちゃんは泣きそうな顔になり、玲君は笑つ。
そんな玲君にも罰を与えなきゃね。そう思つて、私は口を開く。

「玲君。今度からも先生が来る時は一緒にいてね。いてくれるよね
?玲君優しいもんね。もちろん、いてくれるよね?」

そう言った後の玲君の表情が歪む。自業自得。ざまあみる。

そして、二人とも黙ったところで作業再開つと。

しばらくの間、二人は静かにしていた。うん、いいことだね。平
和平和。至極平和。

「さて、では先生はそろそろ失礼しますよ」

しばらく真剣にノートを写していると、先生がふと声を出す。

「え？もう帰るんですか？」

「ええ。今日はやらなければいけないこともありますから。また来週会いましょう」

そう言って先生は帰っていく。その様子を見ていた玲君は、あからさまにほっとした顔をしていた。

「玲君、嬉しそうだね」

「ああ。悪の帝王たる姉ちゃんがいなくなったら一気にホッと出来る」

「悪の帝王。言うなあ、玲斗」

「ぴったりだろう？」

「ああ。似合いですぎてるな」

「誰が悪の帝王ですか？玲。片桐兄」

玲君とお兄ちゃんが話していると、いきなり私以外の声が挟まる。それは、先生だった。

「誰が悪の帝王なんですか？玲斗、片桐兄。いってごらんなさい」

「ね……姉ちゃん？帰ったんじゃないの？」

「よおモトヤン。忘れ物か？」

「ええまあ。片桐兄、そのボールペンを取っていただけますか？」

先生はそう言って私の傍のボールペンを指差す。私はそのボールペンを取り、お兄ちゃんに渡した。

ちなみに、玲君は既に恐れ慄き、後退りをしている。

「ほい。これでいいのか？」

「ええ。ありがとうございます。片桐さん、片桐兄」

先生は私たちにお礼を言っつて、玲君のほうを見た。逃げようとしていた玲君が、先生の視線で射抜かれる。

「玲。どこへいくのですか？先程の質問に答えなければ後から何が起るか分かりませんよ」

「姉ちゃん怖いわっ！」

「はい、そうですね。怖いですよ。ですから早く吐きなさい」

それを聞く玲君がガタガタ震えだす。先生、脅しすぎでしょう。そんな玲君に、お兄ちゃんが助け舟を出した。

「モトヤン。脅しすぎだ。少しくらい手加減をしる」

「本谷先生と呼びなさい。で、それでも手加減しているんですが、何か？」

これでも手加減してるんですか、先生。これで手加減してるのなら、本気ならどうなるか分からなさ過ぎて怖い。

「……ごめんなさい」

玲君が正直に謝った。まあ、これで謝らなければ確かに後が怖い。……半端なく。

「まあ、謝ったから許してあげましょう。次はありませんよ？」

「はい。ごめん姉ちゃん」

先生はそう言っつて、今度こそ帰っつていく。…怖い時間だった。

「玲君大丈夫？」

先生が帰った後、玲君に問う。玲君の表情は若干青白い。

「玲君、顔色悪いよ。病室戻って横になってたほうがよくない？」

「確かに、顔色が悪いな。玲斗、病室で横になってる」

「命令するな、李旺。大丈夫だよ、これくらい」

「これで体調を崩したら琉嘉が気にするだろうが。休め」

お兄ちゃんが言うと、玲君が渋々といった風な顔をしながら、私のほうを向いた。

「じゃ、俺、病室戻るね。また明日遊びに来るよ」

「うん。気をつけてね」

そう言って、玲君は病室へ戻っていった。病室には私とお兄ちゃんが残される。

「さて、琉嘉。ノート写すの続けるか？それとも、何か話すか？」

「うーん。……何か話そう」

「おっけ。何について話す？」

お兄ちゃんはそう言って私の頭を撫でる。

「うーん、何について話そうかあ。何かいい案ある？」

「そういうのは全て琉嘉に任せる」

「投げやりー」

「ええそうですよ。俺はそういう人間だからねー」

「この悪魔め。さすがお母さんと血を分けただけある。そっくり。まあ、私も後ろに阿修羅が見えたらしいけど。」

「ああ、なら、俺の学校の話でもしようか？それとも中学の時の話にするか？」

「……………中学の時の。それなら話分かるもん」

「分かった。なら、俺の過去でも話してみるか？ま、過去といっても、3年のときだけど」

過去と現実

* * * *

新学期。俺は、ついに中学最高学年になった。

俺が3年生となると同時に、妹・琉嘉が中学校に入学してくる。入ってきたらちよこちよこ面倒を見てやらなくては。

そして、新学期最初の日、始業式を終えた後、俺たちは入学式の準備にかかった。体育館にシートを敷き、椅子を並べる。

そんな地味な作業を何度も繰り返し、漸く準備が終わる。

「準備にかかる時間、結構半端無かったよな、李旺」

「ああ。予想以上にかかったな。先輩も去年こんな思いしてたのかな？」

「そうじゃないか？」

そうやって、俺は親友、とあつみ あした遠江朝と話をする。

「そついえば、李旺の妹、今年入学だよな？」

「ああ、琉嘉か。今年入学だよ。何かあったら守ってやってね？」

「……お前シスコンか？」

「ああ。悪いか？」

* * * *

「お兄ちゃん、友達からシスコンって言われてたの？」

「ああ。まあ、その通りだから否定はしなかったが」

お兄ちゃんはそう言って笑う。ていうか、否定しようよ。お兄ち

やんシスコンじゃないでしょう？

そう問うとお兄ちゃんはあるさりとシスコンだよ、と答える。

「さて、話を続けてもいいか？」

「うん。よろしく」

* * * *

入学式の準備を終えて、俺たちは帰路に着く。帰り道は、朝と一緒に帰る。

「んじゃ、また明日な、朝」

「ん。また明日。李旺」

そして家に入ると、噂の妹の琉嘉が出迎えてきた。

「お帰り、李旺にい」

「ただいま、琉嘉。いよいよ明日から中学生だな」

「うん」

琉嘉はそう言うてにこやかに笑う。ああ、可愛い。

* * * *

「ちょっと！そんなストレートに可愛いとか言わないでくれる!？」

「いいじゃないか。可愛いんだから。ほら、続き言っよ」

* * * *

そして、翌日。俺たちは朝から入学式の準備の残りをするために

学校へ行つた。

「よーっす。おはよう、片桐」

「片桐君おはよー」

「李旺君おはよー」

俺はそんな挨拶に、一人一人丁寧に挨拶を返す。ああ、毎朝のこ
とだが面倒くさい。

「おーっす、おはよ、李旺」

後ろからいきなり朝が飛びついてくる。……………殺ス。

「朝。言い残すことは無いか？無いなら即、処刑執行だ」

「え！？ちよつと、李旺！？処刑ってひどくないか？」

「問答無用。で、言い残すことは？」

「処刑はやメテー」

「それが言い残す言葉か。よし、覚悟を決める」

朝は「ヤメテー」と叫ぶ続ける。五月蠅いな。

「分かった。殺さないから黙れ」

俺がそう言つて、漸く黙る。やっと静かになった。

そう言っていると、教室の扉が開く。担任が来たらしい。

* * * *

「李旺にい、中々怖いこと言ってるね」

「あれで怖いか？」

「十分怖いよ。悪魔に見えた」
「そーかそーか。ま、いいさ。続けるよ」

* * * *

そして、入学式の準備を完全に終えて家に帰ると、既に琉嘉と母さんの姿は無かった。もう行ったようだ。

「もう行ったのか。早いな」

それから俺はしばらく部屋のベッドに横になり、眠った。

……よく寝た。寝た後に下に下りると、既に琉嘉たちは帰って来ていた。随分長い時間眠っていたようだ。

「あ、李旺にい」

「おかえり、琉嘉。入学式はどうだった？由佳ちゃんと一緒のクラスになれたか？」

「うん。よっちゃんも私も2組」

そうかそうか。琉嘉は幸い、仲のいい友達と同じクラスになれたらしい。それに、2組か。

体育祭は同じ団か。守ってやれるな。

* * * *

「いや、守ってもらわなくても……」

「お前が参加して倒れたりしたらどうするんだ」

「まあ、参加出来なかったし、問題は無いか」

* * * *

そして、入学式を終えて、授業が始まった。あー、面倒くさい。先生の説明を聞いていて、眠たくなる。「くあ」と、欠伸が漏れる。

「先生、ちょっと」

授業の途中、1年の先生がウチの教室に来る。何事だ。

「片桐。ちょっと……」

そう言っつて、手招きされる。何があつた？まさか、琉嘉に何かあつたのか？

「片桐。早くグラウンドへ行け。妹さんが体育の時間に倒れた……」

俺は先生が言い終わる前に廊下を走る。嫌な予感が当たった。無事でいる、琉嘉。

急いで靴を履き替え、グラウンドを走る。琉嘉の居場所は人だかりが出来ているからわかり易い。

「どいてくれ！」とか、「琉嘉！」と叫びながら行くと、漸く琉嘉の姿が見えた。

「お……………にいちゃ……………」

「琉嘉！」

俺が声をかけると同時に、琉嘉の瞼は閉じられた。琉嘉。琉嘉。琉嘉。

ヤバイ。何も冷静に考えられない。頭に血が上る。

パシーン。

俺の頬がぶたれる。ぶったのは琉嘉の友達である由佳ちゃんだった。

「お兄さんが慌ててどうするんですか!?!」

その言葉で、やっと俺は冷静になれた。周りが見えてくる。周りを見てみると、先生たちが琉嘉に心臓マッサージをしている。頼むから、生きてくれ、琉嘉。

* * * *

「え? 私死にかけてた?」

「ああ。あの時は本気で慌てたよ。由佳ちゃんに感謝だな」

「あ... はははははは」

「さ、続き行くよ」

* * * *

病院に運ばれた琉嘉は、急いで処置室に運ばれる。俺は、扉の前で待たされた。

父さんや母さんが来るまで、ずっと一人で待った。どのくらい時間がたったのだろうか。

そんな長い時間ではないのかもしれない。でも、俺には限りなく長い時間を感じられた。

「李旺」

「父さん。母さん」

しばらく待っていると、やっと父さんと母さんが来る。それでホッとして、涙が流れてきた。

「李旺。何があったの？」

母さんはハンカチで俺の頬を流れる涙を拭きながら、問う。

「俺、授業中に琉嘉が倒れたって聞いたんだ。琉嘉は持久走のタイムを計つてるときに倒れたらしい。俺がグラウンドいったときはもうやばかった」

「そう…なの。李旺、ありがとう」

「何が!？」

「ずっと、琉嘉に着いていてくれたんでしょ？」

それでも、礼を言われることなのか。

そう考えていると、横からお茶が差し出される。なんだろうと思つてみると、差し出すのは父さんだった。

「泣いたから喉が渴いただろう？ 飲め」

「さんきゅ」

俺は正直に礼を言って受け取る。

それから、また長い時間が過ぎた。

ガラッ。

処置室の扉が開かれる。中から出てきたのは、先生。

「先生。琉嘉は？ 琉嘉は大丈夫ですか？」

「処置は終了しました。ただ、まだ危ない状態ではありますので、

意識が戻るまでは集中治療室で様子を見ることになります」

「琉嘉に会えますか？」

「ええ。ただ、長い時間は遠慮してくださいね」

そう言っつて、俺たちは琉嘉の元へ行く。集中治療室に眠る琉嘉は、色々なコードに繋がれていた。

心電図のコード。脳波を測るためのコード。点滴のチューブ。色々なものが琉嘉に繋がれていた。

心電図の定期的な機械音が病室に響く。それだけが、琉嘉が生きていると証明できる、唯一の証拠。

* * * * *

「うわー、死にかけてる」

「あの時は俺の心臓がどうかなるかと思ったよ」

「それはそれは。申し訳ない」

* * * * *

琉嘉が倒れて、1週間が経った。未だに琉嘉は目を覚まさない。

「李旺。琉嘉ちゃん、まだ目を覚まさないのか？」

学校からの帰り道、共に帰る朝が俺に問い掛ける。

俺は頷いて、それを返事に変えた。そんな俺を朝が心配そうな顔をしながら見つめる。

「な、李旺。元気出せよ。きっと琉嘉ちゃん、もうすぐ目を覚ますよ。だから、な？」

「……お前に慰められるなんて世も末だ。……でも、さんきゅ

な、朝」

俺が小さく礼を言うと、朝は二カツと笑った。

「どーいたしましてっ … あ、ほら。今日も琉嘉ちゃんの様子見に行くんだろ？早く行かなくていいのか？」

そう言われて、時計を見る。予想以上に時間が経っていた。

「やべ。教えてくれてさんきゅ。じゃ、俺先に帰るな」

「おう。また明日な」

「また明日。じゃーな」

俺は急いで家に帰り、荷物を置く。そして、病院への道を急いだ。

「李旺君。琉嘉ちゃんのお見舞い？」

病院に着くと、顔なじみとなった看護婦さんが話し掛けてきた。

「はい。琉嘉に会えますか？」

「ええ、どうぞ。手は消毒してから会いに行つてね」

「はい。ありがとうございます」

そして俺は手の消毒をして、琉嘉の眠る集中治療室へと向かう。
今日もまだ、眠ったままだ。

「琉嘉。今日で倒れてから1週間だ。まだ、目を覚まさないのか？
一体どれだけ眠り続ける気だ？」

返事が返って来ることはない。
当たり前だ。琉嘉はまだ眠っているのだから。
いつも、こうやって、返ってくる筈の無い返事を待つ。
俺は何がしたいんだろうな。現実逃避なのかな。
俺は、あと何回この自問自答を繰り返さないといけないのだろう。

* * * *

「現実逃避だね」

私が言うと、お兄ちゃんは苦笑しながら私の頭を撫でる。

「はっきり言ってくれな」

「まあ、事実だしね」

「あの時の俺にはそんな考える余裕は無かったんだ。仕方ないだろ？」

あー、うん。それもそうかも。

* * * *

「ん……………んう……………」

何か、聞こえた。

琉嘉。

目が覚めたのか？

そう思っつて、琉嘉を見る。琉嘉の瞳は、うつすらではあるが、開かれていた。

「琉嘉！俺が分かるか？」

「…………お兄…………ちゃん」

「琉嘉！誰か！琉嘉が目を覚ました！」

俺は急いで医者を呼ぶ。呼ぶとすぐに医者が来て、診察を始めた。その間に、俺は携帯OKの場所に移動し、電話をかけた。相手は、まずは母さんだ。

ぷるるっ　ぷるるっ

「はいもしもし」

「母さん？俺。李旺。琉嘉が目、覚ました。今先生が診察してる」

俺が少し興奮気味に話すと、電話口からは長い沈黙が返って来た。何を考えているのやら。

そして、その長い沈黙が漸く破られる。

「それ、嘘じゃないわよね？」

「俺がそんな嘘を吐くと思ってる？マジだよ。さっき目エ開けたもんよ」

「今からそっち行くわ。…………お父さんには知らせた？」

「まだ。まず母さんに知らせたから。母さん、父さんに知らせてくれる？」

「…………分かったわ。琉嘉をお願いね」

そう言っつて、電話は切られた。さて、琉嘉の元に戻るか。

琉嘉のところへ戻ると、琉嘉に繋がっていたコードが減っていた。残っているのは点滴のチューブだけだ。

「琉嘉」

声を掛けると、琉嘉は此方を向く。まだ眠たいのか、目がうつら

うつらとしている。

「琉嘉。俺が分かるな？」

「おにーちゃん」

「ああ。お兄ちゃんだ」

俺はそう言いながら琉嘉の頭を撫でてやる。……また寝そうだな。そうして琉嘉がまた寝入った頃、病室の扉がノックされる。父さんたちが来たのだろうか。そう思いながら扉を見てみると、そこにいたのは先生だった。

「あれ？まだご両親いらしてない？」

「もうすぐ来ると思いますよ」

「じゃあ、来たら私のところに来てもらえるよう言ってくれのかな？」

「いっすよ」

「ありがとう李旺君。じゃ、よろしく」

それから俺は、両親が来るまでずっと、琉嘉の寝顔を見て過ごした。時折無意味に琉嘉の頬を突きながら。

* * * *

「……………覚えてない」

私の記憶の始めは、お父さん、お母さん、それからお兄ちゃんが揃っていた。目を開けると、3人が覗き込んでいたんだ。

それをお兄ちゃんに言うと、

「まだ頭は覚醒してなかったんだろ？な。ポーツとしてたし」

という至極あっさりとした答えが返って来た。

……なんか面白くない。

「さて、続けるよ」

* * * * *

そして、両親が来るとまず、琉嘉が眠っていることを残念がった。それでも、一度目を覚ました分、安心していているようだった。

「あ、そだ。先生が自分のところに来てって言ってたよ」

俺はふと思い出して、先生の伝言を伝える。それを聞いた2人は、先生の元へ向かった。

俺は再び、琉嘉の寝顔を眺める。

「……寝顔は昔から変わらないな」

本当に、変わらない。初めて眺めたあの頃と比べても、全く。そうして暫く眺めていると、母さんたちが戻ってくる。

「先生、何だつて？」

「ん？ああ。琉嘉、今日まで集中治療室だけど、明日まで何も起きないなら普通の病室に移動出来るって」

「てことは、大丈夫なんだな？」

「大丈夫じゃないなら普通の病室に移動なんて出来やしないさ」

俺が問うと母さんが答える。その答えにまた質問をすれば、今度は父さんが答えてくれた。

「……………んあ……………んん」
『琉嘉！？』

俺たち3人の声が揃う。

「琉嘉！大丈夫か？俺が分かるか？」

「お……………とー、さん？」

父さんに次いで、母さんが声を掛ける。

「琉嘉！お母さんよ。分かる？」

「ん……………」

琉嘉はうつすらと目を開き、答える。……………まだ眠そつだ。

「此処……………、何処？」

「此処は病院だ。何があつたか、覚えてるか？」

父さんが琉嘉の質問に答え、逆に質問をすると、琉嘉は考える表情をした。

「……………えーつと……………。……………何があつたんだっけ？」

やはり覚えていないか。そんな琉嘉に、俺は説明をしてやる。

「お前は学校で倒れたんだ。体育の時間に倒れたんだよ」

「……………。あ……………」

「思い出したか？」

「うん」

そう言っつて、琉嘉は俺から目を逸らす。完全に思い出したか。

「……お兄ちゃん、グラウンドにいたよね？」

「ああ。先生に聞いて、走って行った」

「そか。夢じゃなかったんだ。……よかった」

そう言っつて、琉嘉は笑う。

嬉しそうに、笑う。

* * * * *

「あー、そこらは何とか覚えてるよ。ちよつと記憶が曖昧だけど」

「まだボーツとしてたからなあ。仕方ないか」

お兄ちゃんが説明してくれたあたり、記憶に無いんだけど。何か話した記憶はあるけど、内容は覚えていない。

まだ寝ぼけていたのだろうか。

覚えていないことを話されると着いていけない。……面白くない。

「こらこら。そんな、面白くなさそうな顔をするな」

そんな私に気が付いたお兄ちゃんが、言う。

面白くないんだから仕方ないじゃん。

そう思っていると、お兄ちゃんは淡く微笑みながら、私の頭を撫でる。くそう、気持ち良いぜ。

そうやって暫く撫でられていると、病室の扉がノックされる。

「琉嘉、李旺」

「お母さん」

扉を見てみると、いたのはお母さん。もう仕事は終わったのか。

「や。母さん。もう仕事終わったのか？」

「ええ。時計を見てみなさい。もう、いい時間よ」

お母さんに言われて、お兄ちゃんは時計を見る。ついでに私も見る。思いの外、時間が経っていたようだ。

「もうこんな時間かあ。話してると、時間って早く流れるものだね」

「ああ。こんなに時間が経ってるとは思わなかった」

私はお兄ちゃんと顔を見合わせながら言う。そんな私たちに、お母さんにはにっこりと微笑みながら、問うて来た。

「時間を忘れる程に、何を話してたの？琉嘉、李旺」

「琉嘉が倒れた時のことを、俺の感情を織り交せて話してた」

「ああ。あの時は大変だったわねえ」

あの、何だか、長話が始まりそうな雰囲気なんです。とりあえず、止めてほしい。

「連絡を受けた時は心臓が止まるかと思ったわ。病院に着いたら李旺は泣いちゃうし」

「仕方ないだろ。ずっと一人で不安だったんだ」

「それもそうね。それに、処置が終わった後も中々目を覚まさなかったから、あの一週間は辛かったわ」

「俺もだ。琉嘉が目を覚ますまで授業が全然頭に入らなかった」

ああ、止む気配はありませんね。

お母さんとお兄ちゃんは、ずっと話し続ける。お願いもうヤメテ。そんな私の救世主となったのは、堤さんだった。夕飯を持ってやってくる。

「琉嘉ちゃん。夕食の時間だよ。ちゃんと残さず食べようね」
「はいっ」

ずっと話しを続けていた二人は、夕飯を見て、やっと話しを止める。…助かった。

「あら。もうこんな時間だったの。李旺、帰りましょうか」
「ん……………あぁ」

「琉嘉。明日は仕事お昼までだから、終わったら来るわね」
「うん。待ってるよ」

そういえば、明日は土曜日。いつもなら休みのハズだけど、仕事が入ったようだ。

でも、お昼までならたくさん話せるからいいや。…………お兄ちゃんの悪事も知らせなきゃだし。

「じゃな、琉嘉。また明日来る」
「うん。待ってるよ、李旺にい」

そうして二人は帰って行く。そんな二人を見送った私はのんびりと夕飯に手を付けた。

翌日。土曜日、昼。

コンコンッ

「琉嘉、入るぞ」

そう言っつて、病室に入って来たのは、お兄ちゃんとお母さん。そして、お父さん。

……気のせいだろうか。全員、表情が暗い気がする。

「琉嘉」

お父さんが、静かに私の名前を呼ぶ。何があつたのだろうか。

「お前に、言っつておかなくてはならないことがある」

お父さんがそう言つた途端、お母さんが目を逸らす。だから、何事なんだ。

「お前の命は、永くない」

……嘘だ。そんなの、嘘だ。

信じない。信じたくない。信じることが出来ない。

そんな状態の私に、お父さんは続けて言う。

「この間検査を受けたらどうか？それで分かつたんだ」

いきなり検査を受けさせられたのはこの為だったのか。

私の余命を調べるため。

ああ、馬鹿馬鹿しい。死ぬのなら、どうして今まで大人しく入院していただんだ。

死ぬのなら、遊べばよかった。学校へ行きたかった。

どうして。何故。善くなると聞いたから大人しく入院した。

善くなると言われたから、薬も頑張ってたくさん飲んだ。
何故。どうして。

体が、揺れる。ぐらぐらと。揺らすのは、お兄ちゃん。

「落ち着け、琉嘉。まだ方法はある。手術を受ければ、善くなる可能性だってあるんだ」

手術。嫌だ。怖い。

成功率はどのくらいか分からないが、手術中に死にそうで、嫌だよ。

「手術、嫌だ。……怖いよ」

「受けないと、間違いなく死ぬんだぞ！？成功率は低いけど助かる可能性だってあるんだ」

「嫌だ。どっちも、怖いよ」

お父さんとお母さんが、悲しそうな目で私を見る。

怖い。何も考えられないくらい、怖いよ。

「怖い……。怖いよ……」

「琉嘉。お父さんたち、今日は帰るよ。明日また来るから、ゆっくり考えるといい」

そう言っつて、お父さんたちは帰っていく。

私は、何も考えられない。

どうすればいい？

手術を受ければいいのか？死ぬかもしれないのに。
分からない。ワカラナイ。

怖い。コワイ。怖い。

私は、死ぬんだ。

翌日。日曜日、昼。

「琉嘉。入るぞ」

お父さんたちは、私の病室に入って来る。でも、私はいない。
全てが嫌になって、逃げたからだ。

どうやって病院を抜け出したのかは覚えていない。気が付いたら
病院の外にいた。

私は、逃げる。病院から。家族から。
そして、現実から。

家出

病院を抜け出して、一週間が経った。私は未だに帰っていない。幸いにも、発作を起こすこともなく、家出生活を送れているが、やはり、空気が違うと辛い。

空気の違うドイツは、体力が削られる。言語の壁は無いに等しい程にドイツ語を話せるが、環境の違いはかなり辛い。

そう。私は今、ドイツにいる。一度家により、パスポートを取り、空きのあるドイツ行き飛行機に乗り込んだのだ。

熱を出した気がする。ダルい。

このまま路上の何処かで眠れば、死ぬるのかな。それもいいな。勝手に病院を抜け出して外国に来た報いだ。一人寂しく、死のう。

「お嬢ちゃん、どうしたんだ？具合でも悪いのか？親は何処にいる？」

体力の限界が来て路上に座り込むと、一人の男性が話し掛けてくる。

五月蠅い。放っておいてくれ。そんな目で見てみると、質問をしなくなる。

空気読めよ。

「どうした？返事が出来ないくらい具合が悪いのか？」

「……………五月蠅い。大丈夫だから放っておいて」

ああ、ダルい。もう色々考えるの面倒だから早く消えてくれ。

それでも、しつこい男性はしつこく話し掛けてくる。ウザいよ。

「具合が悪いなら暫くうちで休むといい。そうしろ。な？」

「……んなっ！」

男性は言い終わると同時に、私を持ち上げた。……しかもお姫様抱っこで。

「ちよっ！降ろして！大丈夫だから」

「大丈夫そうに見えない。それに、君は無理やり運ばないと大人しく来そうにないからね」

そう言いながら、私の額に手を当てる。

「やっぱり、熱がある。家はどこ？電話番号は？」

「日本」

「ツーリストか。親は？ホテルは何処？」

「日本。ホテルは取ってない」

私が言うと、男性は目を真ん丸にする。驚愕の目付きだ。

「まさか、一人でドイツに来たのか！？お前何歳だ？まだ小さいだろう」

「14。そんなに小さくない」

「14は立派に子供だ。うちで暫く休んで、親に連絡しろ。迎えにきてもらえ」

親に連絡？出来るわけじゃないじゃないか。

私は、逃げて来たんだ。

「どうした？俺が連絡したほうがいいか？」

「連絡しなくていい。大丈夫だから」

「子供が何を言ってる。子供は親に遠慮せずに甘えるもんだ」

「今まで、甘えすぎるくらい甘えて来た。これは、その報いだ」
最後のほうは、小さな声で言った。聞かせる必要は無いから。
それから暫く、男性は何も言わず、ただただ、歩いた。

「着いたぞ。ここが家だ。中々深い事情があるようだが、今は、休
め。眠ってる」

案内された先は、個人病院。中に入ると、まずベッドへと案内さ
れ、寝るよう促される。

「今は眠るんだ。目が覚めたら、話せる範囲で事情を聞かせてくれ」

ああ、もう疲れたよ。何だかとても眠いんだ。瞼が、重い。

……………堕ちた。

「あら？院長。この子なーに？」

声が、聞こえる。誰だろう。

「ああ。さっき拾ったんだ。具合悪そうにしてたから休ませてるん
だよ」

「親御さんに連絡は？」

「何か事情があるみたいで、連絡したがないんだ」

そつだ。ここはドイツだ。

私は、ドイツに逃げて来たんだ。

「素性を調べようと思わなかったの？」

「ああ。本人の口から聞きたいからな」

この男性は、いい人のようだ。……話しても、大丈夫かな。そう思っていると、誰かの手が額に触れる。反射的に、目を開いた。

「あら？起こしちゃったかしら。お嬢ちゃん、具合はどう？」

「…え？あ、大丈夫です」

「はい、嘔吐かない。まだ熱高いよ？」

あー、バレバレだね。確かにまだダルいです。

「やあ。大丈夫ではなさそうだけど、話しは出来るかな？」

「何を聞いても親に知らせない、というのなら話します」

それを聞いた二人は、渋い顔をする。だが、すぐに元に戻り、言った。

「…分かった。さて、なら自己紹介をしようかな。俺の名前はリヒヤルト。ここの病院の院長だよ」

「私はセシル。住み込みの看護婦。あなたは？」

「ルカ。で、どこから話せばいいのかな？」

私たちは自己紹介を済ませ、向き合う。セシルの目が、キラキラ光って綺麗だ。

「まず、どうして一人でドイツに来たの？ていうか、どうしてそんな、ジーツと私を見つめてるのかしら？」

「目が綺麗だから」

私が言うと、セシルさんにはっこり微笑む。

「ありがとう。で、どうして一人でドイツに来たの？」

「……………家出してきた」

それを聞いた二人は揃って目を真ん丸にする。予想通りの反応だ。

「……………家出って、日本の家からかい？」

「日本からあ!？」

「うん」

それを聞いた二人の反応はさらに激化する。あー、五月蠅いな。

「どうして、家出なんかしたんだ？」

「分かんない」

本当に、分からないんだ。気がついたら病院から抜け出してたから。

あの時は、何も考えず、ただただ、お母さんたちから逃げたかった。

「どうして逃げたかったんだい？」

リヒャルトさんにさっきの説明をすると、質問をされる。

「あのままいれば、私はプレッシャーに押し潰されそうだったから。私は弱いから、逃げたんだよ」

「プレッシャー？」

「お母さんたちのために、手術を受けるべきか、っていうのと、怖いから受けたくない。その重圧に挟まれ続けるのは、嫌だったんだ」

それを聞いた二人は、焦り出す。手術という言葉に反応したか。

「何の病気だい？」

「病名は知らない。教えて貰えなかった」

「じゃあ、何処が悪いのかは分かる？」

リヒャルトさんの質問に、私は静かに頷く。そして、言う。

「心臓」

「……………どのくらい悪いのかは分かるかな？」

「相当。もう長くないって言われた。助かる方法は手術だけだ、つて」

それを聞いたリヒャルトさん哀れむ目で、私を見る。止めてくれ。そんな目で見られたくて話したんじゃない。

「ルカ。知り合いに心臓手術の権威がいる。紹介するから、手術をしてみらえ」

ああ。あんたも一緒か。純粹に味方をしてくれる人なんていやしないんだ。

ここからも、逃げるか。

次は、何処へ行くこうか。

「逃げようなんて考えるなよ、ルカ。俺は医者として、病人をほったらかしになんて出来ない」

きれいごとだ。そんなの、こっそり逃げればいい。

「逃げたら、警察に通報して、日本の警察に連絡取ってもらおうぞ。日本で捜索願が出されてるなら、あちらさんはこれ幸いとドイツに来るだろうな」

……卑怯な。それでも医者か。

そう思っていると、今まで黙っていたセシルさんが口を開いた。

「ルカ。先生は純粋にあなたを心配しているの。分かってあげて」

心配？分かるわけないじゃないか。

人の心が分かれば苦労はしない。それに、他人に心配されて、何になる。

それなのに、どうして涙が出る。何故。どうして。

止まらない。涙が。何故だろう。

「ああ、泣かせるつもりは無かったのよ。ごめんなさいね、ルカ」

そんなセシルさんの言葉が、さらに涙を誘う。嗚咽が零れる。もう、止められない。

「無理に泣き止もうとしなくていいのよ、ルカ。泣きたいのなら泣いてしまいなさい」

ああ、もうダメだ。今まで堪えていた泣き声が、堰を切ったように溢れ出す。

「よしよし。辛かったのね。もう、大丈夫よ」

セシルさんは、私を優しく包み込む。その温もりが、私に安心をくれる。

彼女たちなら大丈夫だ。全てを話しても、それから暫く、私は泣き続けた。セシルさんの優しい腕に包まれ、盛大に。

「落ち着いたかい？」

リヒャルトさんの言葉に静かに頷く。

「なら、もう一度言わせてくれるかい？……手術を受けよう、ルカ」

コワイ。嫌だよ。手術は怖い。

「ルカ、手術のどいうところが怖い？言ってごらん」

「手術自体怖いけど、手術中に死ぬかもしれないっていうのが一番怖い。だから、嫌だよ」

そんな私の手を、リヒャルトさんはぎゅっと握る。温かい。

「大丈夫だ、ルカ。この国の医療技術は日本よりも進んでいる。日本で受けるよりは、ドイツのほうが成功率はかなり高いぞ」

でも、無理だよ。そう言われても恐怖は拭えない。

「それに、俺も付いている。手術中、ずっとお前の手を握っておいてやる」

「……ホントに？」

「ああ。だから、手術を受けよう、ルカ」

「私も付いてるよ、ルカ。だから、ね？」

二人とも、優し過ぎる。また、涙が流れる。

「ルカ。受けるかい？」

「……………うん」

二人を信用しよう。きっと、大丈夫だ。

「あー、でも手術を受けるなら、親に連絡をしなければ……」
「……………」

逃げようかな。うん、逃げようか。

今更お母さんたちに会わせる顔なんて無いから。

「逃げるなよ、ルカ。大丈夫。怒られないよう、言ってるから」

先に釘を刺された。

てか、怒られるのは怖くない。って言ったら嘘だけど、それより、
会わせる顔がないのが一番を占める。

「あー。うー」

「何唸ってるんだ？ルカ」

「お母さんたちにどう言えばいいか分かんないー。ってか、会わせる顔がない……」

私が言つと、リヒャルトさんとセシルさんが揃ってどうしてか聞いてくる。

「だって、余命宣告された後すぐに逃げたから……」

「なら、無理に会えとは言わない。でも、連絡は入れる。今すぐ、
目の前で」

……… 悪魔が目の前にいる。
リヒャルトさんはそう言いながら電話を私の前に置く。…逃げ道
が無くなった。

私は仕方なく、番号を押す。………何て言えばいいかな。

プルルルル プルルルル ガチャ

『はい、もしもし』

「……………」

お兄ちゃんだ。ヤバイ。何言えばいいのかわかんない。

『もしもし?』

「…………… 李旺にい」

『琉嘉!? 琉嘉なんだな!? 無事か!? 今何処にいる?』

「李旺にい。大丈夫。私は元気にしてる。だから、心配しないで」

私がお兄ちゃんの名を呼ぶと、お兄ちゃんは過激に反応する。少しは落ち着け。

『今、何処にいるんだ? 琉嘉。父さんも母さんも、ジジイたちもみんな琉嘉を心配してんだぞ』

「大丈夫だから。心配しないで」

「ルカ。ご家族にはちゃんとドイツにいることは話したのか?」

突如、リヒャルトさんが口を挟む。

ああ、そうか。日本語で話してたから分からなかったのか。

「元気にしてるから心配するな、って言ったよ」

『琉嘉、お前今ドイツか!? さっきのドイツ語だろ?』

あ、バレた。

リヒャルトさんへの説明が聞こえたらしい。それでバレたようだ。

……ドイツ語分かんなくせに、よく分かったものだ。

とりあえず、お母さんに代わって貰おう。

「李旺にい、お母さんいる？いるなら代わって」

『母さんにちゃんと説明するんだな？それなら代わる』

「うん」

私が言つと同時に、お兄ちゃんがお母さんと呼ぶ。勝負の時間だ。

『琉嘉？』

「お………母さん」

うあー、怖い。何言われるか分からないあたりが怖い。

逃げたい。すっげえ逃げたい。だが、後ろでリヒャルトさんとセ

シルさんから押さえられているので逃げる事が出来ない。

仕方ない。正面から立ち向かおう。

「久しぶり、お母さん」

『……そうね。琉嘉が元気そうでお母さん嬉しいわ』

「あー、うん。元気だよ。今ちょっと熱出してるけど、それ以外は

元気だから」

『そう。で、率直に聞くけど、琉嘉。あなた今何処にいるの？』

うわあ。すごく率直だね、お母さん。清々しいよ。

『琉嘉』

お母さんの我慢の限界がもう来た模様。静かに私の名を呼ぶ。そろそろ答えなきや怖いかな。

「……………ドイツにいます」

『ドイツ!? どうしてそんなところに……………。ドイツの何処?』

「ベルリン」

『ホテルの名前は?』

「あ。ホテルには泊まってない」

そう言つと、お母さんが物凄い勢いで喋つて来た。

『ホテルに泊まってない、つて、あなたまさか野宿!? 大丈夫なの!? 今すぐホテル行きなさい!』

ああ、答えるの面倒臭い。でも、答えなきやか。

「昨日までは野宿してた。だから熱出しちゃった。で、今はベルリンの個人病院経営してる人の家にお世話になつてる」

電話口で溜め息が聞こえる。野宿のことは言わない方がよかつたかな。

『お世話になつてる、つて、病院で? それともお宅の方?』

「家の方」

『……………家主さんはいる? いるなら代わって頂戴』

「うん。ちょっと待って」

私は電話の下を押さえ、リヒャルトさんの方を向いて言った。

「リヒャルトさん。お母さんが話しがいたらしいから、代わって

くれる?」

「ああ。ルカのお母さんはドイツ語話せるんだよね?」

「……………どうだろう。まあ、大丈夫だろう。そう思いながら、私は電話をリヒャルトさんに手渡した。」

「もしもし。お電話代わりました。リヒャルトといます」

リヒャルトさんはそう言って会話を始める。……………お母さんはリヒャルトさんに何を言うつもりなんだろう。

てか、居場所バレた以上、来るんだろうね。お母さんたちが。

それが怖い。恐ろしい。阿修羅が降臨するんだろうな、きつと。黒いオーラの下で阿修羅が微笑むのか。

そしてお兄ちゃんはお母さんと同じ黒いオーラの下でサタンを降臨させるんだ。

……………やっぱり逃げようかな。何処かで一人寂しく死のうか。

それとも、自らこの命を絶とうか。それが一番楽だよな。

……………もう、疲れたよ。全てが。

「ルカ。変なコト考えてなあい?」

ギクリ。ずっと黙っていたセシルさんが口を開く。…セシルさんの目が怖い。

「なあんか怪しいんだよねえ。ねえ、ルカ。正直に言ってもらん?」

いや、だから目が怖いって。射抜かれそうな鋭さで、セシルさんは私を見る。

正直に言ったら殺されそうだ。それほどまでに怖い。

「へ……変なコトつてどーゆーコトかなっ?」

「また逃げようと考えると考えると、自殺しようと考えてるとかかな」

「……バれてーら。何で分かるんだろう。そういう雰囲気出しちゃったのかな。」

「凶星ね?」

私は頷く。すると、セシルさんは大きな溜め息をついた。

「気のせいかな。あたりの空気の温度が下がったような気がするよ。気のせいだよ。ていうか、気のせいであってほしい。」

でも、それは気のせいではない。

セシルさんが見せ掛けの笑顔を貼付けて私を見る。……目が笑っていない。

怖い怖い怖い怖い怖い。

「ルカ。今逃げたらどうなると思う?」

「え?……えっと……」

どうなるんだろう。

お母さんたちの私捜しが振り出しに戻る、ってことくらいしか考えつかない。

だから、聞いてみた。

「どうなるの?」

「まず、ルカ失踪の知らせがドイツの日本領事館に入る。それが日本に伝わる。そうになったらもう大変」

セシルさんは私の目をジッと見て、続ける。

「ドイツを現地の警察と日本の警察が搜索するでしょうね。…そこまで大事にしたい?」

嫌だ。そこまでされたら、見つかった時が怖い。……………特にお母さんが。

「嫌でしょ?なら、家で大人しくしてなさい」
「……………らじゃ」

これは降参する以外手は無いでしょう。
そんな私の返事を聞いたセシルさんは満足そうに微笑む。

「はい。少々お待ちください」

私たちがそうやって話していると、リヒャルトさんが手招きをして私を呼ぶ。何だろ。

「ルカ。親御さんが話したいそうだ」
「え」

な……………何かなあ。怖いなあ。

「か……………代わりました琉嘉デス」
『琉嘉。俺だ。分かるな?』
「お父さん」

電話で話すのはお父さん。久しぶりだ。
お母さんじゃなくて少し安心した。

『久しぶりだな、琉嘉。元気にしているか?』

「うん。ちょっと熱出しちゃったけど、それ以外は大丈夫だよ」
『発作は起こしてないか?』

「うん」
『よかった……』

お父さんが安堵の息を吐くのが聞こえる。心配かけてゴメン。

『琉嘉。俺たちは近いうちにそっちに行く。頼むからいなくなってくれるなよ? あんな心配するのはもうこりこりだ』

「うん。ゴメンね、お父さん」

『ああ。……おっと、李旺が話したいそうだから代わるよ』

お父さんが言うと同時に、電話の相手がお兄ちゃんに代わる。

『もしもし。琉嘉。俺だ』

「李旺にい。なあに?」

『母さんから話しは聞いた。……ほんっとーに、大丈夫なんだな?』

「李旺には本当に心配性だね。大丈夫だよお」

本当にお兄ちゃん心配性だ。小さい頃から変わらない。というか、悪化していたのが更に悪化したような気がする。

………過保護。

『近いうちに俺もドイツに行く』

来なくていいのに。来たら来たでまた過保護開始じゃないか。激ウザ。

『…その沈黙は何なのか聞いていいか?』

「ダメ」

『聞かせる』

「いやーだっ！」

『言え』

「ヤダってば！」

『まあいい。ドイツに行ったときに直接聞かせてもらおう』

「絶対に話さないもん」

話したら悲しむでしょう、お兄ちゃんは。だから話さない。

『無理やり聞き出す。勝手にドイツに行ってみんなに心配かけた罰だ。覚悟しとけ』

「李旺にいのバカ……っ。言いたくないって言ってるのにつ……。ひどいよ李旺にい」

『え！？あ、ゴメン。無理やりは聞かないからっ。な？だから泣くなよ』

試しに涙声で言ってみた。そうすると、お兄ちゃんは焦り出す。効果アリですね。今度からお兄ちゃんにはこの手を使おう。
琉嘉の小悪魔度が1上がった。なんつって。

『と、とにかく近いうちにドイツ行くからな』

うわー、捨て台詞。カツコ悪いよ、お兄ちゃん。ま、いつか。

「待ってるけど、それまでにドイツ語で日常会話くらい出来るようになってねー。私、ドイツで日本語使う気は無いよん」
『……分かってる』

さあ、どのくらい上達してくるかな。楽しみだ。

「じゃ、切るよ」

『ああ』

そうして、私は通話を終える。結構話したなあ。

琉衣

「ルカ。親御さん、近いうちにドイツに来るそうだ。……………逃げるなよ?」

「分かってます。逃げたらどうなるか、セシルさんに存分に脅されたから逃げませんで。」

二人にそれを伝えると、リヒャルトさんは声を出して笑い、セシルさんはまたも満足そうに微笑んだ。なんかムカつく。

「ていうか、リヒャルトさんはお母さんとそのことを話してたのかな。」

「あー、お母さんたちいつ来るんだろ。覚悟決めとかなきゃなあ。」

リヒャルトさん、ちゃんと怒られなくて済むよう言ってくれるのかな。言ってくれなきゃ、私死ぬよ。それほどに、本気で怒ったお母さんは怖いんだ。」

「ヤバイ。考えただけで身体に震えが…………。」

「寒いのか?ルカ。早くベッドに戻って横になれ」

「いや、これは寒いからじゃなくて…………」

「いいから寝なさい。まだ熱は下がってないだろう?」

「言い切れなかった。言い切る前にリヒャルトさんは口を挟む。」

「確かにまだ熱下がってないけど、途中で遮るように言わなくてもいいと思う。これだから大人は…………。」

「ああ、やっぱりまだ高い。無理をするな。まだ辛いだろう?」

「リヒャルトさんは私の額に手を当てながら言う。」

「今はとにかく休め。返事は？」
「はい」

優しく微笑みながら言うリヒャルトさん。そんなリヒャルトさんに、私はベッドに横になりながら返事を返した。それを見たりヒャルトさんは満足そうに微笑んで、私の頭を撫でる。

そして私はそのまま眠りに堕ちる。久しぶりに、夢を見た。

* * * *

「久しぶりだね、琉嘉」
「琉衣」

眠りに堕ち、着いた先は見慣れた世界。そう。琉衣の築き上げた世界だ。

つまり、私はリヒャルトさんに頭を撫でられた後、眠ってしまったということか。

「今日は無理やりこの世界に連れて来ちゃってゴメンね？ちょっと聞きたいことがあったからさあ」

そう言って琉衣は笑う。ケラケラと声を上げて。

ていうか、無理やり？そんなことも出来るのか。そう關心していると、琉衣が不意に笑うのを止めて此方を向く。

……………あれ？目が怖いよ？

「ねえ、琉嘉。どうしてこんな無茶したのかなあ？」

……………琉衣も私の行動にご立腹の模様。後ろに黒いオーラが佇

んでいる。

「君の思考を読もうとしたけど、僕には無理だった。だから直接聞くよ。どうして？何であんな無茶をした？そんなに死期を早めたいの？」

死期を早めたい、か。そうなのかな。実はそうなのかもしれない。無意識に、それを望んでいたんだろう。

琉衣にそれを伝えると、琉衣の表情が悲しみのそれに変わる。何なのさ。

「どうして、君まで天折しなきゃならないっ！？君には生きて欲しいのに……っ。僕の方まで幸せになって欲しいのに……」

「琉衣？」

「ねえ、琉嘉。君は、僕の正体を知ってる？」

琉衣はそう言って、歪んだ笑みを見せる。そして、続けた。

「僕はね、君の双子の姉なんだよ。……生まれて少しして死んでしまったけれど」

双子？知らない。そんなの、聞いたことがない。

「初めて聞いた、って顔だね。それも仕方ないか。僕は、生まれて2日しか生きれなかったから……」

知らない。お兄ちゃんを知ってたのかな。知らなかったのは、私だけか？

なんだそれ。面白くない。

「ああ。多分、お兄ちゃんも私のこと知らないと思うよ。私たちが生まれたとき、お兄ちゃん、まだ2歳だしね」

お兄ちゃんも知らなかったのか。……なら良し。

「私は死んで、妹・琉嘉の中に入った。だから、その時名前を捨てた」

「捨てた。……名前を？」

「そ。お母さんたちはね、お腹の中にいる子供が女の子の双子だと分かったとき、名前を二人分考えていてくれた。だから、生まれて少ししか生きれなかった私にも名前があったのさ」

「琉衣の……本当の名前は？」

「琉衣。だから、琉嘉が琉衣っていう名前をくれた時は本当にビックリしたよ。お母さんから私のことを聞いてたのかと思った」

ああ、そうか。あの時琉衣の表情に見えた驚りは、このせいだったのか。

私が何も考えず、こんな名前を琉衣に与えたから。

私が琉衣にあんな表情をさせた。

「あ！琉嘉。私にこの名前を付けたこと、後悔しないでよ。私はね、夢の世界ではあるけど、琉衣として、姉として琉嘉に会えたことは、私にとって、とても幸福だったんだから」

琉衣は優しい。

私を恨んでいいのに、守ろうとしてくれる。……私は何も返せないのに。

逆に傷つけたのに、琉衣は変わらず私を守ろうとする。

何故。どうして。罵倒された方がまだ気が晴れる。それなのに、何故。何故。

温かい水が頬を濡らす。

いつから涙を流しているんだろう。何故、私は泣いているんだろう。

分からない。ワカラナイ。

「琉嘉。どうして泣いてるの？」

「分かんない」

「そか」

涙を流す私を見て、琉衣が問う。

私は分からないとしか答えられない。

琉衣は深く追求してこない。そんなところも、優しい。

「おっと。そろそろ起きようか、琉嘉。もう随分と時間が経ったはずだよ」

「え？……あ、そうか。ここって、時間の流れ違うんだっけ」

「そう。だからそろそろ戻らなきゃね」

琉衣はそう言った後、微笑んで言った。

「ねえ、琉嘉。さっき言ったこと、気にしないでよ。私は、琉嘉が元気に幸せに暮らしてくれれば嬉しいから。琉嘉は全く悪くないんだからね」

ああ、やっぱり琉衣は優しい。優しすぎる。私は何も返せないのに、一方的に優しくしてくれる。

ねえ、どうして琉衣はそんなに優しいの。自分は生きられなかったのに、双子の片割れはのうのうと生き延びてる。ねえ、それを守るなんて、どうして出来るの。私なら無理だ。きっと、片割れを恨む。

なのに、どうして琉衣はそんなに優しいの。
視界が滲む。涙が止まらないよ。

「さ、早くお帰り？」

そう言っつて琉衣は私を扉の元へ誘う。

「琉嘉。今日僕が言ったことは忘れなさい。君のためにならないから。ね？ただ、君には姉がいたっていうことだけ覚えていて」

「忘れない。琉衣が言ったことも、私には琉衣っつと言う名前のお姉ちゃんがいたことも、ね」

「……………ありがとう、琉嘉」

「お礼を言うのは私のほうだよ。返せないのに、守ってくれてありがとう」

それを聞いた琉衣が悲しそうに微笑む。……………変なこと言ったかな。

「ねえ、琉嘉。僕がお礼を狙って守つてるとおもっ？そんなの関係ないよ。僕は、琉嘉が大事だから守る。お礼なんていらぬ。おっけい？」

「……………そなの？」

「琉嘉、人間不信過ぎ。少しは姉を信じなさい」

ああ、そうか。信じていいんだ。お姉ちゃんを。

「うん。ゴメン琉衣」

「分かったならいいよ。だから、泣き止んで？可愛い妹の泣いている姿を見るのはちょっと辛いから。しかも、原因が自分だとさらにね」

そんなものなのか。なら、頑張らなきゃ。琉衣のために、頑張つて泣き止まなきゃ。

その努力の結果、数分後には泣き止むことが出来た。

「よし。じゃ、そろそろ帰りなさい。また、会おう」

「うん。約束だよ。絶対にまた会おうね」

「琉嘉が強く願ってくれば会えるよ。今日みたいな強引な手は邪道だからね」

琉衣はそう言って私を見送る。私は、扉を潜った。

* * * *

目を開くと、見慣れない天井が目に入る。そうだ。ここはドイツのリヒャルトさんの家だ。

電話が終わったあと、まだ熱が高いからって、無理やり寝かされたんだ。…だから、夢の中で琉衣と会ったんだ。

……喉渴いた。何か飲み物が欲しい。辺りを見回して、何か飲み物が無いか探す。

「喉渴いたな……」

じっくり見回してみたが見つからず、仕方なくベッドから降りて台所へ向う。冷蔵庫にミネラルウォーターがあるはずだから一本貰おう。

「おや？目が覚めたのか」

ベッドを降りて部屋を出ると、リヒャルトさんがちょうど通りかかる。

「ちょうど診に行こうと思ってたんだが……大丈夫か？」

「まだ頭ボーっとしてる」

「ならどうして起きてるんだ？」

「喉渴いた……。何か飲み物頂戴」

「持つてくるからベッドに横になって待つてる。いいな？」

「ありがとーリヒャルトさん」

リヒャルトさんは私の様子を診に来ようとしていたらしい。グッドタイミング。実はまだ頭がボーっとして、フラフラするんだ。立つて歩くのも実はまだちよっとキツイんだ。

ベッドに横になってしばらくすると、リヒャルトさんがミネラルウォーター（２リットル）の入ったペットボトルとコップを持つてきた。

「この一本は此处に置いておくから、飲め。コップも置いておくから」

「うん。ありがとーリヒャルトさん」

私はお礼を言って早速コップに水を汲み、飲む。喉が潤う。美味しい。

「ああ、それと、ルカ。俺のことはリヒャルトでいい。敬称はいらないから。セシルも多分そうだと思うぞ？」

「分かった。んじゃ、今度からリヒャルトさんじゃなくて普通にリヒャルトって呼ぶね」

「ああ。俺もそのほうがいい」

そんなものなのか。ていうか、最近は何んだか驚くことがいっぱいあるような気がする。

久しぶりに病院じゃないところにいるからかな。……っというか、ここも一応病院だから違うか。

「それと、親御さんから連絡があった。ドイツ行きの飛行機のチケットが取れたそうだ。来週来るらしいぞ」

「……………」

「…逃げるなよ？」

ああ、来週は勝負の時間ですね。

逃げはしないけど、逃げたいっていう感情はあるな。逃げたら後が怖いから逃げないけど、やっぱり逃げたいな。

ていうか、何人で来るつもりだろう。間違はなくお母さんは来る。お父さんも来るって言ってたし、お兄ちゃんも同様だ。この三人で済めばいいけれど、他に誰かが来たらもう最悪だ。疲れること間違いないし。

リヒャルト、その辺聞いてないのかな。聞いてみよう。

「ね、誰が来るって言ってた？」

「とりあえず、チケット四枚取ったって聞いたけど、誰が来るかは聞いてないな」

…四枚？お母さんとお父さんとお兄ちゃんと、もう一人は誰だろう。まさかのまさかでおじいちゃん？おばあちゃん？

……誰にしても、疲れることは決まったな。

そう思いながら深い溜め息を吐くと、リヒャルトが頭を撫でてくれる。

「そんなに嫌そうな顔をするなよ。ご家族だって心配してたんだから。な？」

「それは分かるけどさ。ただね、その四人が来れば間違いなく疲れ

るだろうから、それを想像するだけでもう疲れきっちゃうんだ」

それを聞いたリヒャルトの手が止まる。言わないほうがよかったかな。ま、いつか。

「ほ、ホラ。とりあえず今はそういうことを考えず、休め。休んで熱を下げる。な？」

話しを変える手に出ましたか。まあ、それが最善策かな。とりあえず、寝よう。起きててもダルいから。

「おやすみー、リヒャルト」
「ああ。ゆっくり休め」

そして、私はまた眠る。深く、深く眠る。夢は見ないけれど、眠る。

数日後。

私は熱が完全に下がったので、ドイツの街の探索をすることにしました。来たばかりの頃は辺りを見回す余裕も無かったし。

家を出るときにリヒャルトとセシルに携帯を持たされ、出掛ける。迷子になったら家に電話をしろとのこと。……迷わないよう努力しましょう。

結果、迷うことなく無事に帰ってくる事が出来た。よかったよかった。

そしてそれからまた時が流れ、勝負の時がやってくる。

ピンポン。

玄関のチャイムが鳴る。今日は、お母さんたちが来る日。このチ

ヤイムを鳴らすのはお母さんたちだろうか。

「すみませーん。どなたかいらっしやいませんかー？」

ドイツ語で在宅か問う声。……お母さんだね。

それを聞いたセシルが「少々お待ちください」と言って、玄関へ向かう。ああ、恐怖の時間がやってくる。

「娘がご迷惑をおかけしてます。片桐琉嘉の母です」

「父です」

「兄です」

「従姉です」

うわお。最後の一人は彩ねえですか。ちょっと予想外だ。

「ルカー。ご家族の方がいらしたよー」

玄関を開け、お母さんたちの姿を確認したセシルは私を呼ぶ。…

…呼ばなくてもいいのに。

私は恐怖に慄きながら玄関に向かう。覚悟を決めよう。

「ひ……久しぶり……」

「琉嘉！」

私が挨拶をした途端、お兄ちゃんが私の名前を呼び、抱きついてくる。予想外の展開だ。……っていうか、苦しい。

「この馬鹿！心配かけさせやがって！」

「全くだ。お前から電話の入るまでの数日間、お父さんたちがどんな気持ちでいたか分かるか？」

「こつやって、無事に会うことが出来たからいいけどね」
「そうそうー。お母さんもおばあちゃんたちもみーんな心配してたんだかんねー？」

お兄ちゃん、お父さん、お母さん、彩ねえが続けて言う。
うん、言ってることは正論なんだけど、ちよつと、苦しいな……
……。もう……ダメ……だ。……きゆう。

「琉嘉!？」

「どうした!? 琉嘉!-!」

「李旺。あんた力込めて抱きすぎ! それで苦しいのよ!」

「李旺! 琉嘉を離しなさい!」

うわー、彩ねえがゆっくり話す余裕も無いくらいに焦ってるよ。
っていうか、ホント早く離して。苦しいよ、お兄ちゃん。
そして、そこまで言われて、漸くお兄ちゃんは私を離す。ああ、
苦しかった。

「琉嘉、ゴメン。ちよつと興奮しすぎた」

「うん。苦しくて死ぬかと思ったよ。マジで」

私が言うと、お兄ちゃんはさらにへこむ。死ぬかと思ったは言い過ぎたかな。

「とりあえず、玄関で話さないでありませんか？」

とここで、ずっと黙っていたセシルが口を開く。今まで日本語で話してたから理解出来ず、話の止まった今を狙って声をかけたのかな。

「院長ー。ルカのご家族がいらっしやいましたよー」
「ん？ああ。もういらしたのか」

お母さんたちはリビングに通され、セシルはリビングにいないリヒャルトを呼びに行く。

お母さんたちの来訪を知らされたリヒャルトは、のんびりとリビングに姿を現した。

「はじめまして。リヒャルトと言います。申し訳ありませんが、自己紹介をしていただけますか？呼び方が分からないとどうしようもないので」

まずは自己紹介ですか、リヒャルトさん。とりあえず、私が怒られないようにしてくれるのならば、目を瞑ろう。

「はじめまして。琉嘉の父親の片桐陸です」

「母親の理沙です」

「兄の李旺です」

「従姉の彩夏です」

「リクに、リサ。そして、リオにアヤカ、ですね」

ソッコーで名前呼び確定かい。ま、いつけどさ。

そう思いながらお母さんたちを見ていると、突然、リヒャルトが此方を向き、言う。

「ルカ。俺はちょっとリクやリサと話したいから、ルカは部屋にいてくれるかい？リオとアヤカもルカと一緒にいてくれると嬉しいな」
「後でお菓子と飲み物持って行くからね」

セシルもリヒャルト側に付くか。なら間違いなく私が不利だ。な

ので、大人しく与えられた部屋に引つ込むことにした。後ろからはお兄ちゃんと彩ねえが着いて来る。

リヒャルト、お母さんたちに何を言うつもりなんだろう。後から何を言ったのか聞いてみようっと。

そして部屋に着くと、まず、お兄ちゃんが口を開いた。

「さて、先に家出の理由を聞いていいか？」

「分かんない」

そう言った瞬間、二人の表情が一気に怖くなる。あたりの温度も下がったかな。

「分かんないってどういうことだ？」

「分かんないは分かんないだよ。気が付いたら病院抜け出してたんだから。それまでの記憶が無いんだよ」

「じゃあ、どうしてドイツに逃げた？」

「ドイツ行きの飛行機の席が空いてたから」

「つまり、病院を抜け出した後の記憶はあるわけだな。どうして戻らなかつたんだ？」

「だって、戻つたらまた手術を受ける、嫌だの押し問答が始まるじゃん。それが嫌だった」

私はお兄ちゃんの目をしっかりと見据え、続ける。

「あのままいたら、私は多分壊れてたよ。お母さんたちのために手術を受けないと、ていうプレッシャーと、怖いから受けたくない、っていう自分の感情に押し潰されて。だから、逃げた。日本にいたらずに捕まると思ったから、外国に逃げた。言葉の分かる国で、一番早く日本を出る飛行機はドイツ行きだったからドイツに逃げた」

私を見るお兄ちゃんたちの目が哀れむ目になる。私はそんな目で見られるのは嫌いだよ、お兄ちゃん。彩ねえ。だから、止めてよ。

「なあ、琉嘉。手術を受けろって言う俺の言葉はそんなに重かったのか？」

「うん。あの頃は本当に重かったよ。潰れそうだった。だから、逃げた」

「そか。ゴメンな、琉嘉。お前が逃げたの、俺のせいだな。ゴメン、止めてよ。お兄ちゃんのせいじゃない。私の自己満足だ。全部、私が悪いんだよ。」

「違うっ！李旺には悪くない！悪いのは私なんだよ！！」
「俺が悪いんだ。琉嘉は悪くない。全部俺のせいだ」

違う。違う。違う。

どうして勝手に自分のせいにしてるんだ。私が悪い。それでいいじゃないか。それでもお兄ちゃんは自分が悪いと言い張る。…強情だな。

「てか、二人とも悪いってことで決着つければいいんじゃないの？」

バレた

ここで、彩ねえののんびりとした声が入る。

「琉嘉がそれでいいならいいと思う」

お兄ちゃんは彩ねえの意見に乗る。でも私は納得できない。私が全面的に悪い。

「お前は馬鹿かつ！せつかく穏便に解決しようとしてるのに、どうしてそう反発する！？何？反抗期？性質悪いなー、もう」

そう言ったら、その瞬間に彩ねえの雷が落ちた。彩ねえに怒鳴られた。彩ねえに……。シクシク。悲しくなってきた。

「って！？何で泣くの？」

「うわーあん」

「え？私泣かせるようなこと言った？ねえ、李旺。私言った？？」

お兄ちゃんは焦る彩ねえに問われ、首を横に振る。分かっている。彩ねえの言ったことは正論なんだって。

でも、彩ねえに怒鳴られるなんて初めてだから、怖いよう。怖いよう。

「うああああああん」

私の泣き声は止まらない。止めたくても止められないんだ。

「琉嘉？」

リビングにも私の泣き声は聞こえたらしい。大人四人が揃って見に来る。

「李旺。何があつたの？」

「彩ねえが泣かした」

「ちょよ!? 真実だけど、もうちょっと説明入れてよ!!!」

お兄ちゃんのその答えに、お母さんは反応する。そして、彩ねえに問う。

「彩ちゃん。琉嘉に何したの？」

「え? いや……そのお……」

お母さんの暗黒オーラに、彩ねえがたじろぐ。ついでだが、お父さんはこの状況をリヒャルトとセシルに通訳していた。

「ねえ、彩ちゃん。何したの？」

「えと、琉嘉の家出の原因で、李旺と琉嘉が言い争ってたからね、

こう、穏便に解決しようと思いを出したんだよ」

「それで?」

うわー、お母さんの声が冷たい。怖い怖い怖い。

「李旺はその案に乗ったから、これで琉嘉も乗ってくれば穏便に解決できたんだけど琉嘉が強情張るから、つい怒鳴っちゃって……」

「そうしたら泣いた、と?」

「うん」

「母さん。俺の見てた限りでは、彩ねえに非は無いと思うぞ」

お兄ちゃんがそう言った瞬間、お母さんの視線が此方に移る。…
…怖い。

「琉嘉。そうなの？」

私は未だ泣き止めずにいたため、顔を返事として返す。それを見たお母さんが溜め息を吐いた。

「琉嘉。それでそうして泣いてるの？」

あ、声が優しい。もう怒ってないよね。

でも、答えたくても泣き止めないから話せない。

「ゆっくりでいいから、自分の言葉で言いなさい。誰も急かさないから」

お母さんのその言葉に、私は安心して口を開く。聞き取りにくいのは承知で聞いて欲しい。

「だって……っ、彩ね……っに怒鳴られたの……っ、初めて……っから…」

「だから？」

「びっくり……してねっ……涙……出ちゃ……たの」

「つまり、彩ちゃんに初めて怒鳴られたからビックリして涙が出てきて、止められなくなった、ってということかしら？」

その通り。私は頷く。

それを聞いたお母さんはまたも溜め息を吐く。まあ、溜め息も吐くだろうね。こんな理由じゃ。

でも、出てきたんだから仕方ないじゃん。止められなかったんだ

もん。

「ルカ。タオル持ってきたから涙を拭きなさい」

「あ……ありがとう……。セシル」

私の涙はまだ止まらない。私は貰ったタオルで未だ止め処無く流れる涙を拭う。

そして漸く泣き止んだ頃、お母さんが口を開いた。

「琉嘉。ゴメンね」

「え!?!」

え!?! コレは一体何に対する謝罪なの？

「お母さんたち、琉嘉にかなりのプレッシャーを与えてたのね」

ああ、それか。確かにあれはプレッシャーだったけど、謝られると私がどう謝ればいいか分からなくなるから困る。

「リヒャルトさんたちに全部聞いた。俺たちが悪かった。ゴメンな、琉嘉」

お父さんも!?!

ちよつと、止めてよ二人とも。私が謝るタイミングが掴めないじゃないか。

「それで、琉嘉。ドイツで手術を受ける決意をしてくれたんですって?」

「あ……うん」

「なにに!?!」

それを聞いたお兄ちゃんが反応する。ま、言ってなかったからね。

「お前、手術嫌なんじゃなかったのか？」

「嫌だよ。でも、リヒャルトの知り合いの先生なら日本よりは成功率が高くなるらしいから、ドイツで受ける」

それを聞いたお兄ちゃんが嬉しそうに笑う。まだ成功したわけじゃないのに、笑う。

「病気治ったらいっぱい遊びに行こうな、琉嘉」

「気が早いよ、李旺にい。でも、治ったら遊びに行こうね。……約束もあるし」

「それは私も参加ー」

彩ねえも入って、笑う。手術がうまくいきますように。無事に、手術出来ますように。

さて、親愛なるお兄様。約束のことは思い出しましたか？お兄ちゃんが先生に喧嘩売ったのをお母さんに言わない代わりに、どこか遊びに行く約束してたよね。

きちんと守ってもらいますよ？ちゃんと言質は取ってあるんだから。

「ちや、ちゃんと覚えてるって。心配するな」

「あら？そんな約束いつしたの？」

お母さんが口を挟む。その瞬間、お兄ちゃんが焦った。その瞬間をお母さんは見逃さない。

「りーおっ。あんた何したの？今焦ったでしょ？お母さんにバレた

らマズいことしたんじゃない？」

「そ……そんなわけないじゃん。何言ってるのさ、母さん」

バレバレだって、お兄ちゃん。そんな分かりやすい嘘でお母さんを欺けるわけないじゃないか。

「何したの？李旺。早く吐かなきゃ、遅くなれば遅くなるほどお叱りはひどくなるわよー？」

「何もしてないって。な？琉嘉」

え？ちよ！？私を巻き込まないでよ。

「琉嘉。本当？」

「う……うん。本当だよ……」

「………嘘ね。李旺。とっとと吐きなさい」

お兄ちゃんが恨みがましそうな目で私を見る。仕方ないじゃない。いきなり振るんだもん。いきなりでそんな上手に嘘は吐けません。そうやって目で会話をしている間に、お母さんの後ろには漆黒のオーラと阿修羅が降臨する。……さらばお兄ちゃん。お兄ちゃんの尊い犠牲は忘れないよ。

「李旺。ちよつとこっちに来なさい」

お母さんはそう言ってお兄ちゃんを捕まえる。

「すみませんが、先程の部屋をお借りしてもよろしいでしょうか？この子と1対1で話したいので」

お兄ちゃんを捕まえた後は、一時的に阿修羅を隠してリヒャルト

に声をかける。阿修羅が見えていないリヒャルトは快く了解した。

お母さんとお兄ちゃんの去った部屋で、私は手を合わせる。

お兄ちゃん、ご愁傷様です。

そうやって手を合わせていると、いつの間に取りに行ったのか、紅茶とクッキーを乗せたお盆を持つセシルが、何故手を合わせているのか聞いてきた。

「ああ。これは李旺にいい対してだよ。ご愁傷様です、ってね」

それを聞いたセシルがさらに不思議そうな顔をする。ご愁傷様、と言う言葉のドイツ語が分からなかったから似たような言葉で言ったのだが、分からなかったのだろうか。

だが、それは違った。意味的には無事に通じたらしい。疑問に思っただけのことの様。

「どうしてそうなるの？」

「は？」

「どうして、そんな手を合わせることになるの？ただ、お母様に叱られるだけでしょう？」

……それはお母さんのお叱りの恐ろしさを知らないからいえるお言葉ですね、はい。お母さんのお叱りの怖さを知っていれば絶対に言えない。お母さんのお叱りは本当に怖いんだ。

そう思っていると、お父さんが助け舟を出してくれた。代わりに答えてくれる。

「琉嘉がそこまでやりたくなくなるくらいにアイツのお叱りは怖いんですよ。この子達曰く、後ろに真っ黒いオーラと阿修羅が見えるらしいですから」

「アシユラ？」

「仏教における、戦闘の神のことです」

「後ろに戦闘の神が見えると言っているのは怖いですね」

と、ここでリヒャルトが口を挟む。…興味はあったのか。黙っているから興味がないのかと思ってた。

「そのアシユラとは、どういう姿をしているんです？」

「三面六臂」

『は？』

私が答えると、リヒャルトとセシルが揃って聞き返してくる。今、二人とも頭上にはてなマークが出てるのではないだろうか。

「だから、3つの顔に6本の腕があるんだよ。それで、三面六臂」

丁寧に説明をすると、二人は「おお」と頷く。ちゃんと分かってくれたかな。

そうして話していると、部屋の扉が開かれ、お母さんが顔を見せる。

そして、私を呼ぶ。…怒ってる？まだ怒ってる？怖いなあ怖いなあ。

「行って来い、琉嘉」

お父さんが肩に手を乗せ、言う。

「頑張っておいでー」

彩ねえが無責任発言をする。鬼。悪魔。彩ねえの馬鹿。

「琉嘉。琉嘉には怒ってないからおいで。ちょっと話が聞きたいだけだから。李旺。アンタその間はこっちの部屋に戻ってなさい」

あ、怒ってないならいいや。そう思いながら、私はリビングへと向かった。

「李旺から大体話は聞いたけど、あの子、まだ何か隠してそうなのよね。だから、琉嘉。あの子の隠してることを、包み隠さず話しなさい」

お母さんはニツコリ笑って言う。その笑みが怖い。阿修羅はいないけど、後ろの漆黒のオーラは消えていない。

怒ってないって言ったじゃないか。お母さんの嘘吐き。

私がそう言うと、お母さんは更にニツコリ笑って怒っていないと言う。…嘘だ。

「どこが嘘なのかしら？」

「怒ってないなら後ろの黒いオーラが消えてるはずだもん。まだ残ってるから嘘」

「大丈夫大丈夫。これは李旺に対する怒りだから。琉嘉に対してじゃないから」

そういう問題か？でも、いいや。これ以上言っただら後が怖い。

「で、李旺は何を隠してるの？」

「てか、お兄ちゃんは何を吐いたの？」

私が聞くとお母さんは「質問に質問で返さないの」と言ったが、ちゃんと説明してくれた。

「あの子の話だと…琉嘉。あの子、あなたの勉強中に玲斗君と喧嘩して騒いだんだって？それで、今度あなたの外出許可が下りたときに無理にでも部活を休んで一緒に遊びに行く約束をした、と。そのかわり、お母さんに言わないでって言ったらしいわね。…違うところはある？」

私は首を横に振る。全て合っていますとも。ただ、約束をしたのとその約束の理由は違うけど。

そう言つと、お母さんはその約束の理由を尋ねる。報告開始ですね。

「んとね、その約束をすることになった理由はね、李旺にいが本谷先生に喧嘩売つたからなんだよ」

「喧嘩を売つた？玲斗君じゃなくて、本谷先生に？」
「うん」

頷きながら答えると、お母さんは続きを促す。

「本谷先生つて、李旺にいの1、2年生のときの担任なんだよね？」
「そうよ」

「で、それで慣れてるからかは知らないけどね、李旺にい、先生のこと、先生じゃなくてモトヤンって呼ぶんだ」

それを言った途端、辺りの空気の温度が下がる。……寒い。震えてきた…。

それに気が付いたお母さんは、急いで自分の着ていた上着を脱ぎ、私に掛ける。暖かくて気持ちいい。

「で、それでどうしたの？」

「それで、李旺にいはそうやって先生を馬鹿にするようなこと言つて、先生はそれを止めさせようとして舌戦をしてたんだ。で、それを止めるためにお母さんに言うよ、って言ったらまず、ジューズ奢るから言わないでって言われた」

「まず、ってことはそれで終わらなかつたのね」

「うん。それから先生が帰って、そのときにさっきの条件言われたの。ついでに、玲君に喧嘩売つたのはその次の日」

「そう。ありがとう、琉嘉。みんなのところに戻ってて」

お母さんはそう言つて私を先程の部屋に戻す。そして、同時にお兄ちゃんをもう一度呼ぶ。お兄ちゃんは体をビクつかせた。

「李旺にい、頑張れ。私は隠しておくこと出来なかつたから」

すれ違つ時に小声で言うと、李旺にいはまたも恨みがましそうな目で私を見る。お母さんに隠し事できるわけないもん。無理だもん。あの真つ黒いオーラの前で、嘔吐いたり隠し事をしようだなんて無理でしょう。たっぷり叱られて吐かされるのが関の山。そうなる前に言つたほづが身のためなんだい。

「琉嘉。何を言われたんだい？」

「李旺にいの悪の所業を包み隠さず吐け」

お父さんに問われ、正直に答える。それを聞いたお父さんの動きが一瞬停止した。だがすぐに元に戻り、再び問う。

「悪の所業って……。言いすぎだろう」

「うん。それはちよつと言いすぎた。でも、李旺にいが隠してる」と悪事だったからさ……」

「アイツは一体何をしたんだ？」

「聞かなかったの？」

意外。お兄ちゃんに聞いてるんだと思ってた。お兄ちゃんも話さなかったのか。

「本谷先生に喧嘩売った」

「本谷先生って、お前の担任のか？」

「うん。ついでに李旺にいの1、2年の時の担任」

それを聞いたお父さんは深く溜め息を吐く。

「あの、馬鹿息子。後で俺からも叱つとくか」

「それはそれは。李旺にいが可哀相な気がする」

「どうしてだ？悪いのはアイツだろう」

「だって、唯でさえお母さんに怒られるのだけでかなり怖いのに、それにお父さんまで入ったらもうどれだけヤバいの？って感じだもん。彩ねえもそう思わない？」

「うーん。確かにねーえ。叔母さんがどれだけ怖いのかは分からないけど、ウチのお母さんと同じくらいには怖いだろうしねー。それに叔父さんも入ったらもうカオスー？」

結果が未知数な分カオスなのかな。まあ、確かに怖いよね。どうなるか分からない分、心の底から恐ろしいよね。

それにしても、喉渴いたな。確か、セシルが紅茶を持ってきてたハズだけど、どこにあるんだろう。辺りを見回していると、そのセシルが口を開く。

「ルカ。どうしたの？」

「セシル、さつき紅茶持ってきてたよね？どこに置いてあるの？」

「ああ。ちょっと待っててね。お湯が温くなったから今沸かしなお

してるの」

沸くまで待て、ということですね。ま、いっけどさ。すぐ沸くだろうし。」

そして少しして、お湯が沸いたのかセシルが紅茶の入ったティーカップを私に渡す。

「はい。お待たせ」

「ありがとう、セシル」

「皆さんもどうぞ」

私は礼を言っつて紅茶を受け取る。…が、熱すぎて飲めないのので、フーフーと冷まししながら飲んだ。渴いた喉が潤う。

そしてしばらくして、漸くお兄ちゃんとお母さんが戻ってきた。

「長らく隣の部屋を占拠して申し訳ありませんでした」

お母さんはまずリヒャルトの元へ行き、謝罪の言葉を述べる。

お兄ちゃんがとてもげんなりとした顔をしている。まあ、それもそうだろう。お母さんに徹底的に叱られればああもなる。

そんなお兄ちゃんにセシルは紅茶を渡す。お兄ちゃんは礼を言っつて受け取って、一気に飲んだ。よっぽど喉が渴いていたんだろう。

「さて、私たちはいったんホテルに戻りましょうか。もうあたりも暗くなってるし」

お母さんに言われ、外を見る。確かに外は薄暗い。

「また明日お話しに来て大丈夫ですか？」

「ええ。待っていますよ」

お母さんとリヒヤルトはそうやって会話を交わす。そしてお母さんたちはホテルへと戻っていった。

……お兄ちゃん大丈夫かな。ホテルに戻って今度はお父さんに叱られるなんてことにならないように祈っていてあげよう。

結果は明日来たときに聞けばいい。

「ルカ。今話しても大丈夫かい？」

「ん？何が？」

「俺たちがリクやリサと話したことを、ルカにも知らせておいたほうがいいだろう？」

それはその通り。是非に、聞かせていただきますしょう。

「俺たちはまず、ルカの手術のことを話した。知り合いに心臓手術の権威がいるから話してみる、ってな。で、電話したんだ。そうしたら今はちよつと無理だから、しばらく待つて欲しいといわれた」

しばらくつてどれくらいだよ。私が生きている間に手術は出来るのかな。

そう思っていると、リヒヤルトが微笑しながら話してくれる。

「しばらくつていつてもそんなに長くはないさ。長くても半年だよ、きつと。だから、ルカ。お前は一度日本へ帰れ。今まで入院していた病院で出来る限りの治療を受けてろ」

「え！？」

うわあ、嫌だ。会いたくない。何て言って会えばいいか分からない。ていうか、怒られるかな。怒られるよね。いきなりいなくなっただんだし。

由里先生が怒ったらどうなるんだろう。知りたい気持ち、1%。
知りたくない気持ち、99%。

「大丈夫だよ。怒られやしない。リクやリサがうまく言ってくれ
から。だから、な？」

リヒャルトは、微笑む。

「一度、日本へ戻るんだ。リサが言った。来週日本へ帰るそうだ
が、そのときのチケットは5人分取ってあると。だから、来週一緒
に戻れ」

「手術が近づいたら、またこっちへ来るの。そして、善くなったら
今度は純粹に遊びにいらっしやい。待ってるから」

「ああ。遊びに来て、またうちに泊まればいい。行きたい場所があ
るなら連れて行ってやるから」

ああ。どうして私の周りは優しい人間が多いんだ。

琉衣。リヒャルト。セシル。どうして、返せないのにこんなに優
しくしてくれるんだ。

涙が、溢れる。

止まらない。ドイツに来てからよく泣いてる気がする。それも、
仕方ない。リヒャルトたちが優しすぎるのが悪いんだ。

嗚咽が零れる。

もう、抑えきれない。一度零せば滝のようにどんどん流れてい
く。

涙は、枯れることを知らない。

今日既にたくさん流したのに、まだ流れる。止まらない。枯れな
い。枯渇という言葉が無い。

ああ、疲れた。瞼が重い。

もう、眠っていいかな。なんだかとっても眠いんだ。

そして私は眠りに堕ちた。

鳥の鳴き声で目を覚ます。もう朝か。

つて、あれ？目を開けているはずなのに辺りが暗い。まだ夜か。否。鳥の鳴き声が聞こえたということは朝のはず。なのに、どうして暗い。

そう思いながら体を起こすと何かが落ち、一気に光が差し込む。視界が暗かった原因は先程落ちたコイツか。

コイツとは、タオルのこと。恐らく昨晚私が泣き疲れて眠った後、目が腫れないようにリヒャルトがセシルが置いてくれたのだらう。

そのおかげか、いつも泣いたまま眠った後に起こる腫れぼったい感じが全く無い。感謝感謝。

「お、起きてたか。おはよう、ルカ。朝ごはん出来たから食べよう」
「おはよ、リヒャルト」

そうしてリビングへ向かうと、セシルが朝食を並べていた。

「おはよ、ルカ。昨日は夕食食べずに寝ちゃったからおなか空いたでしょ？」

「おはよーセシル。うん、もうお腹ペコペコだよ」

そうなんだよ。昨日はそのままご飯を食べることなく寝ちゃったから、もうお腹が空きすぎて限界なんだ。

さつきからお腹がグーグー鳴り続けている。

その音を聞いて、リヒャルトはさつきから笑いっぱなしだ。くそ

う。
「ク……クククっ。悪い悪い。さ、食べよう」

文句は言いたいけれど、お腹が空いているので先に食べるほうを取る。食べたなら文句言うから覚悟してよ。

そしてご飯を食べ終わると、リヒャルトは仕事の支度をする。昨日は休みだったが、今日は開けるらしい。

「あれ？セシルは今日は休み？」

「ええ。今日は通いの看護婦さんが来る日だから私は休みよー」
「だからゆっくりしてるのかあ」

ああ、そういえば今日もあの人たちが来るんだっけ。今日も疲れる運命にあるのかな。面倒だな。

「さ、今日はルカのご家族たちと一緒に観光をしましょう。私が案内するから」

「観光？」

「そう。観光。現地の人間しか知らないような穴場スポットをいっぱい紹介してあげる。まあ、インターネットが普及してる今じゃ、そんな場所ないかもしれないけど」

それは楽しみだ。どんな場所に連れて行ってくれるんだろう。

結果、実はインターネットで検索して、行ったことがある場所ばかりだった。まあ、久しぶりだから楽しかったが。

「ごめんなさい」

突如、セシルが謝る。

何故謝る。分からない。どうしてだろ。

「気にしないでください」

お父さんやお母さんはそんなセシルに声をかける。何故謝っているのか分かってるのか。

不思議そうな顔をする私に、お兄ちゃんが頭に手を置き、「後で説明してやる」と小声で言う。

待ってるよ、お兄ちゃん。説明してくれなきゃ泣いちゃうよ？

「ゴメンね、ルカ。私の知ってる穴場スポットはみんなインターネットで知ってて行ける場所だったみたい。ルカたちも以前行ったことがあるみたいだね」

ああ、だからか。だからセシルは謝ったのか。

お兄ちゃん、もう分かったから説明要らない。お役御免。

「いいよ。行ったことがあるっていつても大分前だしさ。久しぶりだから楽しかったよ」

「そう言ってもらえると嬉しい」

そう言っただけでセシルは微笑む。

そして私たちは、帰国の日を迎えた。

別れ (前書き)

日本上陸です。

別れ

「もう家出してくるなよー」

別れの辛さに涙しようとしていると、リヒャルトが軽い口調で言うってくる。…もう涙なんて流してたまるか。

「よし、涙は引っ込んだな。これで笑ってお別れが出来る」

計画的！？うーむ、さすがは医者。そういう頭はよく働くのか。

「リク、リサ。手術をしてくれる医者から連絡があったらすぐに連絡する。待っていてくれ」

「出来るだけ早めの連絡を待ってるよ」

「この子のためにもね」

お父さんが淡く微笑みながら答え、お母さんは私の頭に手を置く。だから、どうしてみんな私の頭を撫でる、若しくは手を乗せる。あんまり気にならない時は気にならないけど、一度気にしたらかなり気になるじゃないか。

試しに言ってみた。そうしたら全員から気にするなと返ってくる。気になるから言ったんじゃないか、全く。

「俺たちは今日は仕事だから空港まではいけないけど、元気にしてるよ、ルカ。手術の時が来るまでに死んだりしてたら許さないからな」

「その時は日本にお墓参りに行って延々と文句言っておあげるからね」

縁起でもない。っていうか、墓まで来て文句言うのは止めてよ。

セシルが言うと冗談に聞こえないから嫌なんだ。

手術前に死んだら本気でそれをやられそうで怖い。お願いだから、止めてよ。

セシルにそう言うとケラケラと笑う。「冗談だったようだが、冗談に聞こえなかった。怖すぎる。」

「さて、そろそろ空港へ行くか。時間も迫ってきたみたいだしな」

「あら、もうそんな時間？」

「琉嘉。別れの挨拶をしなさい」

お父さんとお母さんは私のほうを見ながら言う。分かっています。

「リヒャルト、セシル。今までお世話になりました。……ていうか、ホント面倒ばかり掛けてゴメンナサイ。手術前になったらまたお世話になります」

「ああ、そうだな。んで、手術終わったら遊ばなきゃな」

「遊びに来るって言う約束、しょっか」

「うん」

私たちは指切りをする。

約束。絶対。私は絶対に、元気になって遊びに来る。決めた。

今日は、泣かないよ。今までにたくさん泣いたから。

別れは寂しいけれど、また会える。だから、泣かないよ。

でも、そんなの無理だ。涙は流れる。泣かないと決めていても、流れる。

「ルカ。泣くな。また会えるんだから。これが一生の別れって言うわけでもない。だから、な？」

無理だよ。分かっている。分かっているんだ。でも、止まらない。

止めようとする、更に激しい嗚咽が漏れる。止めれない。

「ルカ。笑って？笑えば涙なんて吹っ飛んじゃうよ」

無茶を言う。泣いている時に笑えるものか。

でも、一応挑戦してみる。笑おう。笑うんだ。

「ああ、ちゃんと笑ってくれたね。これで、笑ってお別れ。今度来る時は笑顔で来てね？」

笑えてるのか。自分じゃ、よく分からない。でも、笑えているよ。うだ。

そして私たちは空港へ向かい、搭乗した。

日本。成田空港。

「琉嘉！」

日本に到着し空港へ降り立つと、まず、おじいちゃんたちが私を出迎えた。

「おじいちゃん、おばあちゃん」

「心配を掛けさせてくれたな、この馬鹿孫」

「本当に心配したのよ、琉嘉ちゃん。これからはこんなことしないでね？」

おじいちゃん、おばあちゃんから無言の圧力がかかる。怖い。言葉自体は優しい感じはするが、雰囲気怖い。

「う……ごめんなさい」

そして私が謝るとそれで満足したのか、次はお兄ちゃんと彩ねえの方を見る。そして、ニッコリ笑って口を開いた。

「李旺、彩夏。お前ら、この2週間授業出てない分、補習」

それを聞いた二人の表情が一気に変わる。……ご愁傷様です。

「特に、彩夏。お前受験生だからな。補習の数は李旺と比べると多いからな」

……あれ？彩ねえの私を見る目が怖いなあ。怖いなあ。私悪く……まあ、私が悪いけどさ。学校休んでまでドイツに来たのは彩ねえの勝手だよな。

そう思いながらおじいちゃんたちを見ていると、突然、腕が引かれる。引いたのは、玲君。

血の引く感じがよく分かる。一気に頭が冷える。……逃げていいかな。っていうか、逃げるね。

「あ！？こら待て！」

待てるわけないでしょう。私は逃げ続ける。……お兄ちゃんに捕まるまで。

「どうして逃げてるんだ、この馬鹿」

「いいから離してよ。玲君に追いつかれちゃうじゃん」
「追いつかれる」

鬼。鬼畜。外道。邪道。非道。思いつく言葉を徹底的に並べる。

その間も逃げようともがいたのだが、無理だった。
あつという間に玲君が目の前に来ていた。

「捕まえた」

玲君がニツコリと笑って私の腕を掴む。もう逃げられない。

「どうして逃げたんだ？俺は久しぶりに琉嘉に会えて嬉しかったの
に」

「あー、いや……そのお……」

「俺、琉嘉がいなくなっただって聞いてからずっと心配してたんだぞ
？それなのに逃げるなんて、琉嘉はひどいなあ」

「あううううう」

何一つとして反論できない。玲君もかなりお怒りの様子。自業自得とは言えど、辛い。

…病院に戻ってもこんな目に遭うのかな。それなら、そのままド
イツにいればよかったような気がする。

とここで、逃げた私に追いついてきたおじいちゃんたちが口を開
く。

「琉嘉。おじいちゃんたちは仕事があるから戻るが……ちゃんと病
院に戻るんだぞ？」

「はい」

ああ、無言の圧力が減る。助かる。でも、これからも勝負の時間。
次の勝負場所は病院か。

ていうか、玲君はどうして空港にいるんだろう。入院してたんじ
やないのか。

「外出許可とつて来たに決まってるじゃないか」

聞いてみると、あっさりとした回答が返ってくる。ああ、成程。そして、私たちの乗った車はどんどんと病院へ近付いていく。ああ、怖い。

「怒られても自業自得だな」

「李旺にいの無責任」

病院に近づく車の中で、お兄ちゃんは無責任発言をする。おのれ、確かに自業自得ではあるが、そんな言わなくてもいいじゃないか。

ああ、怖い。怖い。怖い。怖い。怖い。

心の底から怖い。

怒られる。怒られる。怖い。怖い。怖い。

そうこう考えている間に、病院に到着する。病院の入り口には、由里先生と堤さんが立っていた。

……怒られる？

『琉嘉ちゃん！』

車を降りて入り口へ恐る恐る向かうと、二人に名前を呼ばれる。

…怖い。

そう思った途端、目の前が暗くなる。何故か。それは、抱きしめられたからだ。

「心配したよ、琉嘉ちゃん」

「いきなりいなくなったときは吃驚したよ？片桐さんから連絡がくるまでどれだけ心を痛めたか」

「う……ゴメンナサイ」

怒られる気配はない。でも、まだ恐怖は拭えない。怒られる？本気で怒られる？

「とりあえず、早く病室に戻ろうか。病室はそのままだから」

約1月、黙っていなくなっただけでそのままだったのに、まだ病室は変わってなかったのか。

強制退院か、病室移動かと思っていたのに。

そして私は病室へ戻る。ああ、懐かしき光景。そして、嫌な光景。

「さ、早く着替えて横になってね。後で診察に来るから」

「はい」

そう言われて私は着替えを取る。そして、着替えようとして思う。

「お兄ちゃん、お父さん、玲君。私、着替えるんだけど？」

『！？』

お父さんはそれもそうか、という顔をして去っていき、お兄ちゃんと玲君は顔を真っ赤にして去っていった。

うわー、可愛い。ま、いいや。今のうちに着替えようっと。

そして着替え終わると、お母さんが出て行った三人を呼びに行く。私はそのままベッドに横になった。

あれ。眠いなあ。何か、眠い。うとうとする。眠たい。

「琉嘉」

三人が戻ってくる。でも、私はもう寝ている。眠さが限界だったからだ。

すやすや。熟睡。おやすみなさい。

「あれ？寝ちゃってる」

「熟睡中みたいだな」

「んー、この眠りは当分起きねえかな」

「んじゃ、俺は病室に戻ってますね」

お母さんが私を確認して言う。それにお父さん、お兄ちゃん、玲君が続いた。

ああもつ、五月蠅いよ。私は眠いんだ。そんなに騒いだら頭が覚醒しちゃうじゃないか。寝かせる。

それから辺りが静かになる。やっと、静かに眠れる。

ああ、堕ちる。堕ちた。

目を覚ます。目が覚めると、お母さんがベッド近くの椅子に座っていた。どれだけ眠っていたんだろう。

とりあえず、そんなに経っていないような気はするけれど、どうなんだろう。

「おはよう、琉嘉」

「おはよーお母さん。私、どのくらい眠ってた？」

「大体3時間くらい。夜眠れる？」

「多分ー。てか、お父さんたちは？」

「李旺は彩ちゃんと寮に帰ったわ。明日から補習だってお義父さんが言っただけだから。お父さんはその二人を送って行ったわ」

成程。だからか。だからいないのか。

そう思っていると、お母さんがナーズコールを押す。何故。

「はい。どうしました？」

「琉嘉、起きました」

「分かりました。では、今から行きますね」

え!?!何?何が起こるの?

怖いって。いや、マジで怖い。

そうして、由里先生と堤さんがやってくる。…何が起こるんだろ
う。

「おはよう、琉嘉ちゃん。よく眠れた?」

「お……おはよー由里せんせい」

ヤバイ。声が震えた。

「何ビクついているの?琉嘉ちゃん。怒らないよ?」

「……本当に怒らない?」

「怒らない怒らない。だから、真っ直ぐこっち見てね?」

本当にそうなのだろうか。怖い怖い怖い。とりあえず、目に炎が
灯っているようで怖い。

そう思っていると、堤さんが横から首を無理やり動かす。私の顔
は、由里先生の正面に来た。

ああ、怖い。

「堤さん、ナイス。そのまま琉嘉ちゃんの首を掴んでね」

「了解しました。琉嘉ちゃんも抵抗しないでね」

え!?!ちょっと、それ止めようよ。怖いって。怖い怖い怖い。

「さて、とりあえず、これからの話をしようかな」

これから?

「琉嘉ちゃん、ドイツで手術受けてくれる決心をしてくれたんだよね？」

「うん」

私は頷く。

「で、ドイツの先生は今すぐは無理だから、時間が欲しいと言ったらしいね。だから、それまでは日本で治療を受けるように」と
「そうです」

返事を返すのはお母さん。ていうか、お母さんが返事するなら私は喋らなくてもいいよね。

「だから、日本ではとりあえず今までどおり進行を緩めるようにするからね。聞いている？琉嘉ちゃん」

「うん。つまり、今までと一切変わりは無い、ってことだよな？」

「そういうことだね」

なら、一切関係ない。変わらないのならどうでもいい。

そして翌週。

私は屋上にいる。やっぱり屋上はいい。気持ちがいい。

「やあ、琉嘉。病室にいないと思えば、やっぱりここにいたね」

「玲君」

私が屋上でのおんぴりと空を眺めていると、玲君がやってくる。玲君とここで会うのも久しぶりだ。

「ここで会うのも久しぶりだよな」

「ああ。一月くらい琉嘉がいなかったからね」

墓穴だった。しまった。

玲君の目が怖い。射抜くような視線が恐怖を私に与えて寄越す。

「それにしても、今日の空も変わらず綺麗だよな」

「あ……うん」

玲君はそれに気が付いたのか、話を変えた。助かった。

そう思いながらまたのんびりと空を見上げた。空はいつもと変わらず真っ青だった。

雲が流れていく。静かに、ゆっくりと。

それが、当たり前。それなのに、しばらくゆっくりと見なかっただけでこんなに懐かしく感じるものなのだろうか。

懐古の情。

たった一月程でこんなにもそんなものを感じるだなんて。

「琉嘉。どうかした？」

そんな私に玲君が声を掛ける。気になっちゃったかな。

「久しぶりにこんなゆっくり空見たから懐かしく感じただけ」

「ああ。ドイツではゆっくり見ることは無かったのか」

「うん」

私が答えると、玲君は安心したように息を吐く。

どうして私の周りには心配性のような人がたくさんいるんだろう。いすぎでしょう。ちょっとくらい減ってもいいのに。

……まあ、お兄ちゃんが心配性の人間たちの筆頭か。

ああ、迷惑。心配してくれるのは嬉しいけど、心配すぎ。そんな時に空を見てみると、落ち着く。迷惑千万なお兄ちゃんのことを忘れることが出来ていい。ああ、心の底から落ち着く。

「琉嘉。今何考えてる？」

「李旺にいのこと」

「……………」

それを言った途端に玲君の動きが一瞬止まる。

「李旺のことをどう考えてたんだ？」

「李旺には心配性すぎだよな」と思ってた」

「成程」

「だから、空を見て落ち着いてたんだ」

ああ、落ち着く。空っていいなあ。いつ何時、天気さえよければ何も変わらない平和なもの。

落ち着く。心の底から落ち着く。

「ねえ、玲君。死について考えたことはある？」

「は？」

玲君は目を丸くする。それもそうか。いきなりこんなことを聞いたのだから。でも、気になるんだ。死について考えているのは私だけかと考えてしまうから。

「あるよ」

「へ？」

「死ぬことは眠ること、それだけの話だ」

いきなりなんですか。まず、死ぬことは眠ること、ってあっさり
と言いつつな。

「シェイクスピアの言葉だよ。シェイクスピアがハムレットで使った言葉だ。俺は死について考えた時、最後はその言葉を励みにしてきた。死は眠るだけだと。長く眠り、次は別の人間として目を覚ますだけだ、ってね」

成程。それは興味深い。それに、シェイクスピアか。今度探して見てみようつと。

「まあ、今の人生で知り合った人と二度と会えないのはちょっと寂しいけどね」

それが一番の問題と思うのは私だけでしょうか。今この時点で好きな人と一緒にいたいと思うから死にたくないと思うのに、死を眠りと考えたら目が覚めたらまた会えるように感じてしまう。

とここで、玲君が話しを変えて、口を開く。

「それか、神様に借りていた体を返して、しばらく休んでまた新たに体を借りて生まれ変わる。そんな考えもあるかな」

体を、返す。そうか。人間は元は神様が創ったもの。だから。

その考えのほうがいい気がする。これは、ちゃんと別れがあるように感じるから。

「さて、そろそろ戻ろつか。ちょっと冷えてきたからその格好じゃ辛いだろ?」

「うん。そうだね」

そして私たちは病室に戻る。結構薄着で屋上に行ったから寒いんだ。

ああ、寒い。体が冷えたな。戻ったらぬくぬくと体を温めなきゃ。そうしないとまた風邪を引く。もう風邪を引くのはうんざりだ。またあの大量の薬を飲むのは嫌だ。

以前のあれでもう懲りた。

そして、風邪でふと思い出した。…私、学校の勉強どうなるんだろう。約1月いなかったけど、その分のノートのコピーどうなってるんだろ。

今度先生に連絡を入れて見なきゃ。…ていうか、謝らなきゃか。

問題がたくさんある。

そして病室に戻ると、私はすぐにベッドに横になる。寒いから早く暖まらなきゃ。

その後私は夕食を食べて、本を取り出して読む。本もずっと読んでいなかったからそろそろ読みたかったんだ。

そうして本を読んでいると、消灯時間がすぐにやってきた。眠れそうに無いから、本を読むことにする。枕元のライトの明かりで、のんびりと本を読む。

すると、足音が聞こえてきた。…堤さんが来たか。

私は急いで本を片付け、枕元のライトを消す。堤さんが来る前に済まさなくては。

……そう思っていたのだが、間に合わなかった。

「琉嘉ちゃん。もう10時だよ？寝てなきゃダメじゃないの」

「はい。もう寝る。寝ます」

私は毛布を肩まで掛ける。そして、私は懇々と眠り続けた。

暖かい。気持ちがいい。ぬくぬく。これで熱出さなくて済むかな。熱出さなくて済むことをとにかく祈ろう。

そして、夜が明ける。ああ、何だかダルい。ヤバイ、熱出したか

な。検温の時間が怖い。……逃げよかな。

まあ、そんなわけにも行かない。また逃げると今度こそ全員に怒られる。それだけは避けなければ。

そうこうしている間に堤さんが来る。ああ、熱無ければいいな。そんな願いは叶わない。やっぱり熱があるようだ。

「何度？」

「……………39度ぴったり」

「屋上禁止。先生が診に来るからそれまでベッドに横になっててね？」

「はい」

あー、やっぱり熱出しちゃってた。最悪。また薬が増える。

大体夏風邪は治りにくいのに。面倒くさい。

……あれ？屋上禁止って、熱下がるまでだよ。何も言ってなかったけど、そうだよ。

ま、完全に禁止されても行くけど。もちろん、行きますけど。とりあえず、熱が下がるまでは安静にしてなきゃなあ。これで死んだりしたらセシルが本気であれをやりそうだ。

いや、本気でやり兼ねん。それは避けなければ。

あー、ダルい。

そうしていると、由里先生と堤さんが揃ってやってくる。ああ、反応するの面倒くさい。

「おはよう、琉嘉ちゃん。調子悪いそうだけど、どんな感じかな？」

「ダルいー。頭痛いー。何も考えたくないー」

「頭痛もあるんだね。喉は痛くない？」

「へーき」

あー、もう。こうやって話すのもダルいんだ。早く終わらせてく

れ。

意識が朦朧としてきた。なんか、更に熱上がってないか。視界がぼやける。ヤバイ。もう……ダメだあ……。体が沈む。深い、深い場所へ。体が重い。沈むのを止められない。力が入らない。全く抵抗できない。

「琉嘉ちゃん!？」

気付くの遅いよ。

そんな二人の私を呼ぶ声を子守唄に、私の意識は途切れた。

沈む。沈み続ける。深い場所へ。でも、それは嫌な場所ではない。温かくて、優しくて、気持ちのいい場所。

しばらく沈んで、漸く止まる。そして、漂い続ける。真っ暗で、何も分からない。でも、気持ちのいい場所。優しく包み込まれる感じが心地よい場所。

そこから、浮上が始まる。ただただ漂っていた状態から、ゆっくりと浮上する。

遠ざかっていた光が近付いてくる。

分かる。私の目が、覚める。

「ん……………」

「あ。琉嘉ちゃん、目が覚めた？調子はどつ？」

「……さっきよりはいい」

目が覚めて、すぐ傍にいたのは堤さん。あれからどれくらい経ったのかな。

「熱、測ってみようか。下がってるかもしれないし」

「うん。てか、私どれくらい寝てた？」
「30分くらいかな」

私が体温計を受け取りながら問うと、堤さんは私の頭を撫でながら答えてくれる。

30分しか寝ていないと言うことに驚いた。あの感覚的にもっと寝ていたんだろうと思っていたからだ。

「それにしても、さっきはいきなり気を失うからびっくりしたよ。先生と私と一緒に焦ったから」

「それは申し訳ない。でも、もう限界だったんだもん」

答えると同時に体温計が鳴る。確認してみると少しは下がっていた。

「どうだった？」

「38度2分。少しは下がったよ」

「みたいね。…熱さましが効いてきたかな？」

堤さんはそう言って上を見る。私もそれに倣って上を見てみると、点滴が見える。…気付かなかった。

まあ、このおかげで楽になったのだからよしとしよう。でも、知らない間に点滴はちよつとヤだな。

……………気にしないでおこう。気を失った私も悪いんだし。

「ところで琉嘉ちゃん。今回、どうして熱を出したのか予想は付く？」

「……………」

あー、コレ言ったらヤバイかな。言ったら完全屋上禁止令喰らう

かな。でも、言わなくても喰らい兼ねないな。

どうしよう。考えねば。どうしようか。

「琉嘉ちゃんが言わないのなら玲斗君に聞いてみるけど」

発熱2

玲君に聞くのなら言わなくてもバレるじゃないか。それなら隠す必要性は無い。

いや、寧ろ隠していたほうが後からひどい目に遭いそうだ。

「昨日……」

「昨日？」

「玲君と屋上行っていっぱいいろんな話して……」

「で？」

「戻ってくる時もう寒かったから……」

「それで体が冷えたのかな？」

「……………多分」

ていうか、そんないちいち聞き返してこなくてもいいじゃないか。続きが言いづらい。

そして、それを聞いた堤さんが考えている表情をする。嫌な予感。

「琉嘉ちゃん。屋上、完全に禁止にしようか」

やっぱり。でも、嫌に決まってるじゃないか。もちろん反対しますとも。

「先生と相談してからじゃないと完全には決められないけど、屋上に行ってから風邪をひいたとなると、禁止にせざるをえなくなると思っただよね。とりあえず、私はそう思っただ」

「でも、屋上は私の癒しの場だもん！禁止されても行くもん！」

私が言った瞬間、堤さんの表情が凍る。ヤバイ、地雷踏んだかな。

「へーえ。禁止しても行くの？なら、私たち看護師も何してでも止めるよ？それが琉嘉ちゃんのためならね」

こわっ。何してでもって、何するつもりですか。

そう言う堤さんが微笑む。氷の微笑だ。怖い。

「それでもいいの？」

いえいえ。そんな恐ろしい真似は出来ません。とりあえず、堤さん。あなたが怖いです。

私がそれを行動で示すと、やっと氷の微笑みは消え、普通の笑みへと変わる。そして、言う。

「とりあえず、先生や他の看護師の方たちと話し合ってから決めるから、今のところはまだ保留ね。でも、分かってるね？熱下がるまでは安静にしていること」

分かってますとも。これで馬鹿をやるものならどうなることか。間違いなく、精神的ダメージを受けますね。それは避けたいのではないとしますって。

そう思いながら私は毛布を掛ける。また、眠ろう。

次に目を覚ますのは昼食の時間かな。今回は食欲あるからちゃんと食べるよ。

だから、それまでは。ただただ、眠ろう。

ぐっすりと。深く。また、堕ちよう。

「琉嘉。琉嘉、起きろ。夕ご飯の時間だぞ」

あれ？お父さんの声だ。お父さんは仕事じゃないのかな。でも、

さつき夕ごはんって言った。なら、そうなのか。

私はそう思いながら目を開ける。目の前にいたのは、やはりお父さんだった。

「起きたか。もう夕方だ。食欲はあるか？」

「うん。てか、お父さん仕事は？」

「早退した。本当はお母さんが来るはずだったんだが、急な仕事が入ったらしくてな」

ああ、だからお父さんが来たのか。いつもはお母さんなのに今日はお父さんが来た理由はそこだったのか。

……あれ？夕ご飯ってさつきお父さん言ったよね。私、お昼起きなかったのかな。

「食べれるか？」

お父さんはそう言いながらお粥の入った器を私に渡す。大丈夫だよ、今回は。

ダルくはあるけれど、そこまでじゃない。

だから、私はお父さんからお粥の入った器を受け取り、はぐはぐと食べた。お腹が空いているから美味しい。

たとえば、それが味も素っ気も無い殆ど液体のお粥だとしてもだ。

「食欲はばっちりあったみたいだな。昼飯食べてないから余計お腹空いてただろう？」

食事を終えた私を見ながらお父さんは言う。あるって言ったじゃん。ていうか、やっぱり私お昼食べずに寝てたんだ…。

そう思いながら私はお父さんから薬を受け取った。やっぱり半端無いくらい数が増えている。

そして私はそれを飲み込み、またベッドに横になった。このペー
スなら、早く熱は下がるかな。

そして、私は眠る。深く。深く。体が沈みこむを感じる。
ノックの音が聞こえる。誰だ。でも、目は開けられない。眠い。

「琉嘉、起きてる?」

「ついさつき寝たよ。タイミングが悪かったな」

ああ、お母さんか。来たんだね。急な仕事、終わったのかな。

「これでも急いできたんだけどね。でも、ちょっと遅かったみたい
ね」

「ははっ。ついさつき薬を飲んで横になったよ。それから眠るのは
早かったな」

まあ、熱出しているとすぐに眠れるよね。とりあえず、私はそうだ
し。

「今日は、ありがとうね」

「いきなり何だ?」

私も気になる。いきなりお父さんにお礼を言うのは一体何なの?
そう思っていると、お母さんが口を開く。声が、優しい……………と
いうか、甘い。

「今日、琉嘉が熱出したって連絡あったとき、本当は私が行くはず
だったでしょう?それなのに、急な仕事が入った所為であなたに頼
んでしまったから……………」

「そのことか。そんなこと気にしなくてもいい。いつもお前がやっ
てるんだ。偶には俺がやってもいいさ」

「りっくん……………」

「理沙……………」

まさか、これはラブラブタイムですか？まさかのまさかで、それですか。

…一気に頭が覚めた。これは、止めたほうがいいでしょう。そう思いながら静かに体を起こす。

てか、りっくんってお父さんのことか？陸〓りく〓りっくん…かな。

「お父さん、お母さん。いちゃいちゃするのは帰ってからしてくれ
る？」

私がそれを言った途端、お父さんとお母さんが焦る。面白いくらい、焦る。

「お……………起きてたのか、琉嘉」

「……………起きてるのなら言っ頂戴」

二人の焦りが大分納まると同時に文句が飛んでくる。…悪いのはそっちでしょう。

「起きてたって言わないもん。あれはうとうととしてたんだもん。そんな時にお母さんたちがいちゃいちゃし出したんじゃないか」

せつかく眠りに堕ちかけてたのに、お母さんたちの所為でばっさり覚醒した。…面白くない。

また眠ろうとして眠れるかな。…無理そうだな。それほどまでに覚醒しきっている。

「ほ……………ほら。熱があるんだから早く寝なさい」

それは照れ隠しですか？お母さん。でも、無理だよ。ぼっち目
が覚めちゃったもの。

そんな状況で眠れるほど、私が器用だと思ってるのかな、お母さ
んは。

私っぱつちりと覚めた目でお母さんたちを見てみると、お母さん
たちは面白いくらい焦る。特にお父さんは顔を真っ赤にして別の場
所を見ている。

…顔を合わせられない模様。

「眠れなくても寝なさい。ほら、いつまでも起き上がってないで横
になりなさい」

「はい」

これ以上突くと後が怖そうなので大人しく従う。でも、眠れそう
にはないな。どうしよう。

ちなみに、お父さんはいつの間にか消えていた。…先に帰っちゃ
ったのかな。ちょっと寂しい。

「ねえ、お母さん」

「どうしたの？」

「お母さんって、どうしてお父さんと結婚したの？」

どうあがいても眠れそうになかったの、お父さんとお母さんの
馴れ初めを聞いてみることにした。…話してくれるかな。

それを聞いたお母さんの顔が真っ赤に染まる。…聞いちゃいけな
かったのか？

「お……………お母さん？大丈夫？聞いちゃダメだった？」

「そ……………そうね。悪いけど、聞かないで欲しいわ」

それはそれは。ますます気になる。今度伯母さんに会ったときに聞いてみよう。ひよっとしたら知ってるかもしれないし。

それにしても、さっきの衝撃は強烈だった。あれから半時間ほど時は流れているのだが、未だに睡魔は襲ってこない。このペースでは完全に熱が下がるまでに時間がかかりそうだ。

そう思いながら天井を眺めていると、突然、お母さんの手が額に置かれる。冷たくて気持ちがいい。

……いつの間に平静に戻ったのかは謎だが。

「やっぱりまだ熱高いわね」

だろうね。まだ体ダルいもん。頭が痛いのはかなり楽になったが、ダルいのはそのまま。

そう思っていると、お母さんは今度は手を額から私の目元まで下げる。お母さんの手で視界が塞がれて、真っ暗だ。

「まだ熱高いんだから早く寝ちゃいなさい。目の前が真っ暗だと寝やすいでしょう?」

「うん」

そして、ふと思うことがある。お母さん、明日は朝からいてくれるのかな。寝る前に聞いておかなくちゃ。

「ね、お母さん」

「どうしたの?」

「お母さん、明日は仕事?」

「いいえ。休み取ったわよ。だから、今日は病院に泊り込み」

と言うことは、ずっといてくれるのか。ならいい。安心した。明

日は一人つきりじゃない。

あれ？安心したら一気に眠たくなってきた。うとうとする。落ちる。落ちていく。今度こそ。

沈む。沈み込んでいく。深い場所へ。

「あらあら。あつという間に寝ちゃったわね」

お母さんが軽く笑いながら私を見て言う。

うん。だって、すっごく眠いんだ。眠たくて、眠たくて限界なんだよ。

朝。

「琉嘉、起きなさい。朝よ」

「んー、あと5分……」

ああ、もう朝か。まだ眠たいよ。もっと寝たいよ。

「もう堤さんいらしてるわよ。早く起きて熱を測りなさい」

「琉嘉ちゃん。もう朝だから起きてねー？」

もう堤さんが来てるのか。なら、起きなくちゃ。…でも眠い。瞼が重たい。

それでも、無理やり瞼をこじ開ける。どうせ、ご飯食べたらまた眠れるから。

「おはよう、琉嘉ちゃん」

「おはよー堤さんとおかーさん」

「おはよう、琉嘉」

私は朝の挨拶を交わしながら体温計を受け取り、脇に挟んだ。ちよつとくらいは下がってるだろうか。とりあえず、ダルい。

ピピピツと体温計が測定を終了を知らせる。結果はどうだろうか。

「どうだった？」

「38度6分」

「昨日の朝よりはマシかな。食欲はどう？」

「ある。お腹空いたー！」

そうなのだ。今回はこの間と違って食欲は普通なのだ。とにかく、お腹が空いた。早くご飯を食べたい。

私がそう答えると、堤さんは微笑んだ。

「そう。じゃあ、ご飯をしっかりと食べて、薬を飲んで安静にしててね」

「はい」

堤さんはそう言って去って行った。私はのんびりと食事の時間だ。

「火傷しないように気をつけて食べるのよ？」

「分かってるよお」

お母さんがものすごくありえないことを心配している。いくらお腹が空いてるからって、こんな熱いものを焦って食べませんで。

ちゃんと、冷やしながらゆっくり食べるに決まってるじゃないか。そしてご飯を食べたら薬を飲む。飲み終わるとすぐに横になるよ。お母さんに言われる。

「さ、薬を飲んだならさっさと寝ちゃいなさい。お母さんは琉嘉が寝てる間に朝ごはん食べてくるから」

「うん。おやすみー」

お母さん、朝ごはん何食べるんだろ。

私はそれを考えながら再び眠りに着いた。

次に目が覚めたのは、お昼ご飯の時間。起こされる前に自分で起きた。ああ、お腹が空いた。

「あら？目が覚めたのね。丁度お昼ご飯の時間よ」
「んー。お腹空いたー」

というか、何故眠っているだけでこんなにお腹が空くのだろう。謎だ。不思議だ。摩訶不思議。

人間の体ってホント謎なことが多いな。

私はそう思いながらのんびりと食事に手をつけた。……やっぱりお昼ご飯もお粥。味も素っ気もない、お粥。

…お腹空いた。

とりあえず、とつとつご飯を食べる。お粥だけど、お腹空いてるからしつかりと食べる。

「そついえば、お母さんはお昼ご飯どうするの？」

「朝から買ってきた。だから、お母さんも一緒に食べるわよ」

そう言われて見てみると、お母さんはおにぎりを手にしていた。

…美味しそう。

「…そんな目で見ても……あ、あげないわよ？」

「お母さんのおにぎり美味しそう」

「あげません。風邪ひいてる時はお粥でしょう？」

「だって、美味しそうだもん」

私が言つと、お母さんはニッコリと笑つて言った。なんだろう。その笑みが怖い。

「そう。ならお母さんまだ食べない。琉嘉が寝てる間に食べるわ」
「ええーっ!？」

「だって、お母さんが一緒に食べようとしたら琉嘉も食べたがつて、お粥を食べないでしょう?だから、琉嘉が寝たら食べます」

……………ズルイ。そう言われたらお粥を食べざるを得ないじゃないか。お粥以外も食べたい。お粥味も素っ気もないから嫌だ。

でも、結局はお粥以外に選択肢はない。だから、食べた。食べて、薬を飲んだ。後はまた寝なくては。

そう思い、再び横になる。横になると一気に体が沈んでいくような感覚に襲われる。ああ、堕ちる。

堕ちる。堕ちて行く。深い場所へ。

そして、夢を見る。その夢は、目が覚めると忘れている。

記憶は、曖昧。起きてしばらくはなんとなく覚えていても、時間が経つと忘れる。そんな夢。

目が、覚める。よく寝た感じはするが今は何時なのだろうか。

辺りを見回す。…お母さんがいない。もう、帰ったのかな。そんな時間なのかな。なんだか、寂しい。

ガラスという音を立て、病室の扉が開く。私は咄嗟にそちらへ顔を向けた。そこに居たのは、お母さんだった。

「あら?目が覚めたのね。調子はどう?」

お母さん。よかった。まだいた。

そう思つと同時に、頬を熱いものが流れた。それは、涙だった。

「え!?!どうしたの?琉嘉。大丈夫?」

私の涙を見たお母さんが焦る。ていうか、私はどうして泣いているんだ。分からない。どうしてだろう。

いないと思っていたお母さんを見て、涙が流れた。

ああ、そうか。安心したからだ。お母さんがいなくて不安だったんだ、私は。だから、涙が流れたのか。

「琉嘉？」

お母さんは私の頬を流れる涙を拭いながら私を見つめる。

「どうしたの？大丈夫？」

声を出して答えることの出来ない私は小さく頷いた。それを見たお母さんの表情が一気に落ち着く。

そして、手を私の額に当てた。

「うーん。ちょっと熱上がったかな？」

だから涙もろくなったのかな。頭がボーっとしてる。頭が働かない。ダルい。

何だか、また眠たくなってきた。眠って、いいよね。すっごく眠たいんだ。瞼が重い。もう、ダメだ。

そして私は眠りに堕ちた。

* * * *

「おや。今度はどうしたの？琉嘉」

気が付くと見慣れた世界。そう、琉衣の気付きあげた世界だ。

「久しぶり、琉衣」

「うん。琉嘉が日本に戻ってから初めてだね。で、どうした？」

「風邪ひいちゃって寝てばかりの生活だから夢で喋りたくなった」

「ああ。また風邪ひいたか」

琉衣はそう言って笑う。

あっはっはっはっは。ひきたくてひいてるんじゃないもん。ひきたい時はひけないもん。

そうやって軽く拗ねていると、琉衣が宥めにやってきた。

「ゴメンゴメン。ほら、機嫌なおして。ね？」

琉衣はそう言って私の頭を撫でる。琉衣も私の頭を撫でるか。

でも、それが気持ちいいから機嫌をなおす。…私って結構単純だな。

「で、一体何を話しに来たのかな？今回はこっちのほうが時間の流れが遅いからゆっくり話せるよ」

「時間の流れ…変わるの？」

私が問うと、琉衣はあっさりとそうだと答えた。知らなかったよ。

「大体、琉嘉が初めて来た時は現世と同じくらい。この間まではあつちが早かった。で、今回は逆。はい、おっけい？」

「おっけい」

私が答えると、琉衣は優しく微笑んだ。

「で、何について話すつもりなのかな？琉嘉ちゃんは」

「琉衣のこと」

「僕のこと？って、何を話すのさ」

「だから、琉衣のことでしょう」

それを聞いた琉衣が考える表情をする。そんな難しいお題だったかな。

単純に、琉衣が私の双子の姉であること以外、琉衣のことを知らないから聞いたのだが、琉衣には難しいのかな。

「そ……そんなに答えにくい？」

「んー。いや、どう言えばいいのかと思ってさ」

お題的にはいいのか。とりあえず、言いたいことがまとまれば話してくれるかな。私はそう思い、のんびりと待つことにした。

幸い、時間は有り余っているのだから。

そうしてしばらく待っていると、ずっと下を向いて考えていた琉衣が顔を上げる。話がまとまったかな。

「よし。んじゃま、僕の話を小さい頃から行こうか」

「待ってましたー」

そうして、琉衣は話し始める。

「まず、僕が生まれたのは君と同じ日だ。当たり前だけどね。そして、その二日後、死んだ。それはこの間話したね？」

私は頷く。

「そして死んだ後、未熟児で、未だ命の危険の高い妹に私は憑いた。いや、憑いたというよりは、融合した感じかな。でも、それで、君

は生きることが出来た」

「…どうして？」

「双子って、もともと一つのものが二つに割れて起こる現象だからだから、僕が君の中に入ること、半分だったものを一つに戻したんだ」

それで、私は生きて琉衣は死んだ。琉衣は、そんな昔から私を守っていてくれたのか。

「それで、しばらくは僕も知らないんだ。君が小学校の四年生くらいの時に、やっと僕って言う自覚が出来たから。それまでは、全く分からない。多分、ずっと眠っているような感じだったんだと思う」

……四年生の頃から私の行動、琉衣さんに筒抜けですか。ちょっとそれは嫌なんです。でも、それを今更言ったところで意味はない。

続けてもらおう。

「それからずっと、君を見てきた。小学校の卒業式。中学の入学式。そして、君が倒れたこと。あの時はびっくりしたよ」

…あの時のことも知られてましたか。まあ、あれは仕方ないということで。いきなりだったし、その前にも何もなかったんだしさ。何かしら前兆があつて黙ってたんなら大人しく言われるがままになるけど、無かったんだから大人しくはしませんよ。

「君が眠っている間も、僕は頑張ったよ。君が早く目を覚ますように、君の中からずっと声を掛け続けた。…聞こえてたかな？」

「……………」

「その反応は、聞こえていなかったか、覚えていないみたいだね」

その通りです。ゴメンナサイ。一切記憶にございません。ていうか、あのときって、眠っていたといつても、夢も見えていないからよく分からないんだ。

「でも、君は目を覚ました。それで僕は一安心したよ。それから後も、ずっと見てきた。君の笑っているのも、泣いているのも、ね」

ちよっ！？それはちよっと恥ずかしいんですが……。そう思いながら目線はずしてしていると、琉衣はわざとか、顔を私の前に持つてくる。

……わざとだよね。

「顔真つ赤だよ。琉嘉は可愛いねえ。あーもう、いい子いい子」

「……………」

からかわれてる。絶対にからかわれてる。私は琉衣の玩具じゃないぞ。

でも、反論できない。何を言えばいいのか分からない。というか、何か言ったらまたそれで遊ばれそうな気がする。

「玲君と出会ったのも知ってるよ。あの時の玲君は気障だった。弱冠16にしてあの台詞を吐くとはね」

「あ、それ私も思う。玲君って、自然と齒の浮くような台詞言うよね」

「うん。あの時は玲君を殴りたいと思ったからね。琉嘉を誑かすな、って」

おや。琉衣の周りに黒雲が立ち込めている。玲君への憤りか。ていうか、誑かすって何？

「あれ？琉嘉は誑かすの意味が分からないのか。誑かすっていうのはね、人を欺いて惑わせることだよ」

琉衣は一度黒雲を消して、説明をくれる。だが、次の瞬間、さつきとは桁の違う量の黒雲が再度立ち込めてきた。

「つまりね、あの時の僕は、玲君が君を騙して遊ぼうとしているようにしか感じられなかったのさ。だから、本気で殴りたかった。思い切り、盛大にね。……………今からでもいいから、殴ってこようか

……………鳩尾を」

「いや、止めてよ」

ニツコリと笑いながら怖いこと言わないで欲しいな。

琉衣の周りにある黒雲は未だ消えず、残っている。つまり、まだ危ないことを考えているんでしょうかね、琉衣は。

別に、私は誑かされてるつもりは無いんだけどな。それに、そういうことがあつたら本谷先生に相談すれば進言してくれるだろうし。琉衣にそのことを伝えると、琉衣は「おお。その手があつたか」といって手を打つ。そして、同時に黒雲も消え去った。

「琉嘉。玲君に何かされたらすぐに僕か本谷先生に言いなさい。ちよつとしたことでもすぐに言うんだよ!？」

「はい」

私は感情のこもらない声で返事を言い放つ。その口調に琉衣は不満そうだが、一応返事したことであまりは安心したらしい。

「で、その翌日に君は遊園地へ行った。それも見てたけど、本当に楽しそうにしてたね。見てる僕も楽しい気持ちになれたよ」

「なんか、懐かしい感じがする。まだ半年くらいしか経ってないのにな」

「そうだね。で、その翌日、君は熱を出した。その後、僕の世界に來たよね。君は熱を出したのを隠そうと必死だった」

……………本当に懐かしい過去だ。忘れた記憶までもばっちり思い出される。そんなこと、忘れてしまおうよ。

でも、琉衣はきつと忘れないのだろう。ニコニコと微笑みながら私を見続ける。

「あの時も大変だったねえ。君は食欲無いからってご飯まともに食べないしさ。おかげで僕の体力まで落ちて、しばらくは眠り続けなきゃだったよ」

「そうなの？」
「うん。それで、僕はずっと眠り続けた。そして、……………気が付いたら君は家出していた」

つまり、琉衣は私が一度盛大に体調を崩してから、半年は眠り続けていたと言うことか。

「気が付いたときはパニック状態に陥るかと思ったよ。君の病気も随分とひどくなっていたしね。眠っている間にあれだけ進行していることに驚き、戸惑った。だから、無理やり君を僕の世界に引き込んだ」

そう言う琉衣の表情が悲しげだ。仕方が無い。私が悪いんだ。でも、その顔を見ておくのも、辛い。

そうしていると、琉衣がその表情を止め、にっこりを笑う。…気が付かれたかな。

「で、その時に初めて僕の正体を明かしたね。忘れてもいいと言ったのに、君は泣きながら忘れないと言ってくれた。あの時は嬉しかったな」

「え……………あ……………うううう」

「何もそんなに唸らなくてもいいじゃないか。嬉しかったよ、本当に」

照れてるんだよ。そんなしつかりと目を見て言われると照れちゃうんだ。琉衣が嬉しかったというのは私も嬉しいけどさ。

「……………おっと。さすがにこれ以上はヤバイかな。琉嘉。そろそろ戻りなさい」

「え？もうそんなに時間経ったの？」

「うん。そろそろ起きなきゃダメだよ、琉嘉。僕のためにも、ご飯はしっかりと食べて体力つけててね」

「了解。てか、今回は食欲あるから大丈夫だよん」

私が言うと、琉衣は微笑んだ。……………何だか意地悪そうな微笑みだ。

「さて、扉は何処にあるか覚えてるかな？」

「……………覚えてない……………デス」

さっきの意地悪そうな微笑みはコレか。くそう。琉衣にも遊ばれてる。悔しい。悔しすぎるぜい。

「あはは。やっぱりそうか。さ、案内するから行くっ」

「うー。琉衣もいじめっ子だあ……………」

「だって、琉嘉の反応可愛いんだもん」

やっぱり琉衣もお母さんの子だ。私やお兄ちゃんと同じ血を引いているだけある。お母さんとそっくりで人の反応を楽しんでいる。ていうか、そうやって遊ばれるのはいつも私ですか。お兄ちゃんもからかい対象に入れてよ。

「ほら、着いたよ。さつさとお帰り？」

「うん。ありがとね、琉衣」

さっきの感情は全て水に流し、礼を言う。そうすると、琉衣は優しく微笑んだ。いつもここうして笑っていればいいのに。

私はそう思いながら扉を潜る。起きたら何時になっているんだろうか。

* * * *

先生

「琉嘉。琉嘉。起きなさい、もうすぐ夕飯の時間よ」

「んあ?」

お母さんの呼ぶ声で目が覚める。もうそんなに時間が経っていたのか。……というか、相変わらずいいタイミングで起こしてくれるな、琉衣は。

「調子はどう?食欲はある?」

そう言われてふと考える。随分と頭がスッキリしているような気がする。今までは頭がボーっとしていたのに、それが無い。

「琉嘉?」

「何か、すっごい頭がスッキリしてる」

私が言つと、お母さんは目を丸くして、私の額に手を当てる。

「あら。熱下がってるわね。まだ完全に下がってるわけじゃなさそうだけど、大分下がってるわ。よかったわね、琉嘉」

「うん」

ニッコリ笑って答えると、お母さんもニッコリ笑った。そして、問うた。

「なら、食欲はあるのかしら」

「うん。お腹空いたあ」

私が言つと同時に、堤さんが夕飯を持ってやってくる。二オイからして、またお粥の模様。

「あれ？琉嘉ちゃんが起きてるね。調子はどう？」

「結構いいよー」

それを聞いた堤さんは微笑んで体温計を差し出す。測れということですね。はい、測りますとも。

結果はまずまずだった。

「37度4分。もうちょっとー」

「あらあら。随分と下がったわね。ずっと寝てたのがよかったのかな？」

「かな」

そう言つて私たちは微笑んだ。そして、私は夕飯の時間。夕飯はやっぱり予想通り、お粥だった。普通の白いご飯が食べたい。

試しに堤さんに言つてみると、額を指で軽く突かれた。

「熱が完全に下がるまではお預け」

何のいじめですか。熱下がつても最初はまだお粥じゃないか。白いご飯が食べたい。噛み応えのある何かを食べたい。……面白くない。

そう思いつつも、お粥を口に入れる。はあ、軟らかい。軟らかすぎる。

そして全て食べ終えて薬を飲むと、しばらく黙つていたお母さんが口を開いた。何だろう。

「さ、薬飲んだなら早く寝ちゃいなさい。お母さん、今日は帰るけ

ど、ちゃんと寝てるのよ？」

「帰っちゃうの!?!」

「明日は仕事なの。さすがに2日連続は休めなくてね」

そっか。そうだよ。さすがに2日連続は無理か。そう思っていると、お母さんが咳く。なんだか雰囲気怖い。

「後輩がもっと使えれば2日連続で休んでも問題無かったのに」「え?」

「うっん。なんでもないわ。琉嘉は気にしなくてもいいのよ」

私が思わず聞き返すと、お母さんはすぐに表情を戻した。

でも、聞こえちゃったよ。後輩さんは使えないんですかい。気になりますともさ。

でもまあ、聞かなかったことにしよう。詳しく聞いたところで、どうせ理解できないんだから。

「さ、早く横になって」

お母さんはそう言って私を横にし、毛布を掛ける。でも、まだ眠たくない。熱が大分下がってきたからかな。

でも、とりあえず寝たふりでもしなきゃ、お母さんが安心して帰れないよね。だから、目を瞑る。

そして少しすると、ごくごくそと音が聞こえてきた。お母さんが帰り支度をしているのだろう。

その音が止んだころ、額に手が置かれる。お母さんの手だ。

「じゃあ、帰るわね、琉嘉。明日は仕事が終わったら来るから」

寝てないのに気付かれてたかな。でも、いいよね。大分熱下がっ

てたんだから、文句は言われないうでしよう。

そうしている間に、お母さんは帰って行ったらしい。病室は沈黙に包まれていた。それが嫌で、私は起き上がる。ついでにトイレに行くことにした。

ベッドから降りると、随分と体がフラフラとする。熱を出すときも体いつもこうなるが、やっぱりきつい。また、壁に寄りかかりながらトイレへ行き、戻ってくることもなかった。

戻ってくる頃には、疲れて軽く息が切れていた。飲み物が欲しい。そう思っただけを見回すと、チョココンと、スポーツドリンクのペットボトルが3本ほど置かれている。近付いて見てみると、書置きのようなものが合った。

『このジュースは玲斗君が持ってきてくれました。重々に感謝して頂きなさい。お母さん』とのこと。

なるほど。そういえば以前熱を出した時もスポドリをくれたっけ。玲君は気が利くなあ。

私は早速そのうちの1本を開けて飲んだ。美味しい。疲れた体に水分が行き渡る。

その後、私はベッドに横になった。不思議と、すぐに睡魔が襲ってくる。

そのまま、堕ちた。

朝。目を覚ますと、何か落ちる音が聞こえる。今日は、雨か。

そう思いながら窓の外を眺めると、やはり雨が降っていた。そのせいか室内はどんよりと暗い。

そうしてずっと外を眺めていると、病室の扉が開かれた。堤さんが来たのだ。

「あれ？ 琉嘉ちゃん起きてる。よく眠れた？」

「おはよ、堤さん。寝すぎってくらい寝たよ」

だから、今朝は早いうちからスッキリと目を覚ましたんだ。

「調子はどうか？」

「かなりいい。もう熱下がりがきつたんじゃないかな」

「そう。じゃ、測ってね」

私は体温計を受け取り、脇に挟む。さて、どうでしょうね。調子はかなりいいから、仮に下がりがきつていなくても結構平熱に近づいていると思うのだが。

ピュピュッ。

測定終了の音が鳴り、私は結果を確認する。

「どうだった？」

「36度5分。平熱平熱」

「でも、今日1日はまだ安静にしててね。まあ、雨降ってるから屋上には行けないし……大丈夫だとは思っけど」

そう言って堤さんは私の頭に手を置く。

はあ、確かに今日は雨だから屋上へは行けない。さすがに雨の中屋上へ行く勇氣は無い。

「それと、さっきお母さんから電話があって、琉嘉ちゃんにこう伝えてくれて言われたの」

「何？」

「学校の先生が今日病院に来るって。昨日帰ってから連絡があったらしいよ」

……お久しぶりです、本谷先生。何言われるか分からない人が今日来るんですね。

「さ、朝ごはん、早く食べてね。冷えちゃうから」

そう言われて渡された朝ごはんは、やっぱりお粥でした。そろそろ普通にご飯にしてよ。

そう思いながらも、仕方がないのでお粥を食べる。お昼からは普通のご飯になるかな。なつて欲しい。期待して待つておこう。

そして、今日は玲君を呼んでおかなくては。

そう思った私は、ご飯を食べて薬を飲むとすぐに玲君の病室へ向かった。……………玲君の病室に行くのは初めてだ。

コンコンと病室の扉をノックすると、中から玲君ではない男性が「どーぞ」と言う。とりあえず、扉を開けた。

扉を開けて部屋に入ると、中の人間全員の視線が私に集中する。

…恥ずかしい。

そしてそれで、目的の人間は私に気がついてくれた。

「琉嘉。どうしたんだ？俺の病室に来るなんて」

「おー、玲。知り合いかい？こんな可愛いコと」

玲君は私に気が付くとすぐに私のところへとやってくる。そして、それを同室の男性が茶々を入れる。

「シン。五月蠅い。彼女は2つ隣の病室の子だ。俺の友達。変なちよっかい出すなよ？」

茶々を入れた男性の名前はシンという模様。というか、玲君は4人部屋だったのか。まあ、満員と言うわけではなく、一つはベッドが空いているようだ。

「琉嘉。俺の病室じゃ五月蠅いから琉嘉の病室へ行こう。そっちのほうで静かに話せる」

「あ……うん」

そして私たちは移動する。病室に着くと、玲君は私にベッドに横になるよう促す。もう大丈夫なのに。

「でも、此処で無茶したらまたぶり返すだろ？」

玲君に大丈夫だと言うとそう返される。…確かにそうだけども。そんなだけども。横になってると話しづらいじゃなか。

「で、今日はどうしたんだ？」

私がそう思っていると、玲君はやさしく声をかけてくる。そして、私の頭を軽く撫でた。

気持ちいいな。

でも、その気持ちよさに負けて内容を伝えられなかった、と言うことは無しにしないで。

私は、口を開く。

「今日、本谷先生がくるらしいから、玲君にも同席して欲しいんだ」

「……………拒否権は？」

「無いよ。前、李旺にいと喧嘩した時に約束したよね？」

私が言うと、玲君は視線をずらす。…思い出せましたか。

「だって、私さ、いきなりいなくなっただでしょ？だから、何を言われるか分からなくて怖いんだ。だから、玲君に付いて欲しい。ダメ？」

「うっ……………」

涙目で訴えてみると、玲君がたじろぐ。効いているようだ。そのまま了承してくれると嬉しい。

「わ……………分かった」

効いた。

「で、何時ごろ来るんだ？いつも通りか？」

「分かんない。そこまで聞いてないもん。でも、いつも通りじゃないかな」

「そか。なら、その時間帯にまた来るよ。今日はレポートも書かなきゃだから」

そういえば、私が病室を訪れた時に何か書いていたような気がする。それはレポートだったのか。

……………邪魔しちゃったな。悪かった。

「邪魔しちゃったね……………。ゴメンね、玲君」

「いや、どうせもうすぐ終わるから気にしなくてもいいよ」

玲君はそう言って自分の病室へ戻っていく。また暇になった。

仕方ない。本でも読もう。私はそう思い、本を取り出す。そして、読んだ。時間を忘れるほどに、読書に没頭した。

気が付いたらすでに昼食の時間だったと感じるほどに。

そして、お昼。

「はい、琉嘉ちゃん。熱測ってね」

お昼ご飯を持ってきた堤さんにご飯の前に体温計を渡される。測りますよ。測りますよとま。

どうせ、平熱だ。もう治っているはずだ。そう思いながら体温計を脇に挟んだ。

「平熱だ」

「何度だったのかな？」

「36度8分。もう大丈夫だよな？」

「そうだね。でも、まだ無茶したらダメだよ？」

分かってますとも。これで無茶して夜もお粥を食べなきゃいけないようなことにするつもりは一切ありません。もうお粥は嫌だ。

ちなみに、お昼ご飯はまだ軟らかめだけど大体は普通のご飯になっていた。ヤツタね。

そしてご飯を食べてしばらくすると、玲君がやってくる。レポーターは終わったのかな。

「や。もう熱下がってた？」

「うん。もう平熱だったよ」

私がニツコリ笑って答えると、玲君も笑う。そして、その後ろから人が現れる。……誰？

そう思っていると、その後ろから現れた人が私の手を握って挨拶をしてきた。

「初めまして。俺は鳳叶^{オトリ}。カナイ^{カナイ}って呼んで」

「え？あ………初めまして。片桐琉嘉です」

私が何も理解できない状態で一応紹介を返すと、いきなり抱きしめられる。………これは、どうすればいいの？

「うっわー。ちょっとこの子可愛いよ玲斗。抱きしめずにはいられ

ない」

「止める。離せ。琉嘉が困ってる」

そんな状態で焦っていると、玲君がカナイ君を止めてくれる。
…助かった。

「ゴメンな、琉嘉。いきなり連れて来て」

「それはいいけど。……この人何？」

「何って、その表現ひどいよ琉嘉ちゃん」

「俺の同室のヤツ。さつきシンは見たよな？もう一人がこのカナイなんだ」

「ああ。成程。で、どうして連れてきたの？」

私が問うと、玲君はカナイ君を冷めた目で見る。何があったんだろう。

ちなみに、カナイ君は「無視しないでよ」とか「あの、ちょっと？」とか言っている。ま、しばらくは放っておこう。

「さつき、琉嘉が俺の病室に来ただろう？カナイ、さつきは寝てたんだ。で、それを知らなかったんだけど、シンがカナイに言っちゃって……」

「何を？」

「2つ隣の病室に自分と同じ年の子がいるってこと。つまり、琉嘉のこと」

カナイ君、同じ年だったんだ。

「それで、俺が琉嘉の病室に行くって言ったら自分も連れて行けっ
てしがみつかれて、仕方なく連れて来た。琉嘉が嫌なら追い出す
けど」

玲君がそれを言った途端、カナイ君が潤んだ瞳でこちらを見始めた。…若干ウザい。
追い出すか。

「えー？琉嘉ちゃん、俺を追い出すの？せつかく遊びに来たのに」
「あなたは呼んでません。帰ってください」

「ヤだ。せつかく来たもん。てかさ、同い年なんだから敬語止めてよ」

「初対面の人にいきなりため口聞けるほど私の精神頑丈に出来てないんで」

「そんなの関係ないよう。普通に話そ」
「嫌だ。出てって。私は玲君と話すから」

ホント、何かむかつく喋り方してるなあ。一発殴ってもいいかな。カナイ君は、はつきりと出て行くように言っても動かない。やっぱり、殴らないと動かないのかな。

「そんな言わないでさーあ」
「ヤだ！何か鳥肌立つもん！」

しつこいヤツめ。本当に鳥肌が立つてきたよ。よし、殴ろう。そう思って手を強く握った途端、目の前に玲君の腕が現れる。
傍観を決め込んでいたようだが撤回したらしい

「カナイ。いい加減にしろ。琉嘉は嫌がってるだろう」
「だって、仲良くしたいもん」
「なら方法を考える。こんな、琉嘉が嫌がるような方法を取るな」

玲君はそう言ってカナイ君…もといカナイの頭を軽く叩く。ペシ

つと言ついい音が聞こえた。

叩かれたカナイは、叩かれた場所を手でさする。

「いってー。何するんだ玲斗」

「正義の鉄槌」

「何が鉄槌だ、この独占欲丸出し男」

カナイがそう言った途端、玲君は再びカナイの頭を叩いた。しかもさつきより強めに。

「いいから病室へ戻れ、カナイ。これ以上いたら琉嘉がまた体調崩しかねない」

「え！？琉嘉ちゃん体調崩してたの？大丈夫！？」

「いいから早く戻れ。これ以上いるつもりなら、何回でも叩かれる覚悟をしておけよ」

そこまで言われて漸くカナイは動き出す。やっと静かになった。

「ゴメンな、琉嘉。迷惑だっただろ？カナイ」

「あーうん。否定は出来ないね。でも、玲君のせいじゃないよ。カナイが全部悪いから」

「そか。ありがとな、琉嘉」

玲君の謝罪に私が真実を述べると、玲君に礼を言われる。別に言わなくてもいいのに。玲君はそういうところ、細かい。

「そういえば、玲君。一つ聞いてもいい？」

「ん？何だ？」

「カナイの言ってた独占欲って、どういうこと？何に対する独占欲なの？」

私が質問すると、玲君が固まる。答えにくい質問だったのかな。でも、気になるんだよね。

で、こういうのって気になったらそれが解決するまでスッキリしないから嫌なんだ。だから、時間がかかってでも答えてもらいましょう。

「えっと……………その……………」
「なあに？」

そうやって言いどもる玲君の顔は真っ赤だ。どうしたんだろう。風邪、うつしちゃったのかな。

玲君にそう聞いてみると、すごい勢いで首を横に振る。違うことは嬉しいけれど、本当に大丈夫なのだろうか。

「だから、な。俺は、琉嘉に、他の人とあまり仲良くして欲しくないんだ」
「は？」

真っ赤な顔で漸く口を開いた玲君。だけど、その内容は私には理解できなかつた。どうということだ？

そう思つて玲君に尋ねてみるものの、玲君は答えてくれない。何度聞いても「この話はコレで終わらせる」と言つて話してくれない。だから、どういうことなんだろう。分からない。今日先生に聞けたら聞いてみよう。

そしてしばらくはどうでもいいような話をして、いつもの時間になると、病室の扉がノックされた。

開かれた扉の前に立っているのは、やはり先生だった。

「お久しぶりですね、片桐さん。体調は如何ですか？」

「お……………お久しぶりデス、先生」

病室へ入ってきた先生は、ニッコリ笑って私に挨拶をする。ニッコリ笑っているようだが、怒っているだろうか。怒っていないのだろうか。

目もちゃんと笑っているように見えるが、実は怒っていたりするのではないだろうか。

「何をそんなに怯えているんですか？片桐さん。声が震えていますよ」

バレてる。

「片桐さん？大丈夫ですか？風邪をひいたと伺っていましたが、まだ調子は悪いですか？」

「え？あ、いや。風邪は治りました。大丈夫です」

「そうですか。それはよかったです」

先生の言葉に反応できなかった私を、先生は心配そうな瞳で見つめる。それに大丈夫だと答えると、先生は安堵の息を吐いた。

さっきまで心配で硬くなっていた表情が、安心して柔らかい笑みに変わる。

……………怒ってはいなさそうだ。でも、気になるので聞いてみることにする。

「せ……………先生、怒ってますか？」

「はい？」

先生の目がきれいに丸くなる。ついでに玲君を見ると、玲君の目も丸くなっていた。

それから少しして、漸く元に戻ったらしい先生が問う。

「片桐さん。私が怒るようなことをしたんですか？」

「え……あ、その……。いきなり……いなくなっちゃった……。カラ……」

「ああ、そのことですか」

消え入るような声で私が言うと、先生が漸く思い当たったようであらうで、軽く手を叩く。

「怒ってはいませんよ。ただ、心配はしましたが」

「す……すみません」

「これからはあんなことしないでくださいね。片桐さんのお母さんから聞いてびっくりしましたから」

「ごめんなさい」

蚊の鳴くような声とはこのことか。声を出したくてもか細い声しか出せない。

そんな私の頭を、撫でる手が二つ。そう、玲君と先生だ。二人が同時に私の頭を撫でたのだ。

「怒ってはいませんから大丈夫ですよ。だから、前みたいに元気な片桐さんに戻ってください」

「姉ちゃんがそう言ってるから大丈夫だよ、琉嘉。だから元気出せ。さつきカナイと喧嘩した時くらいの元気を出すんだ」

「おや。片桐さんが誰かに喧嘩を売ったのですか？」

カナイと先生は違うもん。ていうか、先生が喰いついた。

「んー。それもそだな。でも、カナイが琉嘉を怒らせたからだな、

喧嘩の原因は」

「カナイといえば、玲。あなたの同室の子でしたよね？確か隣のクラスの」

隣のクラス？ていうことは、同じ学校だったのか。……………って、ええ！?!?!?!?!?

「カナイ、同じ学校なんですか!?!」

「はい。去年と一昨年、同じクラスでしたよ」

「あれ？カナイ、琉嘉と同じ学校だったのか。……………ああ、だから仲良くしたかったんじゃないか？」

「どーゆーことさ？」

「去年と一昨年、同じクラスだったにもかかわらずまともに会ったことの無い元クラスメートと話してみたかったんだろ」

……………納得できない。だからって、あんなウザい真似してもいいのか。

玲君に愚痴混じりで訴えると「それはダメだな」とあっさり同意してくれる。そして、またも私の頭を撫でた。

「さて、片桐さんも落ち着いたことですし、溜まっているノートの説明をしましょうか。玲、逃げないように」

さり気無く逃げようとしていた玲君を、先生は言葉で制する。そう言われると玲君は逃げられない。

「たくさん溜まってるから大変ですよ。途中で具合が悪くなったら言ってくださいね」

「はい」

そうして、私がドイツにいる間にかなり進んだノートの説明が始まる。……しばらくやらないと忘れるものだね。分かんない。

「大丈夫か？ 琉嘉」

「れーくん。もうダメ分かんないー」

「おや？ どこが分からないのです？ 説明しますよ」

「全体的に忘れちゃってますー」

玲君に弱音を吐く私に、先生が分からない場所が何処か問いかけるが、何処とは言い切れない。大体が忘れていたため分からないのだ。

そんな頭に、ゆっくりゆっくりとまた詰め込む。右から入って左に抜けないよう、慎重に詰め込んだ。

「今日はこの辺で終わらせましょうか。片桐さんも病み上がりで辛いでしょう？」

「わーい。疲れましたー」

「おやおや。大丈夫ですか？ 片桐さん。……玲」

先生は私のことを気かけると、静かに玲君の名を呼んだ。玲君がビクツと体を震わせる。

「何をビクついているんですか、玲」

「いや、姉ちゃんにそうやって名前を呼ばれると、昔の記憶上体が勝手にビクつくんだ。で、何だ？」

「ああ成程。玲。奢ってあげますから何か飲み物を買ってきなさい」

先生が言うと、玲君があからさまに嫌そうな顔をする。

「俺はパシリか？ 姉ちゃんが行けばいいだろう」

「私は片桐さんと話しがあるんです。あなたは暇でしょうっ？だから、行って来なさい」

「命令形かよ。ま、いいけどさ」

玲君はブツブツ言いながらも、先生から財布を受け取り飲み物を買いに動く。玲君がいなくなったのを確認した先生は、私のほうを向いた。

「さて片桐さん。我が校の3年生の一大イベントと言えば、何なのが分かりますか？」

「……………受験？」

「違います」

……………即答はちょっと精神的に辛かったな。いきなり刺されたような感じだ。

その後も私は考えたものの分からず、先生に答えを聞くことにした。

「おや？片桐兄に聞いていませんか？修学旅行ですよ」

修学旅行

「修学旅行……………」

「ええ。修学旅行です。今年は長崎です。片桐さんはどうしますか？」

「ふえっ!？」

いやいや。そんないきなり聞かれても困ります。そういうのはまずお母さんや由里先生たちと相談してから決めなきゃいけないでしょう。

先生にそのことを伝えると、意外とあっさりとした答えが返ってきた。

「お母さんや病院の先生にはもう話を通してあります。片桐さん、あなたが行きたいのなら行っても構わないそうですよ?ただ、病院の先生が同伴するカタチでならね」

いつの間に。ていうか、そういう話しがあったのなら私にも教えて欲しかった。いきなり知らされるのはちょっときつい。

「時期は秋ですから、そこまで辛いと言うことは無いと思いますが……………」
「少し、考えてみてもいいですか?」

「ええ。ですが、早めにお返事いただけると嬉しいです。班編成の問題などもありますから」

「分かりました」

そうしている間に玲君が戻ってくる。手にはコーヒーが2本と、ジュースが1本。そして、財布を脇に挟んでいた。

「ほい、琉嘉にはジュース」

「あ、ありがと。玲君」

「姉ちゃんはブラックでよかったんだろ？」

「はい。お疲れ様でした、玲」

玲君は確認をしながら飲み物を手渡していった。私は貰ったジュースを開けて飲んだ。スッキリする。

「そういえば、玲。レポートは大丈夫ですか？」

「今朝終わらせた。姉ちゃんの手を借りる必要性は皆無だ」

「おやおや。冷たい言い方ですねえ。そういう男は嫌われますよ。

ねえ、片桐さん？」

「ふえっ!？」

先生は玲君を捕獲してレポートの話をする。そういえば、今朝行った時に書いてたっけ。無事に終わったのかあ。よかった。

と、思っているときいきなり先生に話しを振られた。どう反応すればいいのか分からなくて焦る。

「姉ちゃん！琉嘉を困らせるな」

「玲は本当に片桐さんのことが好きですねえ」

先生が言うと、その瞬間、玲君の顔は爆発的に真っ赤に染まる。

そんな玲君を、先生は楽しそうな目で見ていた。

相変わらず先生は玲君をオモチャとして扱っているようだ。

「姉ちゃん！そういうことを琉嘉の前で言つな！」

「どうしてです？玲は友達として片桐さんのことが好きなのでしょ

うっ？」

「……………っ!！」

先生が言った途端、玲君の視線が此方から別の場所へ外れる。普通に先生の言ったとおりだろうに、どうしてそんな反応をするのだろうか。

男の子って謎なことがいっぱいだ。

先生が来る前のカナイが言った独占欲のことも謎だけど、その玲君の反応も謎。気になるなあ。

「先生。一つ聞いてもいいですか？」

「どうしました？」

さっきまで玲君を弄って遊んでいた先生だが、私が声をかけるとすぐに玲君遊びを止め、此方を向く。

「今日カナイが来て玲君に言ってたんですけど、玲君の独占欲って何ですか？」

私が言つと、先生は意地の悪そうな笑みを浮かべ、玲君を見た。

……………絶対楽しんでる。

正反対に、玲君は顔をまた真っ赤にしていた。

「お、俺、病室戻る！じゃな、琉嘉。また明日来るからっ！！」

玲君は急いで言つて、急いで病室を出て行った。……………どうしたんだろう。

「玲の行動は気にしなくてもいいですよ。で、独占欲の話でしたよね」

「あ、はい」

「簡単な話ですよ。玲は今まであまり友達がいませんでしたから

ね。だから、せつかく出来たお友達の片桐さんを他の人に取られたくないんです」

「どういうことですか？」

「片桐さんと鳳君が仲良く話しているのを見てそんな感情に駆られたんでしょね。このままだと片桐さんを鳳君に取られてしまつと」

意味が分からない。どうして、取られると言う話しになるんだ。

「それが人間の感情の面白いところですよ。自分では自覚が無いのにそんな行動をとつてしまふ。そしてそれを他人に突っ込まれたらイライラするんです。大方、鳳君に突っ込まれたのでしょうか？」

私は静かに頷いた。すると、先生は手を口にあて、笑つた。

「で、その独占欲の話しを玲に聞きませんでしたか？片桐さん」

「聞きました」

「やはり。玲はその感情を認めたくないのにその張本人である片桐さんに聞かれて、答えられなかつたんです。で、その説明を私が片桐さんにするに於いて、それを聞きたくないから玲は逃げた。そういうことですよ」

人間の感情つて複雑なんだな。私は真剣にそう思った。

そして、先生は軽く笑いながら私に言った。

「片桐さん。この話し、玲にはしないで上げてくださいね。言つたら多分、また顔を真っ赤にして照れますから」

よく分からないけど、一応返事しておく。それが分かるようになるにはどのくらいの時間がかかるだろうか。

私の返事を確認した先生は、微笑みながら立ち上がった。もう帰

るのだろうか。

「さて、玲を捕まえてきましようか」

「……………」

遊び足りなかったんですね、先生。でも、今日はもう止めましょう。止めてあげて下さい。玲君の病室に行ったらもれなくカナイというオマケが付いて来かねないから。

先生にそう言つと、先生はそれなら、とまた椅子に座る。

そういえば、カナイは修学旅行はどうなるのだろう。

「鳳君は来ますよ。元々、入院といつても短期入院ですから。彼は来月にも退院します」

…………… 会いたくないな。でも、クラスが違うなら大丈夫かな。

先生に聞いてみると「大丈夫です」という言葉が返ってくる。なら、行こうかな。とりあえずお母さんとも相談しなきゃ。

そうしてしばらくして先生は帰っていった。「また明日も来ます」と言い置いて。

それから然程経たずに、また病室の扉がノックされる。来たのはお母さんだった。

「調子はどう？熱は下がった？」

「うん。昼に測った時はもう平熱だったよ」

「そう。それはよかったわね」

お母さんは私と会話をしながら椅子に座る。さて、先生から聞いた話について聞かなくちゃね。

「ねー、お母さん」

「どうしたの？」

「修学旅行って、どうすればいいの？」

「琉嘉が行きたいのなら行けばいいじゃないの。お母さん、先生にはそう言ってるわよ？」

やっぱり私の判断次第か。実際、どうすればいいのかわからない。行きたいけれど、行った先で何かあったらどうしようかと言う恐怖に襲われる。

絶対に何も起こらないと言う保障は何処にもないから。

そうやって悩んでいると、お母さんが私の顔を見て言った。目が、優しい。

「行きたいのなら行っておいで。何か起きたら、なんていう心配はしないで。それに、何かあったときのために、先生も同伴してくださるのよ？だから、大丈夫よ」

「うん……」

それもそうだよな。なら、行こうかな。修学旅行なんて中学校生活で一度しかないんだから。

「行く……」

「そう。なら、本谷先生に連絡しなきゃね。琉嘉が自分で言う？お母さんが言ったほうがいい？」

「明日も来るって言ってたから自分で言う」

私が言うと、お母さんはニッコリと微笑んだ。優しいな笑みだった。

そして翌日、私は先生に修学旅行に行くことを話した。私が行くと言うと、先生はニッコリ笑いながら「加々見が喜ぶでしょう」と

言っていた。

そういえば、よっちゃんにも結構な時間会っていない。会いたいな。

「今度連れてきましょうか？部活も引退していますから、塾以外は恐らく暇でしょうし」

「わーい。お願いします」

そう言っただけで私は先生と約束をする。約束の後は昨日の続き、ノートの説明の時間だ。

昨日と今日の努力のおかげか、忘れていた分を大分思い出すことが出来た。完全に思い出すまでもう少しだ。

ちなみに、今日は玲君は来なかった。昨日の今日で、まだ顔を合わせ辛いらしい。

代わりに、カナイが来た。ド迷惑男、鳳叶。勿論今日も全て無視したが。

「ねー、琉嘉ちゃん。そんな無視しなくてもよくない？先生も何か言っただけでござい」

「五月蠅い。迷惑。邪魔。早く帰って。……これでいいの？これで無視してないよ」

「まあまあ。片桐さん、そこまで毛嫌いしなくてもいいと思いますよ？」

「だって、さつきから書いてるとしよっちゅう邪魔するんですもん」

先生までカナイの味方をするか。そう思っただけでカナイが邪魔をすることを伝えると、途端に先生は私の味方になる。

「鳳君。邪魔はいけませんよ」

「邪魔してませんってえ」

「邪魔」

先生の言葉を否定するカナイに、私は即答で肯定する。書いている時に声をかけて間違わせたり、私の手を掴んで書けないようにする事の何処が邪魔じゃないんだ。

結局、カナイはそれからしばらく私の病室に居座り、途中で飽きたのか、自分の病室へ戻っていった。

やっと静かになった。やっとのんびりと作業に励める。

私はのんびりとノートを写し続けた。途中で分からない場所があると先生に質問をし、理解しながら写していった。

そして、今日も疲れ切った状態で勉強を終了した。

「お疲れ様です。残りはまた明日ですね」

「明日もですか!？」

「ふふ。自業自得ですね」

明日もこんなに疲れなきやいけないのか。まあ、確かに先生の言うとおり自業自得ではあるのだが、辛いな。

とりあえず、この夏休み中に追いついて、受験に備えなくては。

そうこうしている間に、時は流れる。月が替わり、カナイは退院した。それと同時に、夏休みが終わりを告げた。

その後もどんどん時は流れていった。

そして、あつという間に修学旅行の日となった。

「るーうちゃーん!!」

お母さんに送られ、集合場所である学校へ着くと、よっちゃんが手を振りながら大きな声で私を呼ぶ。

「よっちゃん」

「るうちちゃん。良かったね、修学旅行来れて」

「うん。先生からもオツケー出たしね」

私はそう言ってよっちゃんと喋る。私たちは、喋りながら整列した。

整列すると、近くには小学校が同じだった友達が集まっていた。

「るうちちゃん久しぶりー。先生に聞いて、会うの楽しみに待ってた」

「ホントだよー。1年のときはクラス違ったから聞いただけだったけど、結構心配したんだよ」

「あはははは。心配かけてごめん。みんな、久しぶり」

そして、先生の話が始まり、私たちは口を噤む。……先生の話は長かった。

その長い話が終わるとやっと出発だ。だが、私はまずは同伴してくれる由里先生の元へ向かう。来るように言われていたからだ。

「琉嘉ちゃん。調子はどう？」

「良すぎるくらいだよ」

由里先生は、私の手首を持ち、脈を取りながら私に問うた。

「それはよかった。脈も問題ないみたいだし、バスにそろそろ乗り込もうか」

「はーいっ」

私は先生に言われてバスへ向かう。バスではもう、他のみんなは乗り込んでいた。

「るうちゃん！こつちこつち」

よっちゃんがバスの後ろのほうで手を振る。私の席はよっちゃんの隣のようだ。

私が席に着くと同時に、バスのエンジンがかかる。私が待たせていたようだ。

そして発進する前に、本谷先生がマイクを取り、言った。

「さて、今日は待ちに待った修学旅行ですね。入院している片桐さんも揃い、今回はクラス全員でのイベントとなります。みなさん、悔いの残らないよう、精一杯学び、楽しんでください」

『おーっ！』

みんなの声がバスの中で轟く。……………ちよつと怖いぞ。

そして、バスは出発した。目的地は空港だ。私たちは、飛行機で長崎空港へと向かう予定なのだ。

「片桐さん、大丈夫？」

バスが発進すると、通路を挟んで横の席に座っていた女子が声をかけてくる。違う小学校から来た子のようで、私の記憶にはいない子だ。

「うん。大丈夫」

「何かあったら言うてね？私、学級委員だしさ」

「分かった。ありがとう。……………えと、名前教えてくれる？」

「そういえば、まだだったよね。私、谷戸高嶺^{やしたかね}。タカでいいよ」

そうやって私たちが話していると、横から口出しが入る。それはもちろん、よっちゃん。

「委員長でいいよ、委員長で」

「それが嫌だからこう呼んで、っていつてるんだろが、馬鹿ヨシ」

「バカヨシって男の名前みたいだから止めてよ」

「なら、委員長って呼ばせないでよ」

「……………私の関係ないところで静かにバトルが始まってるね。うん、止めて欲しいものですね、あっはっは」

そう思っていると、突如マイクの声が耳を突く。それは、本谷先生の声だった。

「加々見、谷戸。バスの中で喧嘩はしないようにしてくださいね？」

静かだが、威圧感を感じさせる声だ。聞く人を逆らわせない力を持っている。そんな先生の声に、二人は黙る。

やっと静かになった。

「他のみなさんも、旅行中に喧嘩などしないでくださいね。その時はお説教の時間が始まりますよ。その場合、連帯責任でみなさん総まとめでお説教ですからね」

それを聞いたクラスメート全員が一気に静まる。先生、学校でも怖かったのか。浮かべる笑みが怖い。

でも、そのほうが喧嘩しないで楽しい修学旅行になるかな。

そしてその後は至って平和にバスは進み、高速に乗って空港へと向かう。その途中、サービスエリアでトイレ休憩を取った。

「るうちちゃん、トイレ行こ」

「うん」

私はよっちゃんと一緒にバスを降りてトイレへ向かう。次はいつ行けるか分からないから今のうちに行っておくことにしたのだ。バスを降りる時に由里先生に軽く手を掴まれる。……………なんだろっ。

「琉嘉ちゃん、体調は平気？」

「大丈夫」

なんだ。そのためにわざわざ私の腕を掴んで動きを止めたのか。まだ、何も無い。大丈夫だと言うのに。

それから少し黙って次の行動を待ってみる。だが、それも無いようなので私はよっちゃんとトイレへ向かった。

私たちがバスへ戻ると、大体の人が元の席に戻っている。……………待たせたのかな。だが、それは違った。私たちよりも遅い人がいた。それは、委員長のタカちゃんだった。

「あれ？もうみんな戻ってた？」

「あなたが最後ですよ、谷戸」

「え……………あー、すみません」

「時間は遅れていませんから大丈夫ですよ。さ、早く席に戻りなさい」

タカちゃんはそう言われて足早に席に戻ってきた。

そしてタカちゃんが席に着いたのを確認すると同時にバスが発車する。次に降りるのは空港に着いたときか。

何か、疲れたな。久しぶりにはしゃいだからかな。すっごい、眠い。

「るうちちゃん、大丈夫？」

「だいじょぶうー。ちよっと、疲れただけだから」

私たちがそうやって話していると、そんな私の様子に気が付いたらしい由里先生がバスの揺れに耐えながらゆっくりと此方へやってくる。

……………大丈夫なのに。

「琉嘉ちゃん、どうしたの？」

「疲れて眠たいだけ。大丈夫だよ」

「本当に大丈夫？」

「大丈夫大丈夫」

由里先生は私の手を取り、脈を取りながら問う。脈を取るなら聞かなくても良くないか。

ま、いいや。どうせ空港までまだ時間がかかるだろうから、寝よう。

そう思って目を瞑る。それから寝付くまでにそう時間はかからなかった。気が付いたら空港がもう目の前というところまで来ていた。

「あ、るうちちゃん起きた？もうすぐ空港に着くよ」

「うん。もう見えてるね」

そうしてバスは駐車場で止まり、私たちもバスから降りる。バスから降りて荷物を受け取った後、クラス単位で空港の中へと移動した。

空港内に入ると、整列をする。……………これは、また長いお話開始フラグですか。

その通りでした。修学旅行に同伴する教頭が長々と話を始める。寝起きの頭には辛い。また、眠たくなる。でも、起きておかなくちゃ。頑張る。

それから約30分後、やっと長々とした話しが終わり、チケット

が配られる。私の席は、もちろんよっちゃんの隣だ。

チケットを配られた後、手荷物検査を受け、手続きが始まるまでのんびりと待機する。その待機する私の両隣にはよっちゃんと由里先生がいた。……私に自由は無いのかな。

まあ、二人とも心配してくれてるのは分かる。でもね、少しくらい一人でゆつくりしたい時もあるわけですよ。まあ、言っても無駄だろうから言わないけど。

それからしばらくして、やっと搭乗手続きが始まった。1組から順番に手続きを済ませ搭乗する。

「るうちゃん窓際かあ。いいなあ」

チケットに書かれていた座席に座ると、横の席に座るよっちゃんが羨ましそうな声で言う。何故。

「窓際なら富士山見えるじゃんか。私、見てみたかったんだよ」

「……代わる？」

「いや、いいよ。帰りに窓際になることを期待しとく」

そうなるといいね。多分、叶わぬ夢だと思うけど。

「そういえばるうちゃんさ、隣のクラスの鳳叶って知ってる？」

「……そいつの話はしないで。そこらへんから出てきそうだから」

「その言い方はひどいんじゃない？」

ほら出た。万年ド迷惑男鳳叶。

「あれ？どこから出たんだ？鳳」

「よっす、加々見。俺は琉嘉ちゃんのいるところなら何処でも出た

するぜ」

「二人とも知り合い？」

カナイとよっちゃんは知り合いだったのか。二人はのんびりと会話を進める。そんな中で、このバカは余計なことを言いやがった。それを聞いたよっちゃんは目を輝かせて質問をしてきた。

「うん」

「こんなの知らない」

勿論、前者はカナイ。後者は私である。

「えー、病院で仲良くなったじゃんか」

「あれは仲良くしたとは言わない。一方的にお前が引っ付いてきてるだけだ」

「あれは俺のスキンシップ」

「ウザいスキンシップだね」

そうやってカナイと話していると、横から笑い声が聞こえる。それはよっちゃんだった。

「二人とも仲良いじゃん。るうちゃんはどうしてそんな必死に否定するの？」

それは決まってるでしょう。

「ウザいから」

よっちゃんが一瞬止まる。でも、それ以外に表現方法は無い。それが一番的確な表現なのだ。

そうしていると、クラスの点呼を取っていたタカちゃんがかナイの腕を掴む。

「鳳。お前は隣のクラスだろう。早く自分の席に行け」

「五月蠅いよ谷戸。こうでもしないと琉嘉ちゃんも逃げるんだ」

「逃げられるようなことをしてるお前が悪いんだろっ」

ああ、五月蠅い。いいから早く自分のクラスに戻れよカナイ。迷惑なんだよ。そう思いながら私は窓の外を見つめる。離陸にはまだ時間がかかりそうだ。

まあ、いいさ。のんびりのんびり行こう。いい休憩の時間だ。

そうして私のがのんびりと外を眺めている間にカナイは自分のクラスに戻ったらしい。平和でいい。

それからしばらくして飛行機は離陸した。離陸時の全員のテンションがすごい。少し動くだけでキヤーキヤーと騒ぐ声が聞こえる。

ま、いっか。眠いし、また寝よう。

堕ちる。堕ちて行く。深く。深く。

沈む。沈み込む。深い場所へ。

修学旅行2

「るうちゃん。るうちゃん、起きて。もうすぐ長崎空港に着くよ」
「んあ？」

「もうすぐ着陸するって。ベルト付けなきゃ」

もうそんなに時間が経ったのか。言われてすぐに私はベルトを探し、付ける。その後、飛行機は無事に長崎空港へ着陸した。

「全員整列してー。点呼取るよー」

飛行機を降りると、先生が整列するように叫んでいる。………あの先生誰だっけ。ま、いつか。

そう思いながら私は大人しく整列をする。また長話かな。ちゃんと起きておけるようにしなきゃ。

「みなさーん。これからの予定について説明します。これから、クラスごとに分かれて中華街で昼食をとります。担任の先生の指示に従って行動をするようにしてください。食べるものはクラスによって違いますからねー」

前にいる先生がそう言った途端、みんなが目を輝かせる。怖いよ。てか、ウチのクラスは何を食べるんだろう。長崎といえば何だったけな。

「せんせー。ウチのクラスは何を食べに行くんですかー」

バスへ移動している途中で、よっちゃんが先生に問う。すると、先生はニッコリ笑って言った。

「加々見。長崎といえは何です？」

「うーん。定番で言えばちゃんぽん皿うどんかなあ……………」

よっちゃんが言うと同時に、先生がよっちゃんの頭を撫でる。当たり前なのだろうか。

「よく出来ました。正解です。2組は皿うどんを食べに行きますよ」「やったあ！」

先生が言うと同時によっちゃんが飛び上がる。本当によっちゃんは元気だなあ。

見てるこつちが微笑ましく感じてしまう。そして移動して店に到着した。

「テーブルに班の番号が書いてありますから自分の班の番号が書かれたテーブルに付いて下さい」

店に着くと、先生がみんなに聞こえるよう大声で説明をする。はて。私は何班なのだろうか。

「よっちゃん。私って何班？」

「るっちゃんはね、私と同じで1班だよっ さ、行こ行こ」

よっちゃんはそう言って私の手を引っ張る。……………ホント元気だなあ。

ちなみに、1班は他に小学校が同じだった子達が揃っていた。私ができるようにかな。もしそれなら、悪いことをしたな。

「皿うどん皿うどん」

「楽しみだよ。本場の皿うどん」
「早く来てくれねえかな」

クラスみんなが皿うどんを待つ。すごい楽しみにしているようだ。まあ、私も本場の皿うどんは食べたことが無いから楽しみなんだけど。

そして少しして、大きな皿に盛られた皿うどんが各班1皿ずつ置かれる。……いいニオイ。

「さて、全テーブル料理は揃いましたね。では頂きましょう」
「いただきますっ！」

みんな同時に挨拶をして箸を動かす。中でも、男子とよっちゃん
の箸の動きは早い。すごいペースで食べ進めている。

そんなよっちゃんたちに負けられないように、私も小皿に皿うどんを
取って食べた。やっぱり本場は美味しい。

食べながらお茶を飲む。そうしていると、あっという間にお茶が
無くなる。私は店員さんにお茶のおかわりを頼んだ。

店員さんはすぐに来てお茶を注いでくれる。そのときに皿うどん
の食べ方のアドバイスをくれた。

「皿うどんを好きなだけとってソースをかけて食べると美味しいよ。
かけすぎないように注意して、やってごらん」

だからテーブルにソースが置いてあったのか。私は早速皿うどん
を小皿に取り、ソースをかける。かけすぎないように慎重に。

そうして食べると、本当に美味しかった。ソースをかけなくても
十分美味しいが、かけると味に深みが出て最高だった。

そこまで食べて、私はもう満腹になる。だが、よっちゃんや男子
はまだまだ食べ足りない模様。

「あれ？片桐さんもう食べないの？」

「うん。もうお腹いっぱいだから」

「じゃ、残り、俺たち貰うね」

男子はそう言って皿を自分たちのほうへ近付けた。そうすることで、よっちゃんにも少し近づく。

そんな男子の行動に、よっちゃんはもう万々歳だ。

「すみませーん。薬を飲みたいのでお水もらえますか」

私が店員さんに言うと、店員さんはすぐに水を持ってきてくれた。私は忘れないうちにとっと薬を飲み込む。

よし。これで由里先生に文句を言われることはないだろう。

そして昼食を終えて、バスで原爆資料館へ向かった。

長崎。それは、日本で2つしかない原爆の落とされた土地。

長崎に原爆 原子爆弾 が投下されたのが8月9日午前11時2分。その時、この地は放射能に汚染された。

投下地は、松山町。市街地ではなかったようだが、それでも大量の死傷者を出した。

落とされた爆弾の名は「ファットマン」。広島に落とされた「リトルボーイ」の1.5倍もの威力があったらしい。

それでも、周囲が山に囲まれた地形だったため、熱戦や爆風が山によって遮断されたおかげで、威力は広島よりも高かったにもかかわらず、被害は広島よりも軽かったらしい。

私たちはそこで、被爆の惨状、投下されるに至った経過などを見て回った。写真を見ても、やはり原爆は残酷だ。見ていただけで辛い。

当時の人たちは、被爆し、この様子をナマで見ているのだ。

お年寄りが強いわけだ。

今よりももつと辛い時期を知っていればああも強くなるっさ。

「せんせー。これ、ちょっと無理」

近くを歩いていた女生徒が手を上げ、先生に限界を訴える。……

…そんなにヤバイのか？

「おやおや。もう少しですから我慢してくださいね。他のみなさんは大丈夫ですか？」

『はい』

結構平気な人が多いようだ。限界を訴えた子は泣きそうになっている。

「下を向いて進みなさい。そうすれば見なくてもいいでしょう？」

「下を見てても怖いです！」

「なら目を瞑りなさい」

「怖いものどころか何も見えないから歩けません！」

「私の服の袖を掴んでなさい。危ないと思ったら知らせてあげますから」

先生が言うと、さっきの生徒は一度頷き、目を瞑った。そして先生の服の袖を掴む。

「大丈夫ですか？行きますよ」

先生が問うと、その子は静かに頷いた。そして、ぐんぐんと進んでいく。

しばらくして漸く建物から出ると、先生はその子の肩を軽くポン

ポンと叩く。外に出たのを教えているのだろうか。

「さて、具合が悪くなった人はいませんか？いるなら正直に言ってくださいね」

その後、女子が数人吐き気を催したとのことで、養護教諭の元へ向かって行った。……………軟弱な。

「他は大丈夫ですね？」

その後、先生は私のすぐ傍へとやってきた。……………嫌な予感。

「片桐さん。大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。私、結構こーいうの平気なタイプなんで」

「そうですか。それはよかったです」

やはり来たか。結構平気だったから来ないかと思っていた、いや、来ないことを望んでいたのだが、所詮それは叶わぬ夢。

ここで調子が悪いとでも言おうものなら、外で待機していた由里先生が呼ばれて私は面倒くさいことに巻き込まれていただろう。それは嫌だ。

養護教諭の元へ行っていた子たちが戻ってくると、次は平和公園へと向かった。まあ、資料館も平和公園の中にあつたらしいが、コレを知ったのは帰ってきてからのこと。

平和公園に着くと、私たちはまず、原爆落下地点へと向かう。落下地点には原爆落下中心碑というものがあり、そこには原爆で亡くなった方の名前が書かれているらしい。

その名前は、今でも増え続けているらしい。完全に名前が追加されなくなるのはいつの話しなのだろうか。

そして平和公園を見回って後、私たちは漸くホテルへ移動する。

ホテルは長崎駅のすぐ近くにあるらしい。

ホテルへ着くと部屋ごとに鍵が渡される。私はよっちゃんと同室らしい。

「るうちゃん、早く部屋行こう」

「え？あ、ちよっと待ってよ、よっちゃん」

よっちゃんは先生から鍵を受け取るとすぐさま動き出す。その動きは素晴らしく早い。追いつくの少し苦労した。

「よっちゃん、早い。追いつくの疲れちゃったよ」

「あ…………ごめんね、るうちゃん。つい、はしゃいじゃって……」

よっちゃんは一気にしよぼーんとなる。

ちよっとコレは、罪悪感にかられるな。

「はしゃぐのはいいけど、加減して 私が追いつけなくなっちゃうもん。私はよっちゃんと一緒に楽しみたいし」

「うん！」

私が言うと、よっちゃんのテンションは一気に元に戻る。やっぱり元氣じゃなきゃよっちゃんらしくない。

「よし。じゃ、大広間行こうか。大広間でクラス別の集まりがあるから」

そうなのか。知らなかった。

私はよっちゃんと一緒に部屋を出て、鍵をかけた。…さて、大広間とは何処ぞ。

部屋を出ると、よっちゃんは迷いも無く突き進む。大広間の場所

を知っていたようだ。私は分からないから助かる。
そして大広間では、先生から今後の予定などを説明された。

「今が5時半ですから、1時間ほどしたら下の食堂に集まってください。夕飯は食堂で、全クラス合同でとります。その後、2組は8時からお風呂ですね。8時半には3組の生徒が来ますので、それまでに済ませるように。それと、男子。女子の部屋に入るのは禁止です。女子も男子の部屋には入らないように。それと、消灯の間もちゃんと守るようにしてくださいね。何か質問はありますか？」

先生のその質問に、男子生徒が少しふざけて質問をする。

「消灯時間を守らなかつたらどうなるんですかー？」

先生のその回答は怖かった。心の底から怖かった。

「どうなると思います？やらなければよかったと後悔するようなことをする予定ですが。全クラス合同で。それでも、守らないのですか？」

「いえっ！守ります。守らせていただきます！」

その男子も恐怖は十分に感じ取れた模様。声が震えている。

その答えを聞いた先生は満足そうに微笑み、他に質問が無いか聞く。結果、他の質問はなく、解散という形になった。

「片桐さん」

話しを終えて、夕飯まで部屋でゆっくりするために部屋に戻ろうとしているところで本谷先生に名前を呼ばれる。なんだろう。

「何ですか？」

「病院の先生から片桐さんに伝言があります」

「……………何だ。何なんだ、由里先生。なんとなく嫌な予感がするのは気のせいか。気のせいであって欲しい。ていうか、本当に何。」

「お風呂上がったら自分の部屋に来てくれ、だそうです。きちんと行ってくださいね？」

「……………はい」

一体何の呼び出しですか由里先生。診察は朝だけじゃなかったんですか。朝以外にもするおつもりですか。それとも問診だけする気ですか。

どちらにせよ、面倒くさい。だが、行かなければ朝が怖い。仕方ない。ちゃんと覚えておかなくては。

「るうちちゃん、表情が怖いよ？」

先生と別れ部屋へ戻る途中、ずっと黙っていたよっちゃんに突っ込まれる。そんなにも表情が怖いのだろうか。意識していないので分からない。とりあえず、元に戻す努力はする。

「病院の先生に呼ばれたの、そんなに嫌？」

「うん。面倒くさいじゃん」

「……………即答だね。でも、先生も心配して呼んでるんでしょ？なら、行かなきゃね」

分かってる。分かってるんだ。でも、面倒なのは面倒なんだ。

そしてその後、部屋でしばらく休んだ後、よっちゃんの案内で食堂へ向かう。私は忘れないよう薬をポケットにしまっていた。

「各クラスごとにテーブルに着いてください」

先生たちは、ある一定時間ごとに同じことを言う。大変だな。そして6時半。ご飯の時間だ。

「さて、僭越ながら、私が食事開始の挨拶をさせていただきます」

大きな声でコレを言うのは学年主任。……来てたのか。今まで見ないから知らなかった。

「みなさん、手を合わせてください。いただきます」
『いただきます』

そう言った後、みんなが食事に手を伸ばす。お腹が空いていたため、食べるものが全てが美味しい。

食事の際、西日本特有のお吸い物の色の薄さに少しびっくりはしたが、それ以外はいい食事の時間だったと思う。

ただ、一つ難を言うならば、量が多い。食べきらない。これは、余る。

大体お腹いっぱい食べ終えた頃、皿に残された食事を見てそう思った。残すのも勿体無い。だが、無理に食べると、きつと戻す。

「るうちちゃん、もう食べないの？」

その声のするほうを向いてみると、よっちゃんが自分の皿を大体空にして此方を見ていた。

「うん。もうお腹いっぱいだからさ」

「じゃさ、残ってるの貰ってもいい？残すの勿体無いし」

「うん。食べて食べて」

私はそう言つてよっちゃんに食べ物に乗った皿を手渡した。これで残らないだろう。勿体無いなんてことが無いからいい。

ちなみに、よっちゃんは周りの女子みんなが残したご飯も一人ではくはくと食べていた。よっちゃんの胃つて、四次元？みんながそう思った瞬間だった。

その後、私たちは風呂の時間まで部屋でたくさんおしゃべりをした。学校の話し。塾の話し。話し出せば止まらない。

そうしていると、あつという間にお風呂の時間になっていた。

コンコンツ

誰かが部屋の扉をノックする。誰だろう。

「はい」

「あ、まだいたよ。もうお風呂の時間だよ。行こう」

「あ、いいんちよ。気付かなかった。ありがとうね」

お風呂の時間を知らせてくれたのは委員長ことタカちゃんだった。私たちは急いでお風呂の支度をする。

部屋を出ると、タカちゃんは3つ隣の部屋の扉をノックしていた。全部屋お知らせに走るおつもりですね。

さすがは委員長。委員長として放置できないんですね。まあ、そのおかげでお風呂に入れないなんてことにはならなかったからよかったんだけど。

お風呂は気持ち良かった。ゆっくりと湯船に浸かってたから、体がホカホカだ。

さて、由里先生のところに行かなくてはいけませんね。面倒くさい。一体何の用なんだか。

「先生、隣の部屋だっけ？」

「うん。何かあったときにすぐ対応できるように、だってさ」

荷物を置いた私はのんびりと隣の部屋へ向かう。ああ、面倒くさい。

由里先生の部屋のドアをノックすると、すぐに返事が聞こえる。

はあ、いなければそれを理由に逃げたのに。

「どちら様ですか？」

「私。入ってもいい？」

「ああ、琉嘉ちゃん。どうぞ」

先生の返事を待つて部屋に入ると、先生は部屋の椅子に座って本を読んでいた。のんびりしてるな。

「いきなり呼んじゃってゴメンね？ちょっと、確認したいことがあったからさ」

「……………何？」

「いや、琉嘉ちゃん、今日結構テンション高めで行ってるでしょう？だから、心臓に負担がかかってないかと思って。痛くなったりしてない？」

「してない。大丈夫だよ」

だからか。私が久しぶりにみんなと会ったせいでテンションが高かったから。だから、予定外の時に呼ばれたのか。

今のところ、何も無いのに。大丈夫なのに。それ以前に、今日はいつも以上に調子がいいんだ。だから、そんな心配は皆無だよ。必要ないんだ。

「そっか。でも、ちゃんと明日の朝も私の部屋に来てね？調子がい

いからって逃げないように」

由里先生にそう伝えると、釘を刺される。大丈夫、いくら調子がいいからって逃げないよ。逃げたら由里先生だけじゃなく本谷先生まで怒りそうだし。

さすがにそれは怖すぎる。だから、ちゃんと来ます。部屋も隣だから楽だし。

「とりあえず、私の要件はコレでお終い。琉嘉ちゃんからは何かある?」

「……………無い」

聞かれて一応考えては見たが、考え付かなかった。まあ、それもそれでいいだろう。

万事平和。それが一番。

「部屋に戻ってもいい?」

「うん。わざわざコメントね」

私は由里先生の部屋を出て、自分の部屋へ戻る。ああ、やっと面倒ごとが終わった。

部屋へ戻ると、よっちゃんの他にも人がいた。部屋にいたのはクラスの女子のみさんだった。この狭い部屋に1クラス分の女子が入らなくてもいいと思うんだけど。

二人部屋に18人。うん、狭苦しい以外に表現のしようがありませんね。広い部屋に移動しようよ。他の人たちは四人部屋でしょう。

「あ、おかえりー。るうちちゃん」

「ただいま。てか、この集まりは一体何?」

「クラスの女子みんなさー、るうちちゃんと話したいんだって。だか

ら、消灯の時間まで喋る」

そう言われて見回してみる。小学校が同じだった子は分かるが、違う小学校から来た子は分からない。分かるのは委員長のタカちゃんだけだ。

「さて、んじゃ、片桐さんと違う小学校から来た組は順番に自己紹介していいこうか。出席番号順で」

その、違う小学校から来た子で唯一分かるタカちゃんが仕切る。その後、順番に自己紹介が始まった。

「私は遠藤秋生。アキって呼んで」

鳳栄。入院中と飛行機内では愚弟がご迷惑おかけしました」

愚弟？それは誰だと思っていると、横にいるよっちゃんが説明をくれた。

「栄と鳳、双子の兄弟なんだよ。栄がお姉ちゃん、鳳が弟」

成程。だから、カナイは愚弟か。うわー、すごい納得。

その状態でも、自己紹介はどんどんと進む。ていうか、学校が違った人少ないな。女子18人に対して7人か。

「私は相楽茜。よろしくっ」

「僕、中村優衣。会えて嬉しい」

「野口朝陽」

「宮部のどか」

「で、最後が私」

そうして言うのは委員長。そうか、他の小学校から来た人たちの最後はタカちゃんか。

私は一人一人によりしく、と挨拶をする。覚えられるかが一番謎だ。まあ、いつか。のんびりで。とりあえず、私も自己紹介をするか。

「えと、片桐琉嘉です。小学校が同じだった人たちからはるうちやんって呼ばれてます。よろしくお願いします」

「よろしくー」

「とりあえず、UNOしよ。UNO」

私が自己紹介をすると、みんなが軽く騒ぎ出す。何か、楽しい。そうしてUNOを始めると、鳳さんが横に座った。えっと、何かな。

「鳳さん、どうしたの？」

「栄でいいよ。いや、愚弟の所業を聞いておこうかと」

……………栄ちゃんはカナイが嫌いなのか。まあ、分かるけど。あれはウザイから。

「……………悪の所業」

「言い過ぎたかな。でも、それが一番表現としてあつてると思わない？アイツ、ウザかったでしょ？」

うん。これは肯定するしかない。あの邪魔男鳳叶。栄ちゃんはい子っぱいのに、何故カナイはあんなにもウザイんだ。

「ああ。アイツ昔から体弱くてさ。ま、こないだ入院してたのもそのせいなんだけど。それで親戚一同から無駄に甘やかされて育つて

るの。だから、あの馬鹿な性格が出来上がったってわけ。あ、ウノ」

栄ちゃんはあるさりとカナイのウザイ性格の理由を述べる。そして、丁度いいタイミングで残り一枚になったらしい。

「げ！？栄もう一枚か。朝陽！ドローフォー持っていないのか！？持ってたらず掛ける」

タカちゃんは栄ちゃんの隣に座る朝陽ちゃんに話しかける。……
…さて、朝陽ちゃんはどうするのかな。

修学旅行2 (後書き)

修学旅行まだ続きます。
もう少し続きます。

修学旅行3

そして次のターンがやってくる。その次のターンで朝陽ちゃんはしっかりとドローフォーを仕掛けてきた。それをやられた栄ちゃんが悔しそうな顔をする。

「どうして朝陽、ドローフォー持ってるのさ!?この人数なら朝陽が持つてる可能性低かったのに」

「日頃の行い。栄はいつも弟苛めてるからこんな目に遭うんだよ」

朝陽ちゃんがすっごく嬉しそうだ。……否。楽しんでる。

そしてその後も残り1枚まではみんな行くものの、中々上がるこ
とが出来ない状態が続いた。その均衡を打ち破ったのはタカちゃん
だった。

「よっしゃ、あがりーっ!」

「おー、やっとあがりが出たかあ」

「長かったねー」

タカちゃんがあがりを宣言すると同時に、みんなが反応する。みんな悔しそうではあるがスツキリとした顔をしている。

まあ、誰もあがれなくてマンネリ化してたしね。

その後、次々にあがりが出て行った。ちなみに、私は6番であることが出来た。今残っているのはよっちゃんと栄ちゃんの二人である。

「さて、どっちが先にあがるかな。誰か、賭けない?お菓子でさ」

最初にあがったタカちゃんが提案すると、みんな次々にノッてい

く。私も勿論、ノる。さて、一応よっちゃんに賭けますか。

「人の勝負を賭けにするな！委員長！」

「こんな面白いもの、賭けずに何をしろというんだ、このバカヨシ」

ああ、与り知らぬところでまたタカちゃんによっちゃんのパトルが始まる。でもま、タカちゃんが笑ってるから止めなくてもいいか。ちなみに、よっちゃんに賭けたのは同じ小学校だった子達で、栄ちゃんに賭けたのは違う小学校の子達だった。見事だね。

「うっしや！あがりいい！」

とここで勝利宣言をしたのはよっちゃん。つまり、賭けは私たちの勝ちだ。ある一人の子が委員長に手を出す。他のみんなもそれに倣って手を出した。

「ターカ。お菓子ちょうだいっ」

「ほら、るうちゃんも請求しなきゃ！」

私はその様子を黙ってみていると、近くに座っていた子から手を引かれる。私も手を伸ばした。

「……………お菓子持ってくる」

「私も」

それに他の子たちもずらずらと続いていく。さて、どんなお菓子が来るでしょうか。楽しみだね。

それは他の子たちも同じの模様。みんなそわそわしている。

そして、その後に持ってきてくれたお菓子をみんなで分けて食べた。みんなでたくさん話しながら、食べた。

やはり、みんなで騒ぎながら食べるお菓子は美味しい。でも、ちよつと疲れた。……………体力落ちたなあ。

そんな私の様子に気付いたのか、よつちゃんが私の横に移動してきて、言った。

「るうちゃん。どした？大丈夫？」

「え！？片桐さん、どうかしたの！？」

よつちゃんが言うと同時に他のみんなも反応する。さすがに、17人全員の心配の声は五月蠅いな。

「だいじよぶだよ。ちよつと疲れただけだった」

私が言うと、よつちゃんが心配そうな顔をして私の顔を覗き込んだ。

「顔色悪いよ？本当に大丈夫なの？」

「あー、じっくり見てみれば確かに顔色悪いような気がする。ヨシ、よく気付いたね」

「伊達にずつと一緒にすごして来たわけじゃありません。で、大丈夫？病院の先生呼んでくる？」

……………由里先生を呼ぶのは勘弁して欲しいな。でも、やはりそれは叶わぬ夢。

「もう、栄が呼びに行ったよ。あ、戻ってきた」

言われて見てみると、部屋の入り口に栄ちゃんと由里先生が立っていた。来なくてもよかったのに。

「あらら。結構顔色悪くなってるね。相当はしゃいだのかな？」
「はしゃいだって言えば、相当はしゃいだ。でも、大丈夫だって。疲れただけだよ」

ちなみに、私がこうやって由里先生と話している間に、他の部屋の子達はみんないなくなっていた。タカちゃんが戻るように言ったらしい。

ついによつちゃんも邪魔にならないようにと出て行った模様。

「本当に大丈夫かな？」

「大丈夫だってばあ」

先生しつこいよ。疲れただけだから休めば善くなる。そう思っていると、不意に目の前に体温計が現れる。……どこに持ってたんだ。

「熱測つてごらん」

体温計を受け取り、脇に挟む。熱なんて出してないと思うのに。こんな元気なんだから、熱なんて無いだろう。

測定が終わる。その体温計のディスプレイを見て少し驚いた。

「どうだった？」

「…………… 37度3分」

「やっぱり少し熱出してたか。まあ、今日はいっぱい興奮したりしただろうからね」

…………… 予想外。

明日の自由行動行けるかな。行きたいな。くそう。

「今日は先生の部屋で寝なさい。同室の子にうつつてもいけないか

らね」

「……はあい」

そして私たちは部屋を出た。よっちゃんは部屋の外で待っていたらしい。私が部屋を出ると、じつと見ていた。

「片桐さん、少し熱があるので今日は私の部屋で寝かせますね」

そんなよっちゃんに先生はニコニコと微笑みながら言う。それを聞いたよっちゃんは私の方を見て、口を開いた。

「熱があるって、大丈夫なの!？」

「大丈夫だよ。先生が大袈裟なの」

それを聞いたよっちゃんは安心したのか、安堵の息を吐いた。それに由里先生がさらに安心させようと言葉を放つ。

「熱があるといつてもたいした事はないから、明日は普通に行動できますよ」

それを聞いたよっちゃんの表情はさらに嬉しそうな顔にかわる。そして、私は先生の部屋のベッドに横にされた。

その後、額に濡れたタオルが置かれる。冷たくて気持ちがいい。それから、私は目を瞑る。まだ眠たくはないし、眠たくはならないけれど、明日の自由行動のために、体を休めることにしたのだ。すると、声が聞こえる。由里先生が本谷先生の部屋に電話をしているらしい。今日は私はこの部屋で寝ることになることを知らせているのか。

そういえば、もうすぐ点呼の時間だっけ。消灯の時間が近づく。その中で、私は独り、早く寝よう。

明日の自由行動のために。天主堂へ行くために。
そんなことを考えていると、どんとんと睡魔が襲ってきた。眠た
い。

……………堕ちた。

翌朝。修学旅行二日目。

「あら、目が覚めた？おはよう琉嘉ちゃん」
「おはよ、由里先生」

朝、目が覚めるとすぐ傍の椅子に座っていた由里先生から声がか
けられる。……………まさか、ずっと其処で起きてたのか。

「少しは寝たよ？」

そう返されても、信用できない。すっごい気になる。

「ほら、そういうことは気にしないでいいから、まずは熱測ろうか」

体温計を受け取り、測る。結果は良好。

「36度5分。オッケーだよね？」

「うん。ちゃんと下がったね。でも一応聴診器あてところか。はい、
お腹出して」

先生はそう言って聴診器をいろんな場所に当てた。……………ホント、
聴診器って冷たいよね。

「大丈夫そうだね。でも、無理は禁物だからね」

「はい。分かってます。じゃ、部屋戻ってもいいよね!？」

「うん。起床時間は過ぎてるから同室の子ももう起きてるだろうし
そして私は隣の部屋の扉をノックした。中からよっちゃんのん
びりした声と、鍵の開く音が聞こえる。」

「!！」

よっちゃんは私の姿を視認すると、まず驚いた。そして、その驚
きが消えると一気に飛びついてきた。

「るうちゃん。もう大丈夫？昨日心配したんだよう」

「大丈夫だよ 心配かけてゴメンね」

私たちは部屋に入り、しばらく話した。それから少しして、昨夜
ご飯を食べた食堂へ向かう。朝ごはんはバイキング方式だった。
食べたい分だけ皿に盛って2組のテーブルへ向かうと、それに気
が付いた女子のみんなが私に声をかけてきた。

「あ！片桐さん。大丈夫？」

「るうちゃん平気？」

「自由行動、出来るの？」

と、次々に質問が飛んでくる。私はそれに総まとめで答えること
にした。

「昨日は心配かけてごめんなさい。でも、大丈夫。自由行動も大丈
夫だって」

私がそれを言うと、女子だけでなく男子のほうからも「おお」と
いう声上がる。何故。

そしてその後、取って来た朝食をのんびりと食べ、薬を飲んだ。

ちなみに、よっちゃんは今朝も四次元胃袋を披露している。……よく食べる。

「ご飯を食べた後は、またクラスごとに集まるらしい。2組は昨日と同じ大広間だ。私たちはお喋りをしながら移動する。」

大広間に着くと、私はまず、本谷先生に捕まった。昨日体調を崩したことを気にしているらしい。

「片桐さん、大丈夫ですか？」

「大丈夫です。由里先生に聞いてません？」

「聞いていればもっと安心してますよ。大丈夫ならいいんです」

そしてみんなが揃うと、先生の話が始まった。今日の自由行動についてだ。

「さて、今日は以前みなさんに出してもらった自由行動の予定通りに街を歩いてもらいます。それにあたって、もし何かあったときのために各班に1台携帯電話を渡しておきます。通話ボタンを押せば私の携帯に繋がるようになってますから。各班の班長、取りに来てください」

そう言っって先生は携帯を1台ずつ手渡していく。願わくば、この携帯を使わなくて済みますように。」

「あと、くれぐれも車や路面電車に気をつけるように。事故があったらその瞬間、修学旅行は終わりですからね」

『はい』

「さて、後、何か質問がある人はいますか？」

それに手を上げる人はいない。男子も昨日のおふざけ質問で懲りたようだ。

「無いのなら、各班部屋に戻って準備をしてください。これから約1時間後に出発です」

先生が時計を見ながら言う。そして生徒はみんな立ち上がり、部屋へ戻っていった。私たちも部屋へ戻る。

「ね、よっちゃん。私たち、何処行くんだっけ？」

実は、天主堂以外覚えていないんだ。天主堂だけが興味があつて覚えていたのだが、他は………まあ、あれなんだ。

「ウチの班はね、浦上天主堂と大浦天主堂。んでグラバー園にも行くよ。それと水辺の森公園ってトコと出島にも行くよ。それが終わったらホテルに戻るの」

成程。何か、ホント学ぶ旅だな。でもま、いつか。楽しそうだし。

「さて、んじやま、とつとと制服に着替えよつか。よっちゃん、歯磨きと着替え、どつちを先にしたい？」

「んー、じゃあ、先に歯磨きを」

「じゃ、るうちゃん洗面所先に使ってて。私、るうちゃんが歯磨きしてる間に此処で着替えておくから」
「分かった」

私はそう言つて歯ブラシや洗顔石鹸を取り出し、洗面所へ向かう。洗面所へ行き、まずは歯を磨く。その後にしつかりと顔を洗つた。まだ寝ぼけ気味だった頭が冷める。

全てを済ませて洗面所を出ると、よっちゃんは既に歯ブラシを持つて待機していた。早いな。

「チエーンジ」

よっちゃんは朝からテンション最高潮の模様。強い。

そして入れ替わった私はのんびりと制服をクローゼットから取り出して着替えた。襟が変にならないよう、ちゃんと直す。

その後は持つていくものを小さなバッグに移し変えた。

まずは、財布。筆記用具。お昼用の薬。何かあったときのための由里先生の連絡先が書かれた紙。後は定番のハンカチちり紙など。

そして、時間が来て部屋を出る。部屋を出ると、由里先生が立ちはだかつていた。……何がしたいんですか。

「琉嘉ちゃん。何かあったらすぐに私の携帯に連絡頂戴ね」

「……分かってますって。まだ死にたくないですし」

私が答えると、由里先生は満足そうに微笑んで部屋に戻っていった。今のうちに仮眠するつもりかな。

とりあえず、私たちはロビーへ向かう。ロビーへ行くと、一緒の班の子達は既に揃っていた。私たちが最後らしい。

「遅いよ、加々見に片桐さん」

「ゴメンよー」

「あ。加々見さん、片桐さん。鍵、先生に預けてきた？まだなら預けてこなきゃだよ」

ロビーに着くと、一人の男子が文句を言ってくる。…待たせて済みませんでした。

それを聞いたもう一人の男子がさっきの男子を勇めるように話を変える。それを聞いたよっちゃんは急いで先生の元へ鍵を預けに走った。

「片桐さん、身体、大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫。心配してくれてありがとう」

私が心配をしてくれたことに素直に礼を言っていると、質問をしてきた男子が顔を赤くする。……風邪？

「違うから大丈夫。まあ、片桐さんのフォローは加々見がするだろうから大丈夫かな」

「うん。私はお前よりはるうちゃんのこと知ってるからね」

そんな男子の言葉によつちやんが口を挟む。いつの間に戻ってきたんだか。

それからその男子とよつちゃんの口喧嘩が始まる。止めるべきかな。でも、どうやったら止まるのかな。

そう思いながら顔をキョロキョロと動かしていると、もう一人の男子と目が合う。その男子は目が合うと同時に口を開いた。

「二人ともコレで楽しんでるから大丈夫だよ。とりあえず、片桐さん。少しでも調子が悪くなったらすぐに言ってね。俺たち全員で出来るだけフォローするからさ」

「あ、ありがとう」

私がお礼を言つとその男子はニッコリ笑って二人の喧嘩を止めに入った。……そういえば、男の子たち二人とも名前知らないや。後で聞かなきゃ。

そしてその二人の喧嘩が止まってから私たちは出発した。

「ところで、二人とも、名前を覚えてくれませんか？」

私が言つと、二人が目を丸くする。いきなりこの質問が来ると思わなかったのかな。

だが、すぐに立ち直つて言った。

「俺は斯波拓斗シバタクト」

よっちゃんと言つていたほうが斯波君。

「僕は橋本健ハシモトタケル。よろしく」

そして、その喧嘩を止めた物腰の柔らかいほうが橋本君。よし、覚えたぞ。これで声をかけるときに呼び方に困らなくて済む。

ちなみに、私たちは今路面電車に乗っている。人が多くて座れない。それは別にいいのだが、予想以上に揺れる。カーブは特に激しく揺れて怖い。

「あ、席開いたよ。片桐さん座りなよ」

「いいの？ありがとう」

次の電停について席が開くと、すかさず橋本君が座るよう言ってくれる。橋本君って優しいな。

カナイとは大違いだ。カナイは私の嫌がることばかりだから。

……………そうやって、カナイのことを考えたのがいけなかったのでしょうか。それとも、別の要因があったのでしょうか。どちらにせよ、最悪。

「あれ？琉嘉ちゃんじゃん。え、何？浦上天主堂行くの！？なら一緒に行きこう。いいよね？」

ちなみに、カナイのこの確認は私たちに向けてではなく、カナイ

の班の人たちに対してである。

「とりあえず、俺たちはいいんだけど。片桐さんはいいの?」

「片桐さんが嫌なら僕ら徹底的に鳳を避けるけど、どうする?」

それは勿論、避けます。カナイに近付くとなることが無い。

「嫌だ。絶対に嫌だ。他の人たちは全然構わないけどカナイが一緒なのは絶対に嫌だ」

「あーあ。鳳、片桐さんに何したんだ?徹底的に嫌われてんじゃない」

私が拒否の言葉を出すと同時に、橋本君やス波君。他にもカナイの班の人たちがからかうような声を出す。カナイは面白くなさそうだ。

「えー!?何で俺だけダメなのさー。俺は琉嘉ちゃんと仲良くなり
たいだけなのにー」

「病院でとことん人に迷惑かけてきた人と仲良くする気はありません」

「そんなこと言わないでさー」

「ヤだ」

「琉嘉ちゃん」

カナイはそう言いながら私に接近する。嫌だ近寄るな離れる。そう思っていると、よっちゃんが救いの手を差し伸べてくれた。

「鳳。いい加減にしないと栄に言いつけるよ」

「え!?!」

よっちゃんがそれを言った途端、カナイの動きが止まる。カナイ

は栄ちゃんが苦手なのか。……いいことを知った。

「加々見。頼むから栄には言わないで」

「ならるうちゃんから離れる」

カナイは渋々私から離れる。助かった。私はそのままよっちゃん
の後ろに避難した。カナイ避けだ。

「るうちゃん。鳳で嫌なことがあったら栄に言えばいいよ。栄がう
まく懲らしめてくれるから」

「うん。ありがとうよっちゃん」

「よし。じゃ、僕たちは先に行こうか」

そして私たちは浦上天主堂へ向かった。

ちなみに、この後も何故か移動するたびにカナイと遭遇するとい
う不吉な事態が起こった。そのあまりの遭遇つぷりに、よっちゃん
のみならず斯波君も軽く怒っている模様。

「こら、叶。お前ら、パクっただろ？」

「そんなことして何のメリットがあるのさ？」

「片桐さんと顔を合わせることが出来る」

斯波君の言葉に反論を返したカナイだったが、その後の橋本君の
言葉に黙り込んだ。実は凶星か。そうなのか。このド迷惑男め。

私がカナイを冷めた目で見てみると、カナイが反論してくる。あ
あ、聞くの面倒くさい。

「ちょ！？そんな冷めた目で見ないでよ。俺、誓って言うけどパク
つてないからね！！」

「ならどうしてそこまで遭遇する」

「…………俺の琉嘉に対する愛の力？」

殴っていいかな。殴っていいよね。うん、殴ろう。何処殴ろうか。何処が効くのかな。よし、お腹を殴りましょう。

思い立ったが吉日。考え付いたなら即実行。

「ぐはっ」

「おー、ナイスパンチ」

「片桐さんやるねえ」

「ふむ。結構いい一撃だな」

カナイが呻き声を漏らすと同時に、見ていた他の人たちから賞賛の声がかかる。ああスッキリした。

「自業自得だな、鳳。コレに免じて栄に言うのはやめておいてあげる」

「これはありがとうというべきなのか？加々見」

「言うべきだろ。あの栄の恐ろしい圧力を受けずに済むんだから」

カナイはまだ辛そうだ。ああ、スッキリする。ざまあみる。ふざけたことをぬかすからこうなるんだ。

「あはは。ホントいい一撃だったね。とりあえず、鳳が復活しない間に僕たちは行こうか」

橋本君、カナイの苦しむ姿を見てとことん楽しんでるね。でも、これ以上カナイと遭遇したくないから早く行こう。

そしてその後も呪われているのかというくらいにカナイと遭遇した。マジでウザイ。あとから栄ちゃんに報告しよう。

そうやって、私たちの修学旅行の自由行動は幕を閉じた。後はホ

テルに戻るだけ。ああ、カナイのせいで無駄に疲れた。

ホテルに戻ると、ロビーに各クラスの先生が並んで待機していた。本谷先生は何処だろう。ああ、いた。

「おかえりなさい。片桐さん、加々見、斯波君、橋本君。自由行動は楽しかったですか？」

「はい」

私以外の三人はニツコリ笑って返事をする。私は楽しかったといえは楽しかったのだが、アイツのせいで疲れたため返事が出来なかった。

「おや？片桐さんは楽しくなかったのですか？」

「いえ、楽しかったんですが、しょっちゅうカナイと遭遇しちゃったので無駄に疲れました」

「鳳君とですか。中々面白いですね」

人事だからって楽しんでるな。

「まあ、事故等もなくて何よりです。さ、鍵を取りに言って、時間まで部屋で待機していてくださいね」

「はい」

そしてよつちゃん和橋本君は鍵を受け取りに先生の元へ行く。その間、私は斯波君と話していた。

「ね、片桐さん。叶のどこが嫌？」

「……………ウザイト」

「ああ、ね。確かにアイツウザイよね。でも、いいトコもあるんだよ、片桐さんは知らないけど」

「ねえ、斯波君。聞いてもいい？」
「ん？いいよ。何？」

斯波君の話を聞いていて、ふと思う。何故斯波君はそうまでしてカナイを庇うのか。だから、聞いてみた。

「一応、俺、アイツの友達だからさ。あそこまで嫌われてると憐れというか、少し可哀相な感じがしてね。だから、少しくらいフォローしておこうかと」
「斯波君、優しいね」

ホント、何であのバカのフォローをしようという気になれるのか。不思議だ。

そここうしている間によっちゃん和橋本君が戻ってくる。部屋に戻る。戻ってゆっくり休もう。

部屋に入ると、ベッドメイキングがされ、皺が綺麗に伸ばされていた。自由行動の間にやってくれてたのか。

「疲れたーあ」
「鳳のせい？」
「うん。何であんなにもカナイと遭遇しちゃったんだろう」
「あのバカが何かしたんじゃない？」

私たちはベッドに寝転びながら話す。そうしていると、どんどんと眠たくなってきた。寝てはマズいので、無理やり身体を起こす。

「るうちやんどした？」
「いや、寝転んでたら寝そうだったから……………」

だが、起き上がっておける時間は然程長くなかった。目の前が揺

ねると思ったら、気が付いたときにはベッドに倒れこんでいた。コ
レって結構ヤバい？

修学旅行4

「……………るうちちゃん大丈夫？隣の先生呼んで来ようか？」
「大丈夫。眠いだけ。よっちゃん、ちよつと寝ていいかな？時間になつたら起こして……………」

そう言つて私は夢の世界に旅立った。だって、もう限界だし。

声が、聞こえる。誰だ。これは誰の声だ。

「片桐さん。片桐さん、大丈夫ですか？」

「るうちちゃん、やつぱ具合悪かつたのー!？」

「脈に異常は無いですけどね。よっぼど疲れきつちゃったかな」

……………本谷先生に、よっちゃん。そして由里先生か。何で、此処にいる。

ああ、まだ頭がボーっとする。一体何事だ。まだ眠たいんだ。

「んあ……………」

「片桐さん」

「るうちちゃん！」

「おはよう、琉嘉ちゃん。調子はどうか？」

ああ、五月蠅い。まだまだ頭はボーっとしてる。だるい。眠い。もう一度寝たい。

そう思つて目を瞑ると、由里先生から妨害を喰らつた。何故だ

「今寝たら夜眠れないでしょう？起きて起きて」

こんにやろう。私は未だ閉じられかけている瞼を無理やりこじ開ける。光が目に入る。眩しい。

その中で、本谷先生とよっちゃんが心配そうな顔をしている。大丈夫だよ、眠たいだけなんだから。

「琉嘉ちゃん。今どんな感じ？」

「……眠たいせいで頭がボーっとしてるよ。無理やり起こされたし」

「それは琉嘉ちゃんの寝起きが悪いただけだね。他は何かある？」

「……無い」

由里先生はニコニコと微笑みながら脈を取っていた。さっきやったんじゃなかったのか？異常は無かったんじゃないのか？相変わらず読めないな。

その後、体温計を渡される。今晚も先生の部屋でお休みフラグですか？うわあ、嫌だ。

それは何とか避けることが出来た。熱は無かったからだ。だから、疲れたただけだろうという結論が為された。助かった。

「とりあえず、クラスの集まりは片桐さんが寝てる間に終わりましたから、もうすぐ夕食です。あと30分ほどしたら食堂へ来てくださいね」

「はい。済みません」

寝てる間にクラスの集まりは終わったのか。ああ、それでよっちゃんが本谷先生に相談したのかな。それで由里先生まで来たのか。自分の寝起きの悪さに文句を言いたくなるな。

そして先生コンビは去っていく。ああ、平和。

「良かったよ何にも無くてえ」

「心配かけてごめんね、よっちゃん。大丈夫だよ。眠ったから体力

も回復したし」

先生ズがいなくなるとよっちゃんが私に抱きついて言う。よっばど心配をかけていたようだ。

でも、大丈夫。さっき眠ってたおかげで体力的にはかなりいい感じなんだ。とりあえず、お腹空いたな。

「ご飯まで後30分くらいだっけ？お腹空いたあ」

「あはは。るうちゃんもお腹空いたんだ。でも、30分なんてすぐだって」

「うん。それまで我慢だね」

「まあ、お菓子を食べるって言う手もあるけどね」

私の決意をスパツと断つちゃったよよっちゃんてば。でも、そそられる。

「るうちゃん。動けるくらいに食べておいたほうがいいんじゃない？多分食堂着いたらみんなに集られちゃうだろうから」

あー、その問題もありましたね。呪いですね。呪われてますね。

「るうちゃんが起きない、って先生に言ったらみんな聞き耳立ててたらしくて聞かれちゃってさ。だから、すごいことになるんじゃない？」

嫌だ。ていうか何でみんな聞き耳立ててるのさ。何の嫌がらせ？これ嫌がらせだね。大事なことなので二回言ってみた。

「とりあえず、糖分とって体力を回復させよう。ホラ、私チョコ持ってきてるし。半分こして食べよう」

「うん。ありがとーよっちゃん。好き」

私はそう言っただけよっちゃんに抱きつく。よっちゃんはびっくりしていた。まあそうだよ。普段はよっちゃんが私に抱きついては来るけど、私からは抱きついていけないし。

そのせいか、心なしかよっちゃんの顔が赤い。やりすぎたかな。

「も……もう。いきなり抱きついてこないでよー。びっくりしちゃった」

「嫌だった？」

「うん。いきなりだからびっくりしただけ」

「なら、いいね」

そして私たちは半分こしたチョコを二人で食べる。そうしている間に30分という時間はあっという間に過ぎ去ろうとしていた。

「あ、そろそろ移動しなきゃだ。行こう」

「うん」

食堂へ移動していると、後ろからクラスの子達が集ってくる。よっちゃんの言ったとおりだ。

「片桐さん大丈夫？」

「心配したよー」

「るっちゃん、もう大丈夫なの？」

他多数。

そんなクラスの人たちに、私はまとめて返事を返した。

「大丈夫。疲れて起きられなかったただけだから。心配かけてすみませ

「んでした」

「そっか。よかった」

私が心配をかけたことに謝ると、みんな安堵の息を吐く。ホント、相当心配をかけてしまっていたようだ。

昨日から何度も何度も申し訳ない。

その心配の声は、食堂に着いてからも続いた。私はそれに対して少しずつ、謝罪の言葉を述べる。ご飯を食べる前に体力を使いきってしまいそうだ。

その後、みんな揃って夕飯の時間だ。夕飯はやはり量が多いが、美味しかった。私の食べきれない分はよっちゃんが全部平らげたし、さすがよっちゃん。四次元胃袋の持ち主（笑）。

その後お風呂に入り、今日は部屋で騒ぐことなく眠りについた。みんな、今日の自由行動で疲れていたのだろう。

翌朝。修学旅行最終日。

「ん……………あぁっ」

朝。鳥の鳴く声で目が覚めた。時計を見ると、まだ起床時間にはなっていないかった。早く起きすぎたか。

やる事がなくて暇な私は、ふと、隣のベッドを眺める。そこではよっちゃんが何をどうやってたらそうなるのか分からない格好で寝ていた。よっちゃん、寝相悪いの治ってないな。

それから少しして起床時刻となった。起床時刻になると、あらかじめセットしていたアラームがなる。よっちゃんはそれで目を覚ました。

「……………あれ？おはよ、るうちゃん。早いね」

「おはよーよっちゃん」

よっちゃんはまず体を伸ばしてから体を起こす。その間に私はトイレに行くことにした。

用を済ませてトイレから出ると、よっちゃんが既に待機している。待たせてしまったかな。

後は、着替える前に私は由里先生の元へ行かなくては。トイレから出てきたよっちゃんにそれを伝え、私は隣の部屋へ向かった。

部屋をノックすると、すぐにどうぞという声が聞こえる。早い。

「おはよう、琉嘉ちゃん。今日は調子はどう？」

「おはよ、由里先生。昨日ぐっすり寝たからいい感じ」

そう言った後に、体温計を渡される。とりあえず、大丈夫でしよう。

思ったとおりだ。至って平穩。平熱。問題無し。

「さ、じゃあ診察しよっか。お腹出して」

そして再び昨日と同様に冷たい聴診器が当てられる。早く終わらないかな。冷たいのって嫌いなんだ。

診察が終わった後、私は部屋へ戻る。戻って着替えなきゃ。

部屋に戻ると、よっちゃんは既に支度を完了させていた。早いな。私も急いで支度をしなければ。

そう思いながら急いで動いていると、よっちゃんから声がかけられた。

「まだ時間あるから焦らなくていいよ。ゆっくりやって」

「……ありがとう」

そんなよっちゃんの厚意に私は礼を言って、支度のスピードを落

とす。おかげで冷静にやることが出来た。

そして支度を終えた頃、丁度いい移動開始の時間になっていた。

「よし、じゃあ朝ごはん食べに行こう」

「うん」

そして私たちは食堂へ向かう。今朝もバイク方式だった。とりあえず、好きなものを食べられそうな分だけ取る。

勿論、よっちゃんを取るものすべてが山盛りだ。イツア四次元胃袋マジック。

そして、朝ごはんを食べた後は食堂でそのまま全クラス合同で先生の話を聞いた。それはこれからのことだった。

「これからホテルをチェックアウトして、バスへ移動します。それから大村市をクラス単位で観光し、空港で合流します。そして、飛行機で戻ります。昼食は機内でお弁当を食べることになります」

ああ、そういえばしおりには大村市の観光とか何とか書いてあったつけ。忘れてた。

「ごみはちゃんと分別して置くように。では、1組から退場しなさい」

先生の声に、1組の生徒が少しずつ立ち上がり食堂を去っていく。それから然程せずに2組の退場が始まった。

「荷物は大体まとめてあるから楽だよな」

私は部屋に戻る途中、よっちゃんと話した。まあ、元々荷物をあまり出してないから基本楽なんだよね。

それはよっちゃんも同じ。だが、後ろにいたタカちゃんは違った模様。

「お二人さん、何でそんな準備いいの？」

「そついう性格だから」

暗い声で質問をしてくるタカちゃんをよっちゃんはバツサリと切り捨てる。容赦ないな。

まあ、確かにそれ以外言いようは無いような気もしなくはないけど、もっとダメージが少なくなるような言い方は無かったのかな。

まあ、とりあえず、この言葉が一番今のタカちゃんには無難かな。

「タカちゃん。頑張れ」

「……うん。頑張る」

そしてタカちゃんとも別れた私たちは部屋に戻ってきていた。

「荷物大体まとめてるから時間まで暇だよ。何か喋る？」

「うん。そうだね。そうでもしないと暇だよ」

私たちは荷物を簡単にまとめながら喋る。まとめる荷物の大半はお土産だ。いろんな人に配ろうとたくさん買ったので、少し邪魔に感じるんだ。

まあ、買ったお土産の大半はカステラだけ。長崎って言ったらかステラだよ。うん、そうだよ。

そして、私たちは色々と話す。将来の夢。志望高校のこと。私はまだ将来の夢もよく分からないし、志望する高校も決めてないけど、それでも聞いているだけで楽しかった。

「ね、るうちちゃん。一緒にるうちちゃんのおじいちゃんの学校に行か

ない？あそこなら勉強のレベルも高いし、入院しててもレポートで単位が取れるんでしょ？」

「え？」

いつの間にそんなこと調べたんだ。それに、どうしてわざわざおじいちゃんの学校なんだ。遠いのにな。

「だって、片桐学園で大学まであるでしょ？その大学、法学部あるじゃん。私、将来弁護士になりたいんだ」

すごい。将来の夢を定め、それに向かって突き進んでいるのか。私には夢が無い。持てない。

「よっちゃん、すごいね」

「すごくないよ。だからさ、一緒に行こう？私、るうちゃんとはずつと一緒にいたい」

……………これは愛の告白ですか？いえ、同性ですから違いますよね。よっちゃん、レズの道に突っ込んでないよね。突っ込んでたらちよつとヤバイかな。

「言っておくけど、本気だよ？私はずつとるうちゃんと一緒にいたい。一緒に笑っていたい」

本気で百合の世界に足を踏み込んでしまった模様。確かに、私もよっちゃんは好きだけど、百合属性は無い。私はノーマルだ。

そんな私の様子に気が付いたのか、よっちゃんは話を変えてきた。「考えておいて」と言い残して。

「さて、まだ暇だし、タカのところ、様子見に行ってみる？」

「あ、うん。そうだね」

そして私たちはタカちゃんや栄ちゃんたちの部屋へやってきた。

「タカ！。入ってもいい？」

「いいよん」

中から聞こえる返事はタカちゃんのものではなく栄ちゃんのものだった。栄ちゃんは準備を終えたのかな。

「やほ。何の用？」

「タカの荷物片付けの様子を見物にね」

よつちゃんがそう言つと、栄ちゃんと他の同室の子たちが笑つ。やっぱり苦労してるのか。

「まあ、生暖かい目で見守つてやつてよ」

そんな声に、よつちゃんが笑い声を上げる。耐え切れなかったよ
うだ。

ていうか、暖かい目じゃなくて『生』暖かい目ですか。

「笑うなバカヨシ！」

「バカヨシ言うな！委員長！」

「バトル開始だね。この間にも片付ければいいのに」

二人のバトルを見て、栄ちゃんが冷静に突っ込む。教えてあげようよ。そう言ったら笑って返された。

「これで、あとからタカが焦るのを見るのが面白いんじゃないか」

いい性格をしていらっしやる。栄ちゃんも結構性格悪かったのか。でも、確かにそうかもしれないからいいや。

あえて突っ込むまい。突っ込んででも多分無駄だし。

ちなみに、タカちゃんはそのことに自分で気が付いたらしい。いきなりバトルを止め、片付けに入った。

よっちゃんは面白くなさそうだ。

「ヨシ。ダメじゃん、気付かせたら」

「ホントだよ。せつかく面白かったのに。馬鹿由佳」

「あーあ。面白いもの見過ごした」

よっちゃんはタカちゃんと同室三人に立て続けに文句を言われる。何か可哀相だぞ。

「よっちゃん、大丈夫？」

「あ？大丈夫大丈夫。慣れてるから。学校ではよくやってるから」

「そなの？」

「うん。だから心配無用だよっ」

そうなのか。ならいいな。でも、三人とも結構遠慮なしに言っただな。結構人間って変わるものだ。小学校の時大人しかった子が遠慮なく色々言えるようになってる。

とりあえず、私たちは部屋へ戻ることにした。集合の時間が近づいているからだ。

「部屋に戻ったらまず、ごみの分別かな」
「だね」

私たちは部屋に着くと、まずゴミ箱のチェックに入った。燃える

ごみと燃えないごみを分別する。ああ、面倒くさい。

そして分別を終えてしばらくして部屋を出る。ちよつどよく集合時間が近付いていたのだ。

「今日は大村の観光をして帰るんだっけ？」

「そうだよー。今日で修学旅行はお終い」

あれ。何だか寂しいぞ。ああ、修学旅行が楽しすぎたからか。だから終わるのがこんなに怖いのか。

でも、終わりの無いものなんていない。全ては、いずれ終わる運命にある。だから、終わらせなくてはいけない。足掻いてはいけない。

私は、足掻かない。

「2組の生徒。集合しなさい」

ホテルを出ると、バスの側で本谷先生が声を上げる。大変だな。

「おや、加々見に片桐さん。準備はいいですか？」

『はい』

「では、荷物をバスの下に載せて、乗り込んでください」

そして私たちは大きい荷物を運転手さんに渡してバスに乗り込む。席は適当らしい。なので、とりあえず後ろから詰めて乗ることにした。

「あれ？タカはどうした？」

バスの後ろへ行くと、栄ちゃんたちが座っていた。但し、タカちゃんはいない。それに気が付いたよっちゃんが即座に聞いていた。

「片付けに手間取りすぎて私たちまで遅れそうだったから置いてきた」

「タカなら大丈夫でしょ」

「ま、委員長だしね」

いやいや。ダメだろう。タカちゃんは大丈夫なのだろうか。

「まあ、席も取ってあるから大丈夫だって。タカなら何とかするって」

栄ちゃんたちは「あはははは」と声を上げて笑う。笑っちゃダメでしょう。てか、栄ちゃんたちって結構性格ひどいな。

まあ、栄ちゃんに関してはカナイって言う問題児がいたからこそその性格かもしれないが。

それからしばらくして、時間ギリギリのところに漸くタカちゃんはやってきた。何とか間に合いましたね。

「あ、タカー。此処此処。席取ってるよー」

「栄ーっ！」

のんきな声でタカちゃんを呼ぶ栄ちゃんにタカちゃんは怒鳴る。

置いていかれたのがよっぽど辛かったんだね。

まあ、そうだよな。普通置いていかれたら悲しいよね。

それでもタカちゃんは取っておかれた席に座る。そこで、漸く私やよっちゃんに気が付いたらしい。

「あれ？片桐さんにヨシ。結構早くにバスに来たの？」

「うん。タカが荷物をまとめるのに苦労している間にね」

「相変わらずヨシは嫌な性格だな」

「タカに言われたくない」

見事にバトル開始ですね。とりあえず、止めるべきかな。そう思
って栄ちゃんたちの方を見る。栄ちゃんは笑っていた。

「大丈夫だつて。この二人の言い合いもいつものことだからさ」

「そうそう。珍しくないことだし。それに、これで二人とも楽しん
でるんだつて」

そうなのか。でも、気になる。そんな気持ちを讀まれたのか、栄
ちゃんがニヤリと微笑みながら私に言う。

「気になるんでしょ」

「うっ！」

図星だ。すごい気になるんだ。

それが表情で分かったのか、栄ちゃんは二人の喧嘩を止める。栄
ちゃんはいとも簡単に二人の喧嘩を止めてしまった。

「タカ。ヨシ。これ以上喧嘩続けるつもりなら本谷先生に言うよ。」

二人揃って怒られる？ていうか片桐さんが気にしてるから。いい加
減ヤメロ」

それを聞いた二人の動きが一瞬にして止まる。やはり二人とも本
谷先生は脅威のようだ。まあ、分かるけどね。確かに本谷先生怖す
ぎだしね。

そうやって話していると、丁度良く本谷先生が乗車してくる。外
での先生たちの話し合いは終わったようだ。

私たちの集まっている状態に本谷先生はあっさりと気付く。これ
はやばいかな。

「おや。加々見、谷戸。あなたたち、何かしてましたか？雰囲気
怪しいですよ」

バレてーら。これはヤバイ。修学旅行初日の脅しが実現するのか。
よっちゃんたちのせいで私たちまで被害喰うのは嫌だよ。連帯責任
はきついよ。

「まさか、また喧嘩ですか？初日に言ったこと、覚えています？」

「や、やだなあ先生。私たち、喧嘩なんてしてませんよー。ねえ、

ヨシっ」

「そ、そうだよ。ね、るうちゃん」

え！？私に振らないですよ。私、この状態で嘔吐くのへたなんだか
ら。ドイツにいる時もこれで嘔吐けずにバレたんだよ。

「片桐さん。どうなんですか？」

「あ……………つうつうつう」

「何も唸らなくても。本当のことを言ってくればいいんですよ」

先生はニツコリ笑いながら私に話しかける。でも、目が笑ってい
ない。怖い。

どうやって逃げようか。私が答えれば、間違いなくバレる。よし、
こうなったら。

「その答えは栄ちゃんがくれます」

嘘が上手そうな栄ちゃんに任せよう。私じゃ無理だ。

それを聞いた栄ちゃんが意味を汲んでくれたようで、淡く微笑ん
だ。

「さて、ではどうなんですか？鳳さん」

「してませんよ。いつもみたいに二人でじゃれあってただけですか」

見事。一切嘘と感じさせること無く言い切った。まあ事実、喧嘩と感じていなかったただけかもしれないが。

だがとりあえず、先生は騙せたようだ

「それなら構いません。実際に喧嘩をしていたのならばバスの中で延々とお説教の予定でしたが」

騙せてよかった。騙せなかったらバスの中で疲れきる現象がクラス全員に起こっていたことでしょう。

私はそれで間違いなく体力使い果たして大村市の観光が出来なくなっていただろうと思う。ホント、よかったよ。

そしてバスは出発する。高速を使って大村市へと向かった。

大村市へ着くと、大村純忠に関連する場所へ向かう。大村純忠とは日本初のクリシタン大名だった人だ。

私たちはまず、三城城跡さんじょうへ向かった。三城城とは大村純忠の築いた城で、寛永14年に幕府の命令で廃城となった城だ。

この城は長崎に石垣で城を築く技術が入る前に築かれた城らしい。石垣ではなく土塁や空堀に周囲を囲まれていた。

その後は大村純忠終焉の居館跡へ向かった。別名坂口館と呼ばれていて、昔は大村家の重臣である庄頼甫の屋敷とも言われていたらしい。のちに龍造寺隆信の圧迫を受けて領主の座を退いた大村純忠が晩年に隠居した屋敷らしい。

それは、今は公園となっていた。

その観光まで終わらせると、後は帰るだけだ。私たちは空港へ向かう。空港へ着いた私はもう疲れきっていた。

飛行機の搭乗手続きはあとどれくらいしたら始まるんだろう。と
りあえず、眠いなあ。

そんな私の様子に気が付いたのか、由里先生が私の元へやってくる。そして、横に座った。

「琉嘉ちゃん。疲れた？」

「……………うん。疲れた。眠いよ」

「搭乗手続きまでまだ時間あるらしいからしばらく休んでなさい」

「うん。おやすみ……………」

体力の限界が近付いていた私は、あっさりと由里先生の提案にのる。そして、由里先生の肩に頭を乗せて、目を瞑った。あっさりと眠りの世界へと旅立つ。

もう、ダメだ。限界。

ただいま

「片桐さん、どうしたんですか？」

「疲れて眠ってるだけです。大丈夫です」

どれくらいの時が流れたのだろう。本谷先生と由里先生の声が聞こえてきた。一体何の用だ。

「ん……………」

「おや？起こしてしまいましたか？」

私がつつすらと目を開くと、本谷先生が申し訳なさそうな声で話しかけてきた。

「おはよう、琉嘉ちゃん。調子はどう？」

「おはよ、由里先生。私、何分くらい寝てた？」

「大体30分くらいかな。もうすぐ搭乗手続き始まるらしいから起きててね」

「うん」

30分くらいしか寝てなかったのか。結構長く寝ていたような気がしていたのだが。

でも、もうすぐ搭乗手続きが始まると言っのなら丁度いい。そのまま起きておかなくては。

そしてそれから少しして搭乗手続きが始まる。私はよっちゃんと一緒に手続きをして、飛行機に乗り込んだ。席はまたよっちゃんの隣だ。

ちなみに今回は、右隣はよっちゃん。左隣は栄ちゃんだった。よっちゃんが窓際で、その次が私。その隣が栄ちゃん。その横はタカ

ちゃんだ。

中々面白い顔ぶれになりましたね。

「谷戸。お弁当を加々見まで回してください」

飛行機に乗ってしばらくすると、先生がお弁当を配り始める。そのお弁当を受け取ったタカちゃんは順番にお弁当を回し始めた。

「先生ー。お弁当、食べていいんですかー？」

「いいですよ。受け取った人から食べ始めてください」

そう言われてよっちゃんは喜び勇んでお弁当のふたを開ける。それからすぐにがつがつと喰い付いて行った。

中々素晴らしい食べっぷりで。さすがは四次元胃袋の持ち主。

そして私も食べる。少しずつゆっくりと詰まらせないように食べていった。が、すぐに限界は訪れる。もうこれ以上は食べられない。

「あれ？もう食べないの？」

「うん。もうお腹いっぱいだよ」

「じゃあ、貰っていい？」

私が「うん」と返事をすると同時に、反対隣からも声がかかる。あなた方も欲しいんですか。

「うん。ヨシにだけ食べさせるのはいやだから私たちも欲しい」

「単純に私は食べ足り無い」

ちなみに、前者は栄ちゃん。後者はタカちゃんだ。

私は三人にお弁当の残りを分けてあげる。喧嘩にならないよう出来るだけ均等に分けた。

そして私は薬を飲む。忘れてたら後が怖いので忘れる前にさつさと飲んだ。

それからしばらくは暇だ。どうせ着くまでに時間がかかるんだから、もう一度寝よう。そう思って私はのんびりと自身を夢の世界へと誘った。

起きたのは、それからおおよそ1時間後。もうすぐで着くと言う時に起こされたから大体そんなものだろう。

「るうちゃん。もうすぐ着くよ」

「んー」

「眠たいのは分かるけど、起きて」

最初によつちゃんが私に声を掛ける。それに反応すると、今度は栄ちゃんが声を掛けてきた。ああ、眠たい。

でも、此処で寝ると起きられないので根性で起き続ける。眠い。それからまもなく飛行機は空港へ着陸した。

空港へ着くと、まずは整列をして、先生の話が始まる。面倒くさい。

それが終わってから漸く学校へ戻る。学校へ戻るとついに修学旅行の終了だ。

「さて、ではこれからバスで学校へ戻ります。学校へ戻ったらそのまま解散です。解散した後はみなさん気をつけて家に帰るように。家に着くまでが修学旅行ですからね」

遠足の定番文句ですね。だが、ついに終わってしまう。足掻かないと決めていても、やはり少しは辛い。

でも、足掻かないと決めた以上、足掻かないよ。絶対に、足掻かない。ちゃんと終わらせる。

それから学校へ戻ると、完全に解散だ。バスを降りて荷物を受け

取ると、由里先生が隣へ来る。

「さ、病院に戻るうか？」

「……………」

「戻ろうね？」

「……………うん」

戻りたくないな。またつまらない日々が帰ってくるのか。

「あれ？るうちちゃん、もう帰る？」

「うん。そうっポイー」

「ちよっと待ってよ。写真撮ろう。みんなで1枚だけ」

そう言われて私は由里先生を見る。いいかな。

「いいよ。行っておいで」

すると、割かしあっさりと許可が下りた。私は先生の気が変わらないうちにみんなの元へ向かう。

「るうちちゃん、此処だよ。真ん中」

「え？」

みんなに元へ向かうと、すでに場所は埋まっていた。残っているのはよっちゃんに指示された真ん中しか残っていない。

仕方なく真ん中に行くと、すぐに先生がカメラを向けた。

「みなさん、レンズをしっかり見てくださいね。いきますよ。はい、チーズ」

カシャ。

カメラはいい音を立ててシャッターを切る。最高の思い出が出来た。

「では、写真は後日みなさんに配りますね」

先生がそう言って、完全に解散した。その後に由里先生の元へ向かうと、既にお母さんが迎えに来ていた。荷物は既に積まれている。私は急いで乗り込んだ。

「修学旅行は楽しかった？」

「うん」

車に乗り込むとすぐにお母さんに問われる。私は即座に肯定の意を返した。すると、お母さんは優しく微笑んだ。

「よかったわね。これでしたらくは大丈夫かな？」

「……………何が？」

うわあ。何だか嫌な予感。ものすごく嫌な予感。途轍もなく嫌な予感。

「屋上行くの、我慢できるわよね？」

それは反則でしょう。それはそれ。これはこれ。一切合切何にも関係ないではありませんか。

屋上は行きますよ。禁止されようが何しよようが行きますよ。ていつか、私から屋上を奪おうだなんて愚の骨頂。奪われてたまるか。

「無理」

「無理じゃないでしょう?」

「無理なものは無理」

「我慢しなさい」

「ヤだっ!」

あつさり即答したら我慢するよう言われる。無理に決まってるじゃないか。無理やり言うことを聞かせようだなんて、甘いね。私はそう簡単に屈服しないもん。

そう思っているとお母さんが深い溜め息を吐く。私悪くないもん。………今回は。

「まあまあ。今は琉嘉ちゃんも疲れているでしょうからこの辺で。この話は明日にでもしましょう」

睨みあいを続けていると、見かねた由里先生が制止の声を挟む。てか、明日に延期させるだけじゃないか。面倒くさい。

だが、これで反論しようものならお母さんがどれだけ怒るか分からないので一応大人しく聞いておくことにする。

本音は、面倒くさい。

「それでいいわね?琉嘉」

「んー」

一応、曖昧ながらも返事を返す。さて、明日は逃げるか。屋上なり玲君の病室なり、トイレなり。

逃げる場所がたくさんあるっていいよね

でも、社会ってそんなに甘くは無いのが常。お母さんに先に釘を刺される。

「琉嘉。逃げないのよ?逃げたら病院でお説教だからね」

怖い。お説教って何時間単位ですか。とりあえず、逃げたら恐ろしいことになる。でも、逃げたい。

でも、逃げたらお説教確定。……………どうしよう。

究極の選択肢。お説教覚悟で逃げるか、逃げずに屋上禁止の話し合いをするか。とりあえず、屋上は禁止されても行くけど。

ああ、明日熱出ないかな。そうすればその面倒くさいお話も無くなりそうなのに。ま、無理だろうけど。

そうこうしている間に病院に着く。もう着いてしまった。面白くない。

病院に着くと、まず、病院で必要なものだけを降ろす。必要ないものはお母さんが持って帰るのだ。

「あー、戻ってきた」

私が車から降りて病院を眺めながら言うと、由里先生がニッコリ笑って此方へ近付く。……………何だ。

「さ、明日からまた病院で安静にしてなきゃね。もちろん、ちゃんとするよね？」

「……………」

危険を感じたのはそのせいか。わざわざ釘を刺すか、こんにゃろ

う。

「琉嘉ちゃんいい子だから先生助かるなあ」

うわあ。なんてわざとらしい。いい子じゃないのはこの間の家出で証明済みだろうに。それでなおいい子呼ばわりか。

そうしている間に私は病室に辿りつく。病室に戻った私はまず着

替えて、ベッドに横になった。

あー、このまま目を瞑れば寝てしまいそうだ。でも、今寝たら間違はなく夜眠れなくなるだろう。それを避けるためにも今は寝ないようにしなきゃ。頑張って目を開けておかなくちゃ。

ああ、でも、瞼が重いよ。すっごく、眠いんだ。やっぱり疲れてるんだろうね。疲れてるから体が寝るよう命令してるんだ。

でも、逆らおうか。夜のために。でも、逆らえない気もする。どんとと瞼が落ちる。

それを止めてくれたのは、ノックの音だった。ノックの主は、堤さんだった。

「琉嘉ちゃん、今大丈夫かな？」

「堤さん。グッドタイミング」

私が出ると、堤さんは不思議そうな顔をする。まあ、当たり前。でも、眠気覚ましに丁度よかったんだ。

そして、堤さんの手にあるものを見る。それで、どうして来たのかよく分かった。点滴ですね。修学旅行中に出来なかった分を今するんですね。分かります。

「琉嘉ちゃん。手出して」

そんな堤さんの言葉に私は逆らわずに手を出す。この状況で逆らえるわけが無い。

私は大人しく手を出した。それと同時に、相変わらず慣れることのない嫌なおいが漂う。ホント、いつになっても慣れることが出来ない。

私はそのに耐えかねて、顔を顰める。それを見た堤さんは私の頭を撫でた。落ち着く。でも、やっぱりこのにおいは嫌だ。

そして少しして漸く嫌なおいは消え去る。スッキリした。そし

て、このにおいのおかげでばっちり目は覚めた。ちよつとやさつとじゃ寝ないぞ。

それから点滴が終わるまで、私はのんびりと本を読んですごした。そうでもしないと暇すぎてしょうがないからだ。

そして、点滴が終わり、夕飯の時間が来て、夕飯を食べる。それから私は消灯の時間を待たず、眠りに着いた。

もう、いいでしょ。今眠るなら、朝まで起きないでしょ。だから寝かせて。もう限界なんだ。

翌日、朝。

「琉嘉ちゃん。朝だよ。起きて起きて」

「ふみ？」

朝。堤さんの呼ぶ声で目が覚める。もう朝か。朝なのか。

昨晩は夕飯を食べてすぐに眠りに着いたというのに、まだ寝たり無い。寝すぎって言うくらい寝たような気がするのに寝たりない。何故。

「おはよう、琉嘉ちゃん。調子はどう？」

「……………眠い」

私はそう言ってまた枕に頭を戻す。そのまま眠りにつけそうだ。

「ちよつ！とりあえず、朝ごはん食べて、薬を飲んでから寝て！」

「んー。無理。もう、ダメ……………」

そして私の意識は途切れる。すやすやと夢の世界に入り込んだ。

「琉嘉ちゃん起きてー」

「琉嘉ちゃんーん。琉嘉ちゃん？大丈夫？起きれる？」

どのくらい眠ったのだろう。堤さんと由里先生が私を呼んでる。でも、眠いんだよ。私の眠りを妨害するな。

でも、このまま寝かせておいてはくれないらしい。先生たちは私が起きるまで呼び続けるつもり模様。

「琉嘉ちゃん。このまま寝てたら夜眠れなくなるから起きなさい」「んー……………」

五月蠅いんだよ。私は眠い。眠たいんだ。

黙らせるためにとりあえず、目を開ける。光が眩しい。

「おはよう、琉嘉ちゃん。そろそろ起きようか」

「おはよ……………、せんせーと堤さん」

「あら。まだ眠たそうだね。でも、これ以上寝ると夜寝れなくなるから起きててね」

私が目を開けると、それを確認した堤さんが私に体温計を渡す。

私は体温の計測をしながら由里先生との会話をしていた。

そして、計測が終わる。結果は至って普通。平熱だった。

「琉嘉ちゃんが起きたところで診察しましょうか。お腹出して」

そして聴診器をいろんな場所に当てる。ああ、この冷たいのがあたってはまだ眠たいよ。目が覚めないよ。まだ、寝たい。

そう思っていると、釘を刺される。あー、はいはい。頑張つて起きておきますよ。とりあえず、診察終わったら目覚ましに顔を洗に行かなくちゃ。

そして問題なしで診察を終える。それを確認した私はベッドから

降りる。顔を洗いにいくんだ。

そして部屋を出ると、ちょうど玲君と遭遇した。私の病室へ来ようとしていたらしい。

「あ、おはよう、琉嘉。体は平気？」

「おはよー玲君。平気だけど、どうして？」

「だって、さつき堤さんと琉嘉の担当の先生が来てたたる？いつもはもっと早くに来てるのに今日は遅かったから何かあったのかと思つて」

ああ、だからか。ていうか、玲君、結構私のこと見てるんだな。

………ヤバイ。自分で言つてて恥ずかしくなってきた。顔が熱い。

「琉嘉。顔赤い。本当に大丈夫なのか？」

「だ、大丈夫っ！とりあえず、私顔洗つてくる！！」

これ以上玲君と一緒にいたらヤバイ。私は逃げるように顔を洗いに向かった。

無事に着いて顔を洗つと、一気に熱を持った顔が冷える。気持ちがいい。同時に目も覚めた。

それから病室へ戻ると、玲君が側の椅子に座って待っていた。暇なんだね。

「よ。お帰り、琉嘉。修学旅行の話、聞かせてくれ」

「ああ、玲君の目的は修学旅行の思い出ですか。どこから話して欲しい？」

「どこからつて？」

「まず、長崎空港まで。次は、長崎の食事。次はホテル。そのあとは自由行動。あと、大村市。さ、どれがいい？」

「とりあえず、最初から」

そうして私は話しを始める。

「とりあえず、最初の長崎空港までの感想。カナイがウザかった」
「……………」

はい、引きましたね。でも、真実だ。カナイが飛行機内で話しかけるからウザイったらない。

私が言うと、玲君はケラケラと笑う。笑われたくは無いぞ。その後は長崎の食事、皿うどんの話をする。その後はホテルの一件。よっちゃんとカナイの姉、栄ちゃんの一戦。

そのあと修学旅行の話を少しずつ、話せる範囲で話して言った。玲君は楽しそうに聞いている。

「結構面白かったみたいだね」

「うん。カナイの妨害がなければ本当に面白かったよ」

「ははっ」

私がカナイのことを話すと、玲君は苦笑する。ていうか、ホントカナイって迷惑すぎる。

でも、カナイを黙らせる方法は分かったからいい。玲君に言うと、
「またも玲君は苦笑する。」

「ちなみに、どうするんだ？」

「カナイの双子の姉の栄ちゃんに相談する。カナイは栄ちゃんには勝てないらしいからそれでイける」

それから私たちは笑う。ありがとう栄ちゃん。君がいてくれるおかげで私はカナイの迷惑に対抗できる。

今後はカナイが迷惑起こしたら栄ちゃんに報告しよう。よっちゃんもそれがいいって言ってたし。

それからしばらくして、お母さんが来る。……勝負の時間かな。

「玲君。悪いんだけど、今日は病室に戻っててくれる？」

玲君は最初何も分からないような顔をしていたが、すぐに分かったらしく、何も言わず、微笑んで戻って行った。

「いい判断ね」

ベッドの側の椅子に座ったお母さんは口を開く。……怖いな。

これは、逃げようが逃げるまいが結局怖い目に遭う運命にあったんじゃないか。

……逃げればよかったよ。どっちみち、こうなる運命ならば。

「さて、昨日の続きを話しましょうか」

「屋上禁止は聞かないからね」

「我慢しなさい」

「嫌だつてば」

「しなさい」

「いやーだっ」

やっぱり考えは変わらないか。私も変えないけど。私は禁止されても絶対に屋上へは行くぞ。絶対だい。

それでもお母さんは諦めない。意地で私を屋上から引き離そうとしているようだ。

「絶対にやだ」

「嫌じゃないでしょうっ?」

「嫌」

「いい加減にしないとお母さん怒るわよ？」

「いやーだっ！」

それでも私も諦めない。屋上に行くためなら何でもやるぞ。絶対に諦めてたまるか。屋上は私のオアシスなんだ。

「いい加減にしないで。怒られたいの？」

「怒られたくはないけど嫌だ」

お母さんは深い溜め息を吐いた。そして、言う。

「これはあなたのためなの。分かってちょうだい」

「無理だよ。私にとって、屋上はオアシスなんだから」

私が言うと、お母さんが寂しそうな顔をする。止めてよ。そんな顔、見たくはない。

これは、私の自分勝手。引くことは出来ない、ただの私の自分勝手なんだ。

私は屋上へ行かなくちゃ、精神的に持たない。屋上で空を見ないと精神的におかしくなるんだ。

以前、しばらく屋上禁止されて行けなかった時、何も考えられなくなった。何もかも、どうでも良くなった。これはうつ病の手前の症状だったらしい。

それからは長期間の屋上禁止は無くなった。それなのに、どうして今更こんなことを言うんだ。

どうして。何が私のためなんだ。分からない。屋上を禁止されたほうが変になる。それなのに、何故。

「これからどんどん気温が下がる。その状態で長時間屋上へいた

らどうなると思う？あなたは風邪を引く。そして、体力が落ちる。その状態で手術の話が来たらどうなると思う？」

「……………。手術できない？」

「そう」

だからか。だからここまで禁止しようとしているのか。でも、屋上は私のオアシス。だからこそ、何があっても諦めるわけには行かない。

それが例え私の寿命を縮めるものであってもだ。私は、屋上へ行かないと、生きていけない。生きるために、屋上へ行く。

「お母さん、無理だよ。私にとって、屋上は生きていくための糧となるもの。無くなると、生きていけないよ」

「琉嘉……………。分かった。もうダメとは言わない。でも、ちゃんと風邪を引かないように気を付けるのよ？今まで以上にね」

「うん。ありがとう、お母さん」

良かった。屋上禁止令の発令は無かった。助かった。これで、私は生きていける。糧を失わずに済んだ。

そしてその日、お母さんは帰り、私は眠った。昏々と、深く。

明日は久しぶりに屋上へ行こう。玲君を誘って。また、屋上で玲君といっぱい話して笑いあうんだ。

ただいま (後書き)

次で最後の予定です。

サヨナラ

翌朝。

「あれ？今日はちゃんと起きてるね」

「おはよ、堤さん。昨日はよく寝たからちゃんと起きたよー」

朝。堤さんがいつものようにやってくる。堤さんは今日はちゃんと起きていて私に驚いている模様。

そして、その驚きをすぐに消して、私に体温計を渡す。平熱でした。

これで今日は何も言われずに屋上へ行ける。

その後、朝食を食べて、朝は読書に時間を費やした。のんびりとじっくりと。

昼食を食べた後は、玲君の病室へ向かった。一緒に屋上へ行くためだ。

コンコンツ。

病室の扉をノックすればすぐに「どうぞ」との声がかかる。その声を確認して私は玲君の病室の扉を開けた。

「あれ？琉嘉ちゃん。玲に用事？」

「あ、はい」

扉を開けてすぐに反応したのは確か、シンさん。名前の記憶が曖昧だ。

「玲ー。琉嘉ちゃん来てるぞ」

「分かってる！」

玲君はシンさんが言う前に飛んでくる。心臓弱いはずなのに、大丈夫なのかな。

そして玲君は急いで私の近くに来て、私の背を押して病室から出た。私たちはそのまま私の病室へ向かう。

「ゴメンな。琉嘉。俺の病室だとシンにからかわれそうだったからさ。で、今日は何の用？」

「屋上、一緒に行かないかな」と思って

「ああ。確かに今日は天気もいいし。よし、行こっか」

そして私たちは屋上へ向かう。随分と涼しくなった。さすがは秋。屋上から見える木が少しずつ色を変えている。

「気持ちいいな」

「うん。やっぱり風を直接感じるのっていいよね」

そう言いながら私たちは空を見上げる。綺麗な空。美しい空。何処までも繋がっていて途切れることを知らない空。

だから私は空が大好きなんだ。自由に空を飛び回りたい。それはいつから描いてきた夢だっただろうか。

小学校低学年の頃は純粹に空を飛んでみたかった。今は、自由に飛び回りたい。何処へでも、自由に。

「琉嘉。今何考えてる？」

「空を自由に飛び回りたいな、って。玲君も思わない？」

「思うな。自由に何処かへ出かけてみたいよ、俺は」

やっぱり玲君も思うよね。私だけじゃないんだ。

そういえば、と。玲君を屋上へ誘った本題をまだ済ませていなかった。早く済ませなきゃ。

「玲君、はい」

私はそう言つて玲君にキーホルダーを渡す。これは修学旅行のお土産だ。まだ渡していなかったんだ。

「ん？ああ、これお土産？俺にもあつたんだね。ありがとう」

玲君は優しく微笑みながら言つた。よかつた、喜んでくれて。趣味に合わなかつたらどうしようかと思つたよ。

ついでに、他の人のお土産は既に配布済みだ。というか、お母さんに頼んで渡してもらつたのだ。

だつて、出れないし。出してもらえないし。しばらくは外出許可下りないだろうな。あー、面白くない。

なので私はゆつたりと空を見る。そんな感情を忘れるためにも、じっくりと。

「るーか。そんな面白くなさそうな顔をしながら空を見るなよ。雨降るぞ？愚痴なら聞いてあげるから言つてごらん」

「んー。これではばらくは外出許可下りないだろうなーと思つてさ」

「ああ。それはそうだろうね。修学旅行で何日も病院を離れてたんだし」

「偶にはお散歩くらい行きたくならない？」

それを聞いた玲君は笑う。笑いすぎつてくらいに笑う。何故。

「あー、笑つた笑つた」

「どうして!？」

「いや、琉嘉はいい子だなーと思つてさ」

いい子？どこが？いきなり病院抜け出して行方不明になってしかも日本じゃなくてドイツに逃げた私の何処がいい子ですと？

「自虐的だな、琉嘉。琉嘉はいい子だよ。抜け出して散歩に行こうって言う考えは無いんだろう？」

「……………うん。それやったら怖い人がいるから」
「成程」

だって、そんなことをしようものならまずはお母さんから地獄のお説教が来て、そのあとは堤さん、由里先生。ヘタすればお父さんからも説教が来るんだ。

それなら、しない。せすにお説教を喰らわない手を選んだほうがマシ。玲君にそれを伝えるとまたも笑う。

「確かに堤さんが本気で怒ったら怖そうだね。俺たちが一緒に抜け出したら一緒にお説教か？あっはっは」

「笑い事じゃないよ。私はそれにお母さんと由里先生。ヘタすればお父さんまで来るんだよ？」

それがどれだけ恐ろしいことか。やらなきゃ良かったと後悔するだけじゃ絶対に済まない。それ以上に恐ろしいことになるハズだ。

それだけは避けなければ。あんな怖いのはもう見たくはない。後ろに阿修羅を降臨させて怒るお母さんはヤバイんだ。

「今度、実験してみる？」

いえいえ。遠慮します。やるなら玲君一人でどうぞ。私は怒られるのは嫌なのでやりません。やるならちゃんと許可を取ってからにします。

「なーんだ。面白くないなあ。せつかく面白いことが起こるかと思つたのに」

「……………玲君、退屈だったんだね」

「うん」

即答ですか。それほどまでに退屈だったのか。だからって、こんな怖いお誘いは止めてください。本気でお母さんに怒られるくらいなら私は死を選ぶよ。

セシルに墓前で文句を言われようが何だろうが、お母さんの本気のお叱りよりはよっぽどマシだから。

「さて、これ以上気温が下がる前に戻ろうか。風邪ひいたりしても大変だし」

「そだね。また風邪ひいて堤さんに色々と言及されたくないし」

「されたのか？」

玲君は目をまん丸にして言う。ええ、されましたとも。見せ掛けの笑顔を貼り付けて、目だけは笑っていない状態だね。

それがどれだけ恐ろしかったことか。熱がある状態であれをやられたら結構精神的にキツイです。

それを玲君に言つと、またも笑う。今日の玲君はよく笑うな。疲れないのかなあ。

「あー、笑つた笑つた。疲れた。さ、戻ろう？」

玲君は片手は自分の笑いすぎて出てきた涙を拭うために使い、もう片方の手は私に差し出す。私は遠慮なく玲君の手を取り、立ち上がった。

そして病室の前で別れた。さ、スッキリしたし、私は勉強のお時間ですね。

そう思って私は参考書やノートを取り出す。何処を受けるか未だに決めてはいないけれど、勉強だけはしなくては。

今のところ候補はまず、おじいちゃんの学校。それか、近くの公立高校だ。多分、おじいちゃんの学校になるんだろうケド。

「さて、やりますか」

私は近くのiPodを取り出し、セットする。集中するためだ。そして集中できたらとりはずし、真剣に勉強に取り組んだ。

それからしばらくして、病室の扉が叩かれる。お母さんかな。

「琉嘉。入るぞ」

「……………お父さん」

来たのはお父さん。久しぶりだ。修学旅行から帰ってきて始めて会った。

「久しぶりだな、琉嘉。修学旅行は楽しかったか？」

「久しぶり。うん、すっごい楽しかったよ」

とここで、お父さんが漸く私の出した参考書やノートの存在に気が付いた模様。少し居たたまれなさそうな表情だ。

「勉強の邪魔したみたいだな。悪い」

「んー。いーよ、別に。久しぶりにお父さんにあえて嬉しいし」

「そうか。ああ、そういうえば、琉嘉。お前、高校はどうする？おじいちゃんの学校へ行くか？」

来たか。避けられないその話題が。どうすればいいのか未だに分からない。本当にどうすればいいんだ。

「それとも、他に行きたい学校があるのか？」

「特に無いけどさ……。ただ、どうすればいいのかなーって」

「最後はお前が決めなきゃいけないことだが、お父さんとしてはおじいちゃんの学校に行つて欲しいぞ。そこなら李旺もいるし、叔父さんが先生としてはたらいるから、琉嘉に何かあつたらすぐ分かるしな」

そこまで言われたらおじいちゃんの学校以外に選択肢がなくなる気がします。でも、よっちゃんもおじいちゃんの学校に行くつて言つてたんだよね。なら、それでいいような気もするけど……。

「もう少し考えさせて」

「ゆっくり考えるといい。一生を左右するからな」

難しい。難しすぎる。どうすればいいんだ。

その後、お父さんは修学旅行の感想を聞きたがり、私は少しずつ話した。その話を聞いているお父さんは楽しそうだ。

「本当に楽しかったみたいだな。よかったよ。まあ、そのカナイ君とやらは気になるが」

「あー、カナイね。あの迷惑男」

やっぱりお父さんも気になるよね。でもまあ、それを忘れるくらいに楽しかったからいいや。気にしない。気にしたら出てきそうだし。

それからお父さんが帰るまでずっと、私は修学旅行の話しを続けた。お父さんはニコニコ笑いながら、偶に相槌を入れながらずっと聞いていてくれた。

「さて、時間も時間だし、お父さん、そろそろ帰るよ」

「あ、もうそんな時間？早いなあ」

「話をしていれば時間なんてものはあつという間に過ぎ去っていくものだ。じゃ、また今度な」

お父さんはそう言って病室を出て行く。また静かになった。勉強をしようにも、夕飯までの時間が無さ過ぎてやる気が出ない。どうしよう。

結局、その夕飯までのわずかな時間は、ベッドにゴロゴロして過ごした。

それから夕飯を食べてまた勉強だ。受験がどうなるにせよ、一応頑張っておく。受験生だし。

それからテレビを見て、寝た。受験生だってテレビは見たいんだ。そうしている間に、時は流れる。あつという間に年が明けた。受験まで時間が無くなって来ていた。

「本当にそれでいいんだな？」

「しつこいなあ。よくなければこうやって話さないよ」

「分かった」

年が明けて、私は進学先をおじいちゃんの学校に確定させた。理事長推薦で、面接を受けるだけでいいらしく、今まで以上に勉強をする必要は無くなった。

「琉嘉あ。琉嘉、俺の後輩になるんだって？」

「玲君。うん。推薦に通ればそうなるね」

「通るだろ？理事長推薦だし」

「まあ、おじいちゃんだしね」

そう言って、私たちは私の病室で笑う。そうやって話すのは大体

が私の病室。玲君の病室で笑うことはない。

だって、行ったらすぐに此処に戻ってくることになるし。玲君が嫌がって戻ってきちゃうし。

「ま、受かったら一緒にレポート作成しようか」
「そだねー」

そう言っただけ私たちは笑う。

このときは、まだ何も知らなかったんだ。これからずっと、こうやって笑い会えると思っていたんだ。

そんな楽しい時間は、ある一つの現象で崩される。
今まで時間をかけてゆっくりと積み上げてきたものも、その一瞬で全て崩れ去っていくんだ。

「いつ……………!?!」

それは、突然。

「くっ……………はっ……………」

油断している時にやってきた。

「ぐ……………あああつ!?!」

発作。突然の発作。

痛い。心臓が痛い。苦しい。息が出来ない。
堤さんと呼ばなきゃ。由里先生と呼ばなきゃ。
痛い。苦しい。辛い。

死にたい。違う。生きたい。

コンコンッ。

病室の扉がノックされる。誰。誰でもいい。助けて。

「琉嘉？……………っ！！」

誰？涙でうまく顔が見えない。音も、聞こえづらい。誰。

「堤さん！琉嘉が発作起こしてる！！早く！早く来て！」

玲……………君？痛いよ。助けて。痛いんだ。

「琉嘉。すぐに堤さんたちが来る。だから、頑張れ。死ぬな！」

「う……………あぁっ！！」

「琉嘉！！」

ダメだよ。痛いんだ。苦しいんだ。目の前が真っ暗になる。でも、それは一瞬。堤さんの呼ぶ声で目を開く。

「琉嘉ちゃん！意識を手放さないで。しっかりこっちを見て」

「っ……………つみさ……………」

「すぐに先生も来るからね。それまで我慢して！」

痛い。痛い。痛い。意識を手放してしまいたい。でも、ダメだ。

堤さんは意識を手放すなと言った。なら、そうしなきゃ。

でも、もう無理だよ。目の前が暗い。もう、ダメだ。

どこかから由里先生の声が聞こえる。でも、もうダメだよ。限界なんだ。

そして、私の意識は途切れた。

ツ。

機械の音が聞こえる。「ツ」という音がずっと続く。これは何の音だ。

……そうか。私は死んだのか。あの後そのまま、死んでしまったのか。じっくりみてみれば、ベッドに私が横たわっていた。

何だよ。生きたいと思っただのに結局死んだのか。手術、間に合わなかったじゃないか。生きたかったよ。高校生になりたかったよ。中学の卒業式、参加したかったよ。

「心臓マッサージ！」

「はいっ」

由里先生と他の名前を知らない先生たちが必死で心臓マッサージをする。もう、いいよ。私は死んでるんだ。もう無駄だよ。

「まだまだよ」

「……………琉衣？」

「そう。まだだ。まだ少しくらいなら持たせられる。最後の言葉を伝えておいで」

いきなり現れて何を言ってるのやら。私は死んだ。それでいい。

「まだだ。ちゃんと伝えてくるんだ」

「無理だよ。出来っこない」

「大丈夫。僕が助ける。あまり持たないけど、最後の言葉を伝えるくらいは出来るはずだ」

出来るのか。なら、戻る。お母さんたちに言いたいことがある。玲君に伝えたいことがある。だから。

だから、私は再び生きる。たとえ短い時間しか生きられなくても、

それでも生きるよ。

ピッ。……ピッ。ピッ。ピッ。

「……！琉嘉ちゃん！？」

「ゆり……せん……せ……」

息が苦しい。でも、伝えなきゃ。

「おか……さ……たちは？話……した……い……」

「ちよっと待ってね」

由里先生はそう言ってすぐにお母さんたちを呼ぶよう指示をする。それから然程経たずにお母さんたちがやってきた。

「琉嘉！」

「おか……さ……と……と……さん。りお……に……」

早く、伝えなきゃ。長くは持たない。キツイ。辛い。だから。

「今……まで、ありが……と。大好き……だよ……」

「琉嘉！？」

お母さんたちの目が丸くなる。いきなりこの言葉が来るとは思っていなかったのだろう。でも、これは真実。

「れ……くんにも……伝え……て。ずっと……好きだよ……
て」

「そんなこと言っな！それはお前が自分で言っんだ」

無理だよ、お兄ちゃん。だから、私はお兄ちゃんたちに託すんだ。
ああ、琉衣からの伝言も伝えなくちゃ。お母さんたちに。ちゃんと伝えなくちゃ。

「おか……さん」

「ん？なあに？」

お母さん、涙目だ。声も震えてる。

「琉衣……が、おかし……たち……につ、お礼……言っ……た。
名前……ありがと……って」

「……！」

それを聞いたお母さんの表情が驚きのそれに変わる。当たり前か。
それは、私の知るはずの無いことなのだから。

「これも……ね、琉衣が……助けてくれた……だよ。最後の言葉……
……伝えておいで……て。でも、も……時間ない……ぼい……ね」

目の前が暗くなる。苦しい。息が吸い込めない。苦しい。
もう終わりか。でも、ちゃんと伝えるべきことは伝えた。もう、
十分だ。

「琉嘉！死ぬな！生きる！」

私は、目を瞑る。もう、無理だから。

そして目を開けると、また、上から私自身を見ていた。

「1月12日、午前7時26分。ご臨終です」

由里先生の声が、私の死を告げる。

今日は12日だったのか。あれから1週間近く経っている。私は1週間近くも寝ていたのか。

ああ、お母さんが泣いている。お父さんは涙を堪えている。お兄ちゃんも、涙を堪えている。やっぱり、私は死んだのか。

信じたくなかった。でも、真実だ。私は、死んだ。それは覆しよ
うのない事実。

「来ちゃったね、完全に」

「琉衣」

気が付くと、琉衣が私の目の前にいた。私が死んだから出てきたのだろうか。

「まだ来て欲しくなかったんだけどなあ。仕方の無いこととは言えども」

「私だってこんな早くに死ぬ予定は無かったよ。手術も受けるつもりだったし」

「分かっている。君のせいじゃない。でも、やっぱり僕も悲しいんだよ」

私のせいじゃない。そう言ってくれるだけで嬉しい。私が死んだのは私のせいじゃない。つまりは、天命。

「琉嘉。ちゃんと僕の伝言、伝えてくれてありがとう。ずっと、言いたかったんだ」

「最後に話をさせてくれたんだから、それくらい普通だよ。気にしないで」

そうだよ。私は琉衣のおかげでみんなに最後の言葉を残すことが

出来た。ちゃんと、お礼を言うことができた。だから、いいんだ。
寧ろ、私がお礼を言わなくちゃ。ありがとう、琉衣。

「琉嘉」

話を終えてふと私を見てみると、玲君が来ていた。お兄ちゃんが呼びに行ったのだろうか。玲君が、私の遺体の前で立ちすくんでいる。

「な……………んだよ。死んだのかよ。生きてって言ったのに…。俺、あの時死ぬなって言ったのに……………」

玲君の目から涙が溢れ出す。

「何で、先に行くんだよ！お前は俺をまた一人にするのかよ……………」

玲君は完全に泣き崩れた。そんな玲君にお兄ちゃんが優しく声をかける。

「玲斗。誰が一人だ？俺がお前を一人にすると思うか？」

「は？」

「一人になるのが嫌なら俺がいてやる。俺は健康だから先には死なんぞ？」

「……………ははっ。『ふたつの魂が、嗚呼、俺の胸に宿っている』ってか？」

「…ゲーテのファウストか。いい趣味だ」

「さんきゅ」

泣いていた玲君が呆れて笑う。でも、それで涙は無くなったようだ。

よかった。やっぱり玲君には涙は似合わない。笑っているほうが似合う。

「ああ、そうだ。忘れる前にちゃんと言っておかなきゃな」

「何をだ？」

「琉嘉の最後の言葉。『ずっと好き』だそうだ。よかったな」

玲君。あなただけではどうか幸せで。あなたは私みたいに早く死なずに、出来るだけ長く生きて。だから。

お兄ちゃん。玲君を一人にしないで。私の大好きなお兄ちゃん。

玲君がいればお兄ちゃんも一人になることはない。だから。

お父さん。お母さん。二人より早く死んじゃってゴメンね。もっと生きたかったよ。迷惑かけたぶん、返したかったよ。でも、もう無理だね。だから。

彩ねえ。伯母さん。一緒に遊びに行くの、楽しみだったよ。いつも。実際、楽しかった。これからも何度も遊びに行きたかった。感謝してる。だから。

おじいちゃん。おばあちゃん。おじいちゃんの学校に行くことを決めてすぐ死んじゃってゴメン。いつも本を買ってきてくれるの、嬉しかったよ。だから。

堤さん、由里先生。いっぱい心配かけたり面倒かけたりしたのに優しく接してくれてありがとう。堤さんたちのおかげで、病院生活が少しは楽しくなったよ。だから。

本谷先生。毎週毎週、ノートのコピーをとってきて、解説までしてくれてありがとうございました。おかげで随分と助かってました。だから。

よっちゃん。小さい時からずっと一緒だった親友。大好きだったよ。高校生になっても一緒にいたかったよ。でも、もう無理だから。

だから、どうか、みんな幸せで。私は死んだ後も、みんなの幸せ

をお願い続けているから。ずっと、ずっと。

「さて、行くところか？ 琉嘉」

「うん」

そして、私は琉衣と共に天国へ旅立った。

これから神様に体を返しに行くよ。

それから眠ろう。

次に新しい生を受けるまで、昏々と。

いつか、玲君が言ったように。

私は、眠るんだ。

そして願わくば。

私の次の転生先が、玲君、お兄ちゃん。

あなたたちの側でありますように。

出来ることなら。

玲君。お兄ちゃん。

私はあなたたちどちらかの子供として、新たな生を受けたいです。

もちろん、琉衣も一緒に。

私たちは切り離せない絆で繋がってる。

だから。

だから、また会いましょう。

その時まで、さよなら。

神様。 15年間お借りした体を今お返しします。

FIN

サヨナラ（後書き）

これで完結です。

読んでくださった皆さん、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5897q/>

空の欠片

2011年2月25日09時51分発行